
白桃シロップ

黒咲彼岸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白桃シロップ

【Nコード】

N8467U

【作者名】

黒咲彼岸

【あらすじ】

ある日、自称名探偵の白藤桃は惨殺死体を発見する。それは数年前自分と恋人が容疑をかけられた事件とよく似ていて 刑事ドラマであるような取り調べのシーンなんて、フィクションというフィクサーを取り除けば、もはや目を覆うような大惨事だ。自分達の周りに再び持ち上がった疑惑を払拭するため、2人（といいつつ1人）の犯人探しが始まった。【キーワードは「最後に愛は勝つ！」】

1、プロローグ 名探偵の椅子取りゲーム(前書き)

ルビのズレはご容赦ください。

1、プロローグ 名探偵の椅子取りゲーム

紙面を読んだ時、あるいはニュースを見た時、そこにはミステリー
の欠片もない。

『児童虐待』『警察・検察の不祥事』『未成年の凶悪殺人』『通り魔の大量殺人』……そこにある事件に、不謹慎ながらも興味を抱いたとしても、さらに続くのは、虐待に手を出せない法や地域の現状や、増長した行政・司法機関の話や、少年法に守られた匿名少年Aの記事や、どうせ真には分かりもしない犯人の動機や心情を解説するコメンテーターの言葉だけ。

それらは大衆が欲しがる情報ではあっても、事件を推理するのに充分なモノとは言えないし、その事件資料にしたって情報源は結局警察だ。

一応は法治主義を謳うこの社会において、犯罪は警察や調べ、犯罪者は検察や裁判官によって法の下 凶悪犯罪ならば裁判員制度の下に裁かれ、刑という法の枷によって罰せられる。

そこに名探偵の入る隙などありはしない。

名探偵は存在しない。

名探偵 探偵業ではなく、謎めいた推理を求め、そして解決する事だけを生業にするような人物が活躍するミステリーの世界は、意外性に支えられながらも読者を納得させるべくリアリティーが求められるが、その相反する要素が故に、両者を求めれば求めるほど現実から乖離がしてしまいがちだ。

密室で死体が見つければ、それはまず間違いなく自殺であり、証言自体が疑われればも元も子もないアリバイに細工するなんてナンセンスなだけで、ダイニング・メッセージが残っていれば死体発見と共に犯人が知れる事だろう。

完全犯罪に必要なのは、意外なトリックでも明晰な頭脳でもなく、死体処理会社の連絡先なのだ。

合理的に考えればすぐに分かる事だけど、適度に謎に満ちながらも、素人推理で解けるようなちよつどいい難易度の事件などこの世にはない。

さて、事件単体ですらそんな感じなのに、困った事にミステリーはそれ自体に大きな歪みを抱えてる。

吹雪の山荘や嵐の孤島、いわゆる閉じられた空間では容疑者が内部の人間に絞られる。それは内部犯に絞った推理を展開させるために考え出された一つの技法なのだろう。

けれど考えてみれば、本に綴じられた推理小説だって、犯人が作中に登場してないなんて事はほぼあり得ないわけで、推理小説そのものがクロード・サークルの体を成しているのは周知の事実だ。

犯人は本の中に居る。

加えて、ミステリーとして意外性を求められるが故に、意外な人物こそが犯人であるという予測もできる。

犯人を当てるのに論理的な推理は必要ない。

推理を放棄した推理とでも言うのか、当てずっぽうで、抱いた論拠ない印象で、無責任に犯人を当てた気になれるのだ。

読者という立ち位置としてはそれでよいのかもしれないが、ここは一つ容疑をかけられる立場になってみてほしい。

理論立てて推理もしなくせに、間違つてもいい、そんなあまりにも軽い気持ちで、何となく「こいつが犯人だ」と決めつける。間違つても構わない、違つても自分は痛くも痒くもないんだから、それをする本人は気づいていないのだから、それはまさしく名探偵役を引き立てるために用意される駄目刑事そのものだ。大した根拠もないのに、筋違いな推理を吐き散らし権力がざして告白を強要するような刑事に目をつけられる。

はつきり言つて全く笑えない。

刑事ドラマであるような取り調べのシーンなんて、フィクションというフィルターを取り除けば、もはや目を覆うような大惨事だ。

冤罪。そのあまりにも生々しい現実の前にミステリーの歪みはこ

の上なく酷く曝け出される。

ここが現実世界である以上、推理小説のお約束など存在しない。謎解く鍵があるとも限らず、見つけられるとも限らない。

捜査が犯人に辿り着くとも限らなければ、見知った範囲に犯人が居るとも限らない。

「ご都合主義の名の下に、ハッピーエンドが約束されているわけでもない。

この現実にはミステリーは存在しないし、名探偵も存在しない。

幻想の中に宿るミステリーはまるで『不思議の国のアリス』の世界のように不合理だ。

話も人もちぐはぐで、常識のように非常識。

ひたすら走り回っては時間を気にする白ウサギ、にやにや笑う姿の見えないチャシャ猫、不公平な裁判がお得意のハートの女王。

どいつもこいつも気狂って、正気の沙汰とは思えない。

出演者がそうである以上、そこでの事件は一般人では解けはしない。

本の中でこそ完成された、現実味のない壊れた世界。クローズド・サークル

そんな中、登場人物から犯人を探し出す行為は椅子取りゲームに似ていないだろうか？

そう、犯人探しは椅子取りゲーム、席の周りでみんなして、マイム・マイムを踊ってる。

私の席は『名探偵』、五年前から予約済み。

偏見持ちで、差別屋で、自称他称変人の、自尊心エゴが強いメイタンデー。

私の役目は『犯人』席を埋める事。

『名探偵助手』には我が恋人蜜ちゃんを、『協力的な刑事』には可奈さんを 続々席が埋まる中、増えるのは『被害者』ばかりで『犯人』席は空いたまま。

犯人は誰？ それを決める狂った椅子取り。

さあさ、犯人探しを始めよう

起こる事件は連続殺人。

四肢切断に内臓摘出、残されるのはハートのシンボル。

リズムに乗って踊り廻って、リズムに合わせて踊り狂って

曲が止まったその時に、最後に残った『犯人』の席。

そこに座ったあなたはだあれ

2、事件覚醒 足食いポスは紙を吐く

「ねえ……しよ？」

消灯した部屋に漏れ射し込む光が頼りなく映し出すだけの暗い世界の中、彼女の輪郭が微かに確認できた。今は見えないその唇が確かに紡いだ言葉を思考が理解する前に、ベッドへと押し倒される。私より低くか細い体躯の彼女だが、一度マウントポジションを取られてしまうと抵抗は難しい。

いつもそうだ。

気づいた時にはすでにこんな状態で、「今度こそ私が攻めに」と思いはするものの、成功した試しがない。

シャワーを浴びたばかりの彼女からは柑橘系シャンプーの香りが強くする。まだ火照った体温が水気を含んだシャツ越しに伝わってくる。彼女が下着を身に付けていない事も、そして胸の起伏もが、心臓の心地よい鼓動と共に感じ取れる。

しばらく塞がれていた唇が解放されて、代わりに今まで私の手を押さえつけていた手が肌を這い始めた。着たばかりの服が通り過ぎる指にするすると剥がされていく。

見えなくても彼女の口角がわずかに上がったのが気配で分かった。それほど嗜虐心をくすぐる表情を私はしているのだろうか？ 私には鏡がなければ確認もできない事だけれど、ああ、そもそもこの部屋は真っ暗なんだっけ……。

意識が蕩けて滲んでいくような浮揚感が身体を包む。

すでに抵抗する気を根こそぎ吸い取られている私はされるがままに身を委ねるしかなく、やがて太腿まで下がっていった指はショーッに手をかけ

「はい、ストローップ」

そこまで気持ちよく朗読したところで私の課題発表は遮られた。夜の情事から戻ってきた意識は、代わりに自筆した汚い文字を視界に映し出している。走り書きもいいところのレポート用紙から顔を上げて、声の主へ視線を投げると、教壇に立つこの講義の講師は呆れ顔を寄こしてきていた。

それだけではない。大学の講義室という、傾斜のつけられ雑壇のようになっている教室において、わざわざ前列に居座っていた私に向けられる、後方生徒の視線が背中越しでも感じられる。

……ここは私立稲倉大学、通称『文芸館』と呼ばれる第十一号館校舎の小ホール教室。言うまでもなく今は授業の真つ最中だ。

そんな中での私の勇氣ある行動に生徒達は拍手するでもなく、ただ茫然と私を信じられないモノを見る目で見ていた。

まあ、当然だよな。流石の私でもそんな仕打ちをされるような事をしたつて自覚はある。

白藤さん、と先月結婚したばかりの新婚講師たる彼女は私の名前を呼んだ。

「一応確認しときますけど、わたしの出した課題の内容つて覚えてます？」

「ファンタジー小作文を書け、ですね」

『ファンタジー論』。それがこの講義の名称だ。名前ほど甘い講義というわけではなく、各宗教での天国・地獄比較やら夢の国の演出やらについて考察する事が主な講義内容である。が、物語の自作など名前から連想できる期待通りの内容もちゃんと含まれていて、今回は幸運にもちょうどソレに当たる。

今まで講義で学んだ事を踏まえてファンシーな作文を書いてきてください。そう言われたのが先週で、言われた通り課題をこなした結果がさっきの文という実に残念な生徒、それが私、白藤桃というわけ。そんな私を当てたのが彼女の運のつきと言える。……当てられるように最前列に座ったのは私だけだな！

「そうですよ！ 誰が官能百合小説書けなんていいましたか誰がっ

？」

若奥様が吠える。その動作が一々可愛いから困る。これだからこの人をからかうのは止められないのだ。

「ヤダな先生、アレは冒頭で読者を惹きつけるテクニクです。あの後ちやんとファンシーでファンタスティックな物語が展開する予定だったのに」

もちろん嘘だ。手元のレポートにはショートツを下ろした後も延々と夜の情事について書かれている。

何せ昨日の晩になって課題に手をつけてなかった事に気づき、何も思いつかずにその日の戯れを走り書きした日記に近い代物なのだ。ファンタジーどころかフィクションですらない。

「うわあ、なんて残念な発想なんですか……。というか、公衆の面前でよくそれを発表できましたよね。先生びっくりです」

「同性愛者である事を包み隠さないとというのが私のポリシーなので、悪びれず胸を張って言う私に彼女は教壇に顔を埋めた。

「公然わいせつを正当化しないでください。……。あなたの頭の中がファンタジーなのは分かりました。見た事ないカビが生えてますよね？」

それは私の倫理感が腐海に沈んでると言っているのだろうか。

「先生だって両性愛者バイセクシュアルじゃないですか」

「そうですね！ 何さらっと人の性指向バラしてるんですか？ 私結婚してるんですよ？」

「知ってますよ。新婚旅行の手配したの誰だと思ってるんですか」

「ああ、そうでしたね！ その節はありがとうございました！ 最高に楽しい海外旅行でした！」

まさしく『くわっ！』という表現がぴったりな動作でまくし立てるように叫ぶ彼女。怒りながら感謝の弁を口にする様は見ていて面白かった。

「いえいえ、どういたしまして。満足いただけただけで何よりです」

「……って、そうじゃなくて！ 常識を持って行動してくださいっ

て話だったでしょう？ もうつ、いい加減にしないと単位あげませんよ？」

「え？ 要りませんよ？」

「……………えうえ？」

私の切り返しがよつぽど予想外だったらしく、彼女は意味不明な声を上げた。

大学講師の切り札とも言える台詞を平然とかわされて目をまん丸にして口をパクパクさせている彼女に、私は彼女の知らない事実を教えてあげる事にする。

「だって私理工学部ですもん。文系講義の単位なんて卒業になんら影響ありません」

そう、関係ない。大学では自分で授業を決めれるなどというのは幻想だ。幾ら自由とは言っても理工学部生が文系科目を取ったところで卒業必要単位の合計には加算されない。

「なつ、じゃあ何であなたはこの授業取ってるんですかあ！」

「先生をからかうのが楽し過ぎるから？」

「ちよつ、誰かこの心中露出狂を何とかしてくださいー！」

手をバタバタさせる彼女、それを微笑ましく眺める学生。そんないつもの光景といつも通り無駄に過ぎた時間を告げるチャイムの音……………と、ここまでではよかった。

今日も今日とて先週同様、若く可愛らしく学内で人気のある彼女をからかい心の癒しを得、かつニコニコと笑顔を振りまく彼女のいじけ顔を見に来た学生からいつも通り高額報酬を得、万事うまく行っていたはずだったのだけど、流石に怒ったらしい彼女に講義終了後呼び出された私は面倒なお使いを頼まれてしまったのだ。

自分の講義を取っている生徒の名前と顔を全て覚えている希少生物ほどに珍しい彼女は、当然ながら欠席しがちの生徒の事もしっかりと把握している。私と高校時代の知り合いだといふ漏らしてしまった女生徒が一人その中に居て、来ていなかった分のプリントと重要部位を記したメモを嬉しそうに渡してきて彼女は言った。

「ほら、来週期末テストじゃないですか。ないと困ると思って！」
……その溢れんばかりの優しさがむしる染みる。

確かに思い出してみればもうすぐ夏期休暇に入るといふ季節だ。そんな学生の重要事項が頭から抜け落ちている辺り、私も立派なサボリ組の一員なのだけど、そんな私の立場から言っても、ほとんど講義に出ないような人間におせっかいかいにもプリントなどばら撒いてくれるなんて、本当に彼女はどうかしている。けれど、そんな彼女に様々な点で世話になっているのは自分も変わらないわけで、断るといふ選択肢は存在せず……実はあまり知りもしない、高校で同じクラスだった程度の知人へのお使いが決定したのだった。

「ホント、勘弁してほしいよね」

冷房の効いた教室から所変わって炎天下、辛うじてケータイに登録されていた住所録とあやふやな土地勘を頼りに、入り組んだ住宅街を歩きながら、そうケータイ越しに同意を求めたら、

「いやあ、自業自得だよ」

最愛の人から返ってきたのはそんなつれない一言だった。むう、ちよつと悲しい。

涙の代わりに額から流れ落ちる汗を手の甲で拭く。見上げるまでもなく、夏の凄まじさはアスファルトから陽炎として立ち上っている。拳匂、歪んで見える道路を眺めていたら、ただでさえあまり馴染みのないこの場所が迷路に見えてきた。

夏よ死ね。太陽よ堕ちろ。

……登録されていた住所からして、前に来た事のあるこの辺りだとは思っただけけれど、如何せんそんな具合だから、サボリ娘の住居を見つけるにはまだしばらくかかりそうだ。

「まあ、そういうわけだから、帰るの少し遅くなるのよ」

「ん、分かった。あ、桃ちゃんの誕生日ももうすぐだよね」

「そう……ね。先月蜜の誕生日やったから、そうかも shouldn't」

「いやいや桃ちゃん、自分の誕生日ぐらい覚えておこうよう」

「私にとって一番大切な日は蜜の誕生日で、最高の記念日は蜜と出

会った日よ。それだけは譲れないわ」

「えへへ……ありがと。でも桃ちゃんの誕生祝いはやるよ？ ケーキケーキ」

「いいけどさ、ケーキなら何時も食べてるじゃない。そんな好きだったっけ？」

「違うの。おつきくて丸いのがいいの、入刀入刀、きょーどうさぎよー」

「……共同作業？ ああ結婚式の？」

「そう。桐枝ちゃん達がやってたやつ」

手の平に滲んだ汗で滑らないようケータイを持ち替えながら、私は若奥様の結婚式を思い出した。珍しく人の多く居る場所に蜜が出た機会で、彼女はその様子を興味深げに見ていた記憶がある。なるほど、それに感化されたのか。

「やりたいの？」

「うん。嬉しい……じゃない、楽しい？ いいな？ ひゃっほい？ 違う、あれ……えと、あれだよ。きゃーいいなって感じの……」

要領を得ない彼女の言葉。けれど、それはいつもの事だ。

根気強く彼女が自分で答えを見つけ出せるかを見極めてから、それでも無理だと判断して私は助け舟を出した。

「羨ましい、でしょ？」

「そうそれ、羨ましい！ たぶんそれ！」

「それが？ 憧れる？ って感情、覚えときなよ」

そんな会話の後、もう二言三言言葉を交わしてから通話を切った。周りを見回せば、後ろに見知った道が控え、前には見知らぬ世界が広がっている。とりあえず、おおよそこら辺だろうという所にまでは辿り着いた。問題はここからどう行けばいいのかだけれど、流石にこれ以上この周辺の地理に詳しくない。頼りは電柱に書かれた番地のプレートだけだ。

太陽が私を溶かしきるのが先か、太陽が沈む前に彼女の家を見つけるのが先か。私の勝ちがまるでない勝負を始めてから数十分、私

は何か目的のアパートを探し当てた。

さっさと蜜の居る憩いの場に帰ってシャワーを浴びたい。アイスを食べたい。クーラーをガンガンかけた部屋で昼寝がしたい。そんな気持ちを抑え、膝に両手を着きタボタとアスファルトに落ちて行く汗の滴を眺めていた視線を上げる。

その先にあるのは当然問題のアパート、しかし、しっかし……、「うへえ……」

アパートの外装を見て思わずそんな声が漏れてしまった私を誰が責められよう。

目の前にあるのは長年雨風に晒されましたと主張する、錆びたドアが横に5つ縦には2列並んだ、つまるところ二階建て建築だ。

なのだが、それが、あまりにも酷い。

少なくとも女学生が住むアパートっていうイメージからはかけ離れている。どちらかと言えば容疑者の潜伏先だった。建物と言うより、箱形の部屋をくっ付けてアパートの体裁を取っているといった方がしっくりくる。

本当にここなのかと思わずケータイを確かめるも、確かにここらしい。

部屋番号は『201』、剥き出しの螺旋階段を上った最奥の角部屋だ。

錆びて赤茶色くなっている鉄製の階段は一段上る度に軋む。だからと言って同じく錆びた手すりに手をつけたいとも思えず揺れるのを我慢しながら上りきると、廊下もやはり酷い有様だった。一応清潔には保たれているのだからうけれど、時の流れには勝てずに廊下のフェンスの錆がコンクリートの床にまで赤い跡を残しているし、床自体も入った罅を補修したらしき後が所々見て取れる。

補修するぐらいなら建て替えた方がいいのに。そんな身勝手な感想を抱きつつ、さっさと用事を済ませてここを出ようと決断して、早足気味に目的のドアの前に立った。鉄製のドアはやはり錆だらけで、元は青かっただろう事が微かに残るペンキで分かる程度だ。

ツンと鼻を突く鉄の臭いに顔をしかめてしまう。これは衛生上良
いとも言えない気がする。ドアの蝶番が使い物にならないくらい錆
び、ネジさえもが抜けそうなのを見て、しかめっ面はさらに強くな
った。

女学生としてせめてセキュリティの整った部屋を探した方がい
いと忠告すべきだろうか？

さほど親しくもないとはいえ、ここまで酷いアパートだと心配に
なってくる。まあ、顔を合わせたらそれぐらい言ってみよう。

向こうにそれと用件が分かるように鞆から問題のプリントを取り
出してからインターホンを鳴らした。

一回目、返事がない。

二回目……三回目もなし。

出かけているらしい。授業をサボってるんだし、外出していても
おかしくはない。

仕方ないが警告は諦めるしかないようだ。女の子を危ない状況の
ままで放っておくのは主義に反するのだけれど、プリントだけ置いて
帰ろう。

錆びて口蓋を開ける際にもぎいぎい頼りない音を立てるドアポス
トに、随分と分厚いプリントの束を押し込む。

「ん？」

ところが、どうやらすでに結構な量が入っているらしく、全
て入る前につつかえてしまった。そのまま無理やり押し込もうと試
みても、収容の余地はないのかそれ以上進みそうにない。

プリントの方を折りたたもう。

溜め息一つ、とりあえずサボり具合がそのまま厚さに比例してい
る紙束を一度引き抜いて、

「……………」

押し込んだプリントの先が赤く染まっているのが目に映った。

粘り気のある、赤黒い染み。

それを視認して、深呼吸。空気を吸い込む。

濃い、鉄の臭いに肺が満たされた。

……なるほど、そういう事か。

ノブに手をかける。当然（、）、鍵などかかっているはずがなく、すんなりとドアは開いた。

「押川さん」

一応（、）の礼儀として一声かけてから一気にドアを開け放つ。その勢いでポストから漏れた血が扇状に外の床にまで飛び散り、運悪くその位置あった私の足元にまでかかった。生足と靴下の不快感を我慢して、開けた鉄板の裏に目をやれば切断された人の片足が無理やりドアポストにねじ込まれていた。

構わず奥に進むと、すぐさま目的のモノは見つかった。

探すまでもない。何せワンルームだ、部屋の全てが一度に視界に収まる。

そう、全てが。

例えば　ベッドに仰向けにされた高校生時代の級友の尺の足りない死体とか、切断されてから改めて胴体に乗せられた両腕が、その手にさも大事そうに自分の心臓を包みこんでいる様子とか、テーブルの上に置かれた切断されたもう片っ方の足とか　そんなモノ、全てが。

視界を満たした。

「……これはこれは」

誰も居やしないのに、見栄を張るように声を出してみる。けれど自己に対して平静を装う、つまるところ自己暗示というそんな姑息な手段は、声が震えて失敗に終わった。

もう一度、視線を死体に移す。そこにある遺体の名前は押川友恵おしかわともえ。親から友人に恵まれるようにと付けられただろう名前の願かけはそれなりに効果があったとみえて、私の知る限り高校時代には知人も多かつたはずだ。つまりそれはその分恨みや妬みも買っていたという事でもあるのだらうけど……いや、そんなことはどうでもいい。おそらく彼女の交友関係など、この殺人には関わりないだらう。

むしろ関係があるのは私の方だ。

裸で横たわる四肢のない身体、その胸部から抜き取られた心臓を、ハート型を模った両手で包み込ませるといふ犯行手口。

「これは……やっばい、なあ」

それに痛いほど見覚えがある。

溜息を吐いた後、私は二回電話をかけた。一つはもちろん警察で、もう一つは私の恋人に。

当然ながら先に着いた警察は現場と死体を確認するやすぐさま立入禁止（KEEP OUT）テープを張り、廊下も青いビニールで覆って外からの視線を完全に遮断した。

出てきたのはバラバラ死体だ。四肢切断、内臓摘出。その四字の言葉で語れるほど目に優しい現場ではない。血が抜けて蒼ざめた死体の顔や、床を浸す乾き始めて滑りを帯びた血溜まり、そして断面すでに数回同じ（、）死体を見た事のある私だからこそよかったものを、免疫のない人間が見たら間違いなく吐くだろう。

それに、もしこれが前のアレ（、、）と同じ手口である事が明るみに出たらとんでもない騒ぎになる。マスコミがかぎつける前に、野次馬に目撃される前に現場を完璧に封鎖しておきたいはずだ。そんな彼ら警察のピリピリとした空気を肌で感じつつ、横目で様子を窺っていた私は視線を自分の居る警察車両内に戻して嘆息した。第一発見者としての事情聴取というやつだ。まあ、通報した以上そうなる事は分かっていたとはいえ……狭い車内で両脇を野郎二人に挟まれるというのは拷問以外の何ものでもない。

右は若い刑事、左は中年刑事、そして助手席に座る女刑事。せめてあなたが左に座ってくれれば……っ！

……閑話休題。

主に質問してくるのは前に座るうら若き桜花可奈という名の女性で、名前と発見経緯、被害者との関係を聞かれた後、「では」と前置きして彼女は中年刑事に目配せした。それに応じて彼は内ポケットから写真を一枚取り出して私に見せてくる。

「この人に見覚えはないかしら？」

……そこまで言われたら、写真の人物がたどった運命は容易に想像がつくというものだ。嫌な予感とある種の諦めを持って写真に意識を移すと、そこには予想した通り私の知人が映っていた。

「佐々木裕子ちゃんですね。中学時代からの友人でした」

これで押川さんの死体を見た時得たあの予想は確信に変わった。

やはりこの事件は……、だとすれば、

「もしかして殺されたのって七月二日の午後二時ぐらいですか？」

殺害された旨と予想だになかった情報を口にされて若刑事が少々うろたえた。二十代に見えるその若さから言って新米だろうと思っていたけれど、やはりそのようだ。二人で良さそうなものを三人で聴取するのは彼の研修を兼ねてるのだろうか。

何故と訊かれる前に、ケータイを開いてスケジュール表の七月二日を見せる。『裕子 中央図書館』。国立大に入った勉強熱心な彼女に頼まれていた資料を渡す予定だったのだけど、

「直前にキャンセルされましたけどね。……裕子ちゃんも同じ手口で？」

「ええ」

「今回で二人目ですか。それも女性二人、ハート事件と同じですね『ハート事件』という単語に今度は中年刑事が反応した。

一般人があんな死体を冷静に観察できるとは考えにくい。現場を見たとはいえ、それを五年前のあの事件と結び付けられるとは思っていないかったようだ。

けれど、残念ながら私はたまたま巻き込まれてしまった哀れな発見者ではない。むしろこの件に限って言えば被害者よりも因縁深い立場に居るのだ。

言わずともいずれは分かるだろう事だけど、ここで自ら告げるのは少し憚れる。できれば関わりたくもないと思いつつも、それを許されない状況下で私は……いや、私達（、）は事件の渦中に身を投げる事を決意した。

「五年前、あの事件で犯人逮捕に関わった女子中学生が二人居たでしょう？ その一人が私です。ですから、あの事件についてはよく知ってます。今回の事件、同じ手口が私の周りで行われている。……どうやら私達に関係あるようですね」

言つて、ドアガラス越しに見える我が愛しの待ち人を指差す。その先には夏というこの蒸し暑い中、黒いワンピースに黒いニーソックスで絶対領域を作り出し、頭に黒い麦わら帽子を乗せているショートカットの黒髪をハーフアップにした女の子がこっちに視線を寄こしてきていた。

「あの娘は桜川蜜。ハート事件に関わったもう一人の女子中学生で私の恋人です」

その台詞に交互に私と彼女を見比べて口をパクパクと開閉する男性二人。

その隙を見逃さず、私はもう一押しと、トドメの名刺を取り出した。

「それとこれ、どうぞ」

ジエネレーションギャップのせいとか、殊更思考回路に負荷がかかって呆然としている中年刑事の方を選んで切り札を差し出す。

事務所『白桃シロップ』

名探偵 白藤桃

その表記にさらに固まった彼の脇をすり抜け車外に出る。

ふっ、我ながら華麗なる脱出法よね！

蜜の所に駆け寄り、野郎共の呪縛から解放された嬉しさのあまりに再会のフレンチ・キス。彼らに見せつけるようにたっぷり十秒間、

離れた唇を人差し指で拭って、勝ち誇った顔を彼らに向けてやった。

「それじゃあ私達はこれで」

が、そのまま現場を去ろうとした私の肩を掴む人物が一人。

振り向けばいつの間にか車を出ていた桜花さんが笑顔でそこに立っていた。

「いや、駄目に決まってるじゃない」

………ですよね。

3、推理展開 憎まれっ娘世にはばかる

探偵でも刑事でもない名探偵いっほんじんが殺人事件に遭遇するなんて事は一度あればいい方で、二回目以降、それも事件の捜査に携われるような深い関わりを持てる可能性は限りなくゼロに近い。

それでも名探偵らしく事件に付き纏われているなんて事があるとするれば、それは前回の事件の因縁が憑いて回っているという何とも無様な話に他ならず、『ハート事件』、つまりそのキーワードが私達にとつてのソレに当たる。

故に今回の二番煎じ染みた事件を語るにおいて、前の事件について整理するのは必要不可欠な事だろう。

あれはそう、中学二年生という、私達が青春を謳歌していた真つただ中 空寒さよりも色落ちしたような町の景色に身体の冷える九月下旬から十月下旬までの約一ヶ月間に渡つて結果的に六人もの女兒が殺されるという凶悪極まりない殺人事件は起きた。

発見された死体は全て心臓がくり抜かれており、ハート型を模つた両手で包みまれていた事が情報漏洩し、付いた名前が『ハート殺人事件』。その正式名称は『浅越市女兒連続殺人事件』という。

二〇〇六年九月二十一日、西浅中学に通う一年生温井美々（ぬくい みみ）のバラバラ死体が下校時刻頃の人通りのない袋小路で見つかった事から事件は始まった。まだ？連続？はしてなかった当時、マスコミは彼女が住民以外使わないような袋小路で見つかった理由を、野良猫をこっそりと飼っていたからだだと知ると、彼女を悲劇のヒロインとして挙こぞつて報道したが、翌月の十一日に同校の同じく一年生中島梨奈かじま りなが、九時頃塾帰りに同じ手口で殺されてからは方針を連続殺人に切り替えた。許可が得られなかったからこそ路地で飼っていた子猫を引き取つた両親のインタビューや、その猫の名前についてあれだけなされていた報道はパタリと止んで、ネットや雑誌で猟奇的な手口が明るみになりハート殺人なる名称が定着し始めた一

週間後、今度は園川中三年の畑明日香はたけ あすかが部活動短縮等の処置が取られる中で、真夜中までゲームセンターに入り浸った帰り道で殺されているのが発見される。少年法は犯人の实名報道を抑制しても被害者の名前を守ってはくれない。第一・第二の被害者と比べられた畑明日香が不良少女として自業自得という風評に晒される中の十月二十三日、高子山あした なつみ中二年生有田夏美が各段に早くなった部活帰りの五時頃公園のトイレで第四の被害者となり、世間は未曾有の大混乱に陥った。

しかしそれは四人の女兒が殺されたからだけではないし、サイコキラー猟奇的な犯人手口からでもない。

確かに、短期間に四人もの年端も行かない女兒を四肢切断、内臓摘出という残酷非道な行為の対象にした拳句、皮肉めいた例の装飾（、、）を施すというやり方は、病的で異質な犯人像を彷彿とさせる。何かしらの宗教的なシンボルなのか、あるいは警察を皮肉ったメッセージなのか、はたまた単に死体損壊に執着を持っているのか。理由は幾つか考えられたがおそらくは三つ目だろうと誰もが思っていた。

それを皆がおぞましいと忌避し恐れたのも確かではあるけれど、それよりも増して何よりハート事件が恐ろしかったのは手がかりのなさだった。

『彷彿とさせる』、『思っていた』。そう、つまり犯人像すらがそれ程度の推測の域を出ないほどに、警察もマスコミももちろん地元住民もが何も掴めていなかったのだ。

男？ それとも女？ 年齢は？ 体格は？ 凶器は？ 解体はどうやって行った？ ハートの意味は？

四人も殺しておきながら目撃者・遺留品共になし。

マスコミは散々警察を叩いたが、警察にとつても歯がゆい状況であつた事は言うまでもない。

一、二人は狡猾だからと自分達が作り上げた犯人像の後付けとして納得していた人々も、三人目辺りになってある事に気がつく。

快樂殺人は加害者と被害者の関係から捜査できない上に、殺人に快樂を覚えても死体を晒す事に興味のない猟奇殺人者サイコキラーは死体を処分してしまうがために発覚自体が遅れ連続殺人化する事が多い。それは犯人が意図して隠しているからというよりは、殺人そのものの性質上逮捕が難しいからであり、今回の事件が行き詰まっているのは全く意味合いが違うのではないか？

死体も見つからず事件だと発覚する事すら難しい猟奇殺人と、死体もあり犯行現場も特定された状態で何も残されていないハート事件。その違いが浮き彫りになった瞬間、犯人像はにたにたと壊れた笑い方をする人間から表情のない壊れた人間へと変化し、犯人の住処は不衛生な血みどろ屋敷から無菌室へと変貌した。

実際、無菌室のような病的なまでの白さ(、)がこの事件にはあったのだ。

現代捜査技術も歯が立たない、あまりにも完成された殺人がこの事件の特徴なのだ和理解して、ここでやっと人々はその脅威を真剣に受け止めざるを得なくなった。

手がかりがないという事は捜査の取っ掛かりすらないという事。捜査が進まないという事は犯人が捕まらないという事で、犯人が捕まらないという事は猟奇殺人にも次があるという事を意味する。

では、この殺人はいつまで続くのだろうか？

世間が震えあがるというのはこういう時に使うのだろう。

異常なほどの手がかりのなさ、手口の猟奇性、そして誰も止められない犯行。警察もお手上げで、いつ止まるか分からず、被害者になれば悲惨の極み。

被害者六人というのは決して多い数字ではないが、猟奇的犯行に快樂を覚え、趣味として殺人が常習化している犯人が、意図的に証拠を残さないほど高い殺人技術を持っているという点で、この事件は前代未聞の猟奇連続殺人として名を轟かせることになったのだ。

けれどそれでは、そんな解決の糸口さえ見えないハート殺人事件

はどうして終わりを迎えたのか？

……その幕引きはあまりにも呆気なかった。

十月三十一日、後に魔のハロウィンとしてマニアに親しまれるハート事件最終日、「お菓子をくれなきや悪戯しちゃうぞ（トリック・オア・トリート）」なんて言葉に引き寄せられるが如く、当時『白桃シロップ』と甘ったるいあだ名で呼ばれていた私達は事件の渦中に踊り出る事になる。

その頃、四人の被害者を出しながら悪に屈せずと学業停止をしなかつた浅越市学校群は連携し、市全体を覆う集団登下校ネットワークを構築していた。教員総出でポイント毎に生徒を集め、人員が足りない場所は時間差で集合をかけてまで警護して登校させるというプロジェクト
一大作戦である。

徹底した登下校ネットワーク、そして警察の監視網、それらが功を奏したのか数える毎に縮まっていた殺人間隔に反して、一週間経つても第五の被害者は現れなかつた。が、結果的にそれが仇となつたと言うしかない。

教員・警察の勝利と思われた矢先の十月最後のこの日、最悪の悲劇が起こつた。

ネットワーク作戦によつて生徒が集められ始めた午前七時三十分、家から教師の待つ集合場所までの僅かな間にて、園川中学二年生の濱口朋子はまぐちともこが惨殺された。ポイントまで親の送り迎えを義務付けてはいたものの、止まつたとも見える犯行と、たつた十メートルの距離であるからという気の緩みによつて彼女は五人目の被害者となつた。指定時刻になつてもやつてこない彼女に、同じポイントに集まつていた女生徒が、彼女の家に続く曲がり角を覗いて発見。その第一発見者が白藤桃、つまり私。

集団登下校ネットワークも警察の監視もすり抜けられた上に、その目前で殺されるといふ失態は、彼らの完敗を示していた。

学校側は臨時集会を開く事にし、犯人逮捕がなければ今年最後となる登校日として生徒を登校させた。

すでに学校に集まっている生徒も居たし、ポイントに集まっている生徒も大勢居た。一校ならともかく多校間での大がかりなネットワーク故に、無理に子供を家へ帰したりすれば連携自体が崩れて大きな隙を作る可能性もある。ここでパニックになるのは危険だと考えての行動だった。何より二人の生徒を殺された園川中学としては全校生徒で被害者の冥福を祈れる最後のチャンスでもあった。

教員数が足りないために時間差で登校させていた関係上、どうしても先に来た生徒が待ち惚けを食らう中、私といえば乾いた喉を紙パックの苺ミルクで潤していた際に、誤ってそれをクラス委員長にぶっかけたりしていたが、教室はまさに葬式ムードで、クラスメイトであった朋子の死に親しい友人はすすり泣いていたし、年頃で変に格好をつけたがる男子もこの日ばかりは女子を気にかけていた。まさにこの時運命の歯車が狂い始めた事に犯人以外の誰も気づかず、最終組の生徒が合流。

集会のために集まった体育館で、泣いている隣のクラスメイトにハンカチを差し出そうとして、私はそこでやっと見つける事になる……委員長のブレザーを拭いたソレに血が付着しているのを。

さらに委員長と蜜がいつの間にか居なくなっている事にも気づき……私が教室に駆けつけた時には中谷真希が頸動脈なかつたにまきをかつきられ第六の被害者と化していて、いきなり体育館から走り去った私を追いかけた担任教師が教室で目にしたのは、血溜まりの中で揉み合っている私と委員長、六人目の死体と呆然としている蜜だった。

あれだけ世間を騒がし、手がかり一つ残さなかった殺人鬼が現行犯逮捕。誰もが予想だにしなかった結末だった。

だが、事件はさらなる展開を見せる。

委員長は容疑を否認、私と蜜こそが犯人だと言い張ったのだ。確かに教師が踏み込んだ時にはすでに六人目の中谷真希は死んでいて、蜜以外で彼が犯行を行うのを見ていた者はいない。彼の言い分はみともなかるうが筋は通っていた。

中谷真希ではなく五人目の濱口朋子の血液が彼のブレザーの裏地

に付着しているだろう事に関しても、私が拭き取ったのではなくこすりつけたのだと彼は言い、凶器に私達の指紋が付着していないにも関わらず、その台詞を元に警察は大捜索を行った。

私情を挟まずに言うのであれば、あれだけ世間に罵られた中で冷静かつ人権を守った当時の捜査主任の行動は評価できるものではあるのだろうか。が、私情を挟んで言わせてもらえば、地獄に堕ちるといった感じだった。

凶器は持ち方次第で指紋を残さないような工夫はできる。故に問題は血。染み込んでしまうハンカチで血を運んだとは思えない。何かしらの容器に入れて運んだ可能性を考えて警察は私達の私物全てを科捜研に回し、学校中の捜索及び全校生徒の所持品中まで探った。そうやって『白桃シロップ犯人説』を周囲にばら撒いておきながら、結局容器は見つからず、彼らは委員長犯行の裏が取れたとして私達に謝罪もなしに彼を逮捕。

いたる所に遺恨を残したままハート事件は幕を閉じ、それでも彼が犯行を認める事は最後までなく、

犯人であり、クラスメートであり委員長であった内山広一は無実を訴え自殺した。

ガクンと不意に落下する感覚に襲われて目を覚ますと、まず目に入ったのは床の絨毯だった。

いつものように寝相の悪い蜜にベッドから蹴り落とされたのだと理解するのに五秒要して起き上がる。だんだんと働き始めた頭が五感からの刺激を受容し始めて、自分の居る部屋にあまりにも濃いグレープフルーツの香りが充満しているのに気がついた。はっとしてベッドテーブルに目をやるとアロマキャンドルが完全に溶け切っていた。

思い出した……。「それじゃあ私達はこれで」と思考を停止させた上で華麗に戦略的逃亡を図ろうとした私達だったけれど、結局その後、桜花さんに肩を掴まれ車内へと引き戻されたのだった。

任意じゃない任意聴取でがつつりと事情を説明させられ、解放されたのは日暮れ時。事務所であり半住居でもある『白桃シロップ』に帰って来た頃には疲労がピークに達していた。

そんな思いの外疲れの出た身体をまずはシャワーで清めて、すぐさま事務所の資料室からハート事件関連の書類。ピックアップ、ベッドで寝転びながら改め直して……。そして途中から乱入した蜜に鳴かされ続けて結局疲れが取れなかった、と。

「ロクな一日じゃなかったのは確かよね……」

思えば二日連続だ。最近ご無沙汰で色々貯めこんでいたらしく、昨日は随分と激しく……。流石にそろそろ攻めに回れるようになってなると身体が持たないかもしれない。いや真面目な話。

それで、いつの間にか眠ってしまったってキャンドルは無駄に消費され、部屋は毒々しい匂いに侵され、休みを与えられなかった身体はだるいわけだ。

ケータイの表示を見てみれば現在時刻は午前十一時二十九分。

大学に通っていない上仕事の仕事だけに、二トと大差ない自堕落な生活を送っている蜜はそのままに、私はそこら中に散らばったハート事件の資料をかき集め始める。

これからしなければならぬ推理のために、今まで備えとして集めてきた資料を重要度順に重ねながら思うのは、もしもあの時警察がもう少し穩便に済ましてくれていればという事だ。

無実を訴え自殺　それは証拠があっても彼が犯人であるという決定的な確証がないまま事件が閉じた事を意味し、公式には彼が犯人として名を刻むも、白桃シロップ犯人説を否定する要素もやはりないままなのだ。周りで同様の事件が起これば疑いの目は間違いない私達に向けられる。

溜息、纏め終わった資料をファイルに挟んでからシャワーを浴び

に部屋を出る。実のところ本当の住居は別にあるのだけど、この事務所には日常生活が送れるだけの設備が整っている。

最寄駅十分の好立地にある高級マンションの二階テナントスペースに事務所を構え、その上の二十七階に5LDKの本住居、加えて大学費やら生活費その他諸々も含め、私達が十九歳という歳に反してかなり裕福な生活を送れているのはスポンサーに因るところが大きい。

熱いお湯を浴びて完全に思考を覚醒させた後最低限の身嗜みを整えて応接間へ。今日は昨日の刑事達がやって来る事になっているので、早いところ食べ物胃に押し込んでおかなければならない。

電気ケトルにお湯を注いでスイッチを入れ、冷凍ハツシユドポテトをオーブンに放り込んでから、出来上がるのを待つ間、だらしのない所がないか室内をチェックする。考えてみれば数か月ぶりの来客だ。

室内中央部にはガラステーブルとそれを挟んで二人がけのソファー二つが鎮座し、脇には業務に使いそう(、)な代物が追いやられている。使われていない盗聴器類の入ったダンボール、使う気のない六法全書等の並んだ本棚、唯一使っているホワイトボードでは前にやってきたクライアントの描いた野獣パンダが棒人間を貪り食っていて。まあ、どの道本来の用途で使われているとは言いがたい。それらは、むしろ使われない事を前提にここにあると云っていい。にも関わらず、要らぬ火の粉を浴びないための予防として、名探偵の体裁を繕うために用意した品々が、今こうして名目通りの役目を与えられようとしているのだから皮肉な話だ。

使いたくもなかったんだけどなあ……。

ともかく、今更そんな事を言っても起こってしまった以上は仕方ない。願わくは無事に解決してほしい。

ソファアーに沈んで今後の対策を考え込んでいた私の耳にケトルのスイッチが上がる音がやたら大きく聞こえてきた。

完全燃焼して死んだように眠っている蜜をベッドから落として、唇を尖らした彼女にミルクココアのカップを突き出し、少し癖のある髪を梳かしてあげた辺りで件の来訪者は現れた。

昨日世話になった三人の内二人、桜花さんと新米君。中年刑事は今日は居ないみたいだ。私はともかく蜜が居るのもあって、その事に安堵する。

冷蔵庫に溜めこまれた私の果物の中から今日は巨峰じゆうけいを皿に盛って、珈琲と一緒にテーブルに置いていく。最後に新米君の前へ置く際に、彼の視線が私の手にいつているのに気づいた。

半袖から伸びる私の右手には細かい傷を含めればそれこそ無数に大きい傷だけでも手首に三ヶ所ほどある。それが気になってきているだろう。少なくとも十九歳の娘が身に負う傷数とは言い難い。

「リスカですよりリスカ、自傷行為リストカット。ハート事件で散々マスコミに弄くり回されたから癖になっちゃってるんです。だから身体中傷だから」

私の答えに彼はビクンと身体を撥ねさせた。どうやら責めているように取られたらしい。別にそういうつもりではなかったのだけど、……今更訂正しても無駄か。

居心地が悪そうに視線を外した先で、今度は正面に座る蜜と目が合って会釈する新米君。が、彼女はフィツと顔を背けた。

意図的に彼と正面に座らせたのだけれど、やっぱり駄目らしい。仕方なく彼女と場所を入れ替えると、彼はそんな彼女の様子にシヨックを受けた顔をしていた。

「気にしないでください。蜜、緘黙かんもくで特定の人物としか一対一では喋れないんですよ」

「そう……なんですか」

幾分ホツとして、それから心配そうに蜜を一瞥する様子に、まあ根はいい人間なんだろうと適当に評価する。

「私が居れば完全にだんまりってわけではないんですけどね、他に

も自発的行動を取ろうとすると精神的負荷がかかったり……それから失感情症アレキシサイミアだつたり。だからあんまり彼女の拳動は気に留めないで」

「アレ……キシ？」

「アレキシサイミア、失感情症。自分の感情を自覚・認知・表現する能力に乏しい子の事よ」

「まあ、蜜の場合は『喜怒哀楽』みたいな単純なモノは大丈夫なんですけど、嫉妬とか『怒』と『哀』が混じったようなのが苦手で……しかし桜花さん、詳しいですね」

「ちよつとね。従妹の時色々調べたから。ま、そんな事より、桃ちゃん蜜ちゃん。お茶しましょうよ」

あまりにも自然な台詞に、思わず「はあ、そうです、ね」と言いかけて首を捻った。

……あれ？ おかしくないか？

「つて、違うでしょうよ。何か訊きに来たんじゃないんですか？」

「んーん、遊びに来たのよ。あと私の事は可奈ちゃんって呼んでね？」

「いやいや可奈さん、上司が居ないからって羽目外するのはどうかと思っんですけど」

私の言及にも彼女は全く動じず、早くもソファーにだらんと身体を預けた。ずるずるとスーツに皺が寄っていく。

「いーじゃない、ガールズトークしよーよう」

その姿はまるで駄々っ子だった。昨日はあんなにキリツとしていたのに。この人普段はかなりだらしない性格をしているらしい。これが本性なら、昨日見逃してくれもよかったじゃないのよ。

つて、駄目だ、向こうのペースに乗せられてる気がする。そもそもお互いの立場上、プライベートモードで話し合う事自体がおかしいはず。

「というか横に座る同僚は見えています？ ガールズトークも何も男入ってますよ？」

どう考えたって彼が肩身の狭い思いをするに決まってる。すでに

今の時点でだつて若い女性三人に囲まれて彼は……彼は……
……そう言えば、新米君だとか彼だとかと呼び続けていたけれど、
彼の名前って何だっけ？

おやおやあ、覚えてないぞ？ 聞いてない事はある得ない。昨日
あの三人とはメアドも交換したのだ。赤外線交換で、確か名前は入
ってなかったからわざわざ入力して……いや、それなら登録デー
タを確認すればいいのか。

そう思つてポケットからケータイを取り出しテーブルの下でアド
レス帳を検索する。カテゴリー『友達』『仕事』『人外』『論外』と
きて……『警察関係者』『桜花可奈』『梶川総次郎』そして……
『新米』。

……眼中になかつたのは私も同じか。

中年刑事こと梶川さんの名前が辛うじて入っていたのは年配者だ
つたからだろう。分かりやすいなあ私。

しかしどうしようか？ 今更名前を訊くのもなあ。代名詞だけで
誤魔化せきれるか？

と、割と焦っている可奈さんが昨日と打って変わってにやつき
ながら訊いてきた。

「で？ 桃ちゃん、池田君の名前は見つかった？」

何で言いますか、可奈さん。

テーブルがガラス張りにも関わらず隣の彼は全く気付いてなかつ
たのに。

そしてどうしてくれるんですかこの状況。

私が随分前に手放した常識に関しての記憶が正しければ、昨日の
今日で名前を覚えてないってかなり失礼な事だった気がするんだけ
ど。

あー、仕方ない。このままの流れで池田君とやらをからかつて誤
魔化そう。

「言わなきゃ新米君にはバレなかつたのに……」
すると池田新米君はムツとして答えてくれた。

「僕の名前は池田悠志だ。改めてよろしくお嬢さん（、、、、）」
池田悠志。なるほど、今度は忘れない内に入力しておこう。『名前／姓：新米』の下に『名前／名：池田悠志』と加わり、彼は『新米池田悠志』にレベルアップした。

それにしてもこっちの売り言葉をちゃんと買ってくれちゃって、何て？可愛い？青年だろうか。あ、もちろん侮辱の意味で。今更言う必要もないだろうけれど、私男に興味ないし。

そんな私の意図が分かっている可奈さんはケラケラとおおよそ女性らしくも刑事らしくもない笑い声をあげた。一通り笑い終えた後、急に真顔に戻って言う。

「酷いなー桃ちゃんは。もうその辺にしておいてあげてよ、この子ウブなんだから。そういう駆け引きなんてできないのよ」
うわぁ……この人トドメ刺しやがった。

「酷いよね可奈さんは」
哀れな悠志君は横で顔を膝まで伏せている。ノックダウン、そしてKO。ゴングが鳴り響くのを確かに聞いた。

性格の悪い上司に連れられて性格の悪い小娘に会いに来るなんて朝から災難な人だ。ご愁傷さま。

酷く頂垂れる彼。きっかけが自分だけにあまりにも可哀想なので、とりあえず昨日はできなかつたここの自己紹介で話を変えてあげる事にした。

「まあ、悠志君がウブなのはともかくとして一応紹介しておく、ドアの所に書いてあったと思うけどここの名前は『白桃シロップ』。名探偵の事務所……：といよりは、他の探偵事務所を紹介したり、要望に応えられる人材を紹介したり、って感じで人材紹介が主な仕事なんだけどね。職員私と蜜、それからもう一人女装青年が居るけど、今は東日本に出払ってる。刑事が来たのはこれで二度目よ、おめでとう。記念にどうぞ」

そう言っただけ昨日中年刑事の梶川さんには渡した名刺を二人にも渡すと、悠志君はゾンビのように突き出した手を引っ込めて、子供の

ように貰った名刺を弄り始めた。ホント、この人大丈夫なんだろう
か？

「んー、そう言えば気になってたんだけど何で『白桃シロップ』な
の？ 普通『〓事務所』ってつけない？」

そんな彼を無視する形で可奈さんが名刺を見ながら聞いてきた。
ガールズトーク宣言は冗談じゃなかったらしい。

「事務所名っていうか、元々はコンビ名なの。私が白藤と桃で『白
桃』って呼ばれてて、それに合わせて蜜がシロップ。で、『白桃シ
ロップ』」

「ああ、自分でつけたんじゃないんだ？」

「つたのは中学時代のクラスメート。桃の缶詰でもイメージしたん
でしょ」

「いや……、たぶんイメージは百合よ、それ」

「……………え？」

「コンビ名じゃなくてカップル名よね」

そう言っ出て出した安珈琲に初めて口をつける可奈さん。

そんな馬鹿な。あの頃（、、）は自重してたはずなのに。

自信がなくなって改めてあの青春時代を思い出してみる。

あの頃は長かった蜜の髪に口づけする私。はだけた蜜の胸に顔を
埋める私。乾燥して切れた蜜の唇に口移しでリップクリームを塗る
私。

OK、分かった。自重できてねえ。

くそう、覚えてるあの女！ 自分だっしてシヨタ趣味でブラコンの
癖に変な名前つけやがって！

あれ？ ということは何？ 私達中学時代百合カップルってクラ
スメートに認識されてたの？

自室整理で封印が解かれた暗黒ノートと類似した、脅威的精神ダ
メージに悶え苦しんでいると、今度は悠志君が伏していた顔をいき
なり上げた。どうやら元気を取り戻したららしく表情が明るい。

「白藤さんー！」

「メートルも離れていない距離で叫ばないでほしい。男の叫び声なんて不愉快だこの野郎、というこちらの内心を知る由もない彼は名刺を突き出して言った。

「日本において探偵業を行うためには公安委員会に届け出なければならぬと探偵業適正化法で決まってるんですよ」

「……………」

「いや、そんな鬼の首を取ったような顔されても。

年下の小娘相手にしたり顔をしてる自分の格好悪さを分かってないのだろうか？

視線を横にずらしてみると可奈さんが角砂糖を三つも入れた珈琲を苦い顔をして啜っていた。蜜も飲み干したミルクココアを淹れ直しに席を立つ。

「どうやら私がこの残念な子の相手をしなくてはならないらしい。

「悠志君、名刺もう一度見てみ」

いつの間にか可奈さんに影響されてタメ口になっていた事に気がついたけれど、もはや敬語を使う気すら失せたのでそのままです。

「言われた彼は素直に伸ばした腕を折って私の名刺を再確認する。

「……………」が、その表情からしてまだ分かってないようだ。

「読んでみ」

「事務所『白桃シロップ』……………名探偵、白藤桃」

「名（、）探偵は職業じゃなくて肩書きよ」

「身を乗り出していた彼は力が抜けたのかソファに沈み込んだ。

「はいはいお疲れ様。二ラウンドは自爆、と。

「しかし彼は諦めない。

「桜花さんはどう思いますか？」

「あろうことか上司を巻き込んだ。やめなさいよ、可奈さん」私に振るの？」って顔してるじゃないのよ。

「えー、と……………グレーかな？」

「あなたもあなたで部下に甘くないですか？」

「ほら！」

今度は我が意を得たりというこれまた小憎たらしい顔を向けてきた。

「というか「ほら！」じゃねえ。彼は本当に小中高大と警察学校を卒業したのだろうか？ 精神年齢を計れない今日の教育制度が嘆かわしい。将来の日本と自分の現状に頭痛を覚えて頭を抱えていると、「ふふんっ、大丈夫よ桃ちゃん！」

いつの間にか帰ってきて、後ろに立っていた蜜が得意げに言った。その笑みが実に可愛らしい。けれどマイエンジェル、ずっと連れ添ってきた身として言わせていただければ、その言葉全く安心できないん、

「こういうこともあるうかと、探偵業届出証明書買って、、、、」

「あ
」
「アウトオオオオツ？」

ほれ見たことか！ その台詞でグレーが真っ黒に早変わりだ！

私ら十九歳、未成年者よ？ 届け出に法定代理人の許可いるのよ？

私は親と絶縁してるし、あんたに限っては両親刑務所でしょうがっ！

どれほど精巧だろうが調べれば偽造ってバレるっの！

そんなお茶目なところも大好きだけどな！

蜜の台詞をかき消す叫びと共に、ご丁寧にも彼女が手に握っていた件の証明書を掠め取りアロマキャンドル用のライターで火を着ける。トドメに今まで煙草の吸い殻さえ落とされたことのない灰皿へと投下してボールペンで押し潰した。

……よし、証拠隠滅完了だ。

「白藤さん……」

そんな私の奇行に悠志君の咎めの声がかかるが、

「何か？」

私の平然とした返しに何も言えずに黙った。その横で可奈さんは腹を抱え足をバタつかせて大笑いしている。スカートスーツでそんなことをするものだから中のショーツが丸見えだった。

なんだろう、すでにかんりの疲労感があるんだけど。

「それで？ 本当に今日は何の用？ ハート事件絡みの連続殺人が起こってるのに警察だって暇じゃないでしょ？」

投げやりになってる私を責めないでほしい。

私の問いに彼女は「あー、そうねえ」と勿体ぶった態度で応じて、少し考える様子をしてから言った。

「今の私達の状況を簡潔に説明すると 特捜立った、のけ者にされた、暇なんできた」

「帰れ！」

なるほど、だからガールズトークとか言ってたわけだ。本当に遊びに来たんじゃねえか！

「というか何でのけ者に？」

中央の人間が地方を蔑ろにするというのは物語の中の話で、実際は現地を知らない中央組だけでは捜査できないからペアを組むんじやなかったっけ？

「私が捜査主任に嫌われてるのよ。警察庁のキャリア組警視正さんが嫉妬狂いでさ。私ってば警察内で『ぬらりひよん』とか『焼き太り可奈ちゃん』とか呼ばれてるから」

ああ、警察とのファーストコンタクトミスったっばい。別に発言権を持った人物でなくてもよかったから、特別捜査本部に関われる人物と関係を持ち（コネクションし）たかった。こういった時にのけ者にされないための名探偵の肩書きだというのに、これでは意味がない。何でよりもよって変に階級の高い……、

「ん？ あれ？ そう言えば可奈さんって階級は何でしたっけ？」

「警部補よ、五級職警部補」

「ちなみに、年齢は？」

「ピチピチの二十三歳」

二十三歳がピチピチなのかはさておき、特別捜査本部が昨日付けで立ったとして、それ以前に現場に来ていた彼女は言うまでもなく地方警察官のはずだ。キャリア組のエリートなら初任が警部補なの

でありえない階級ではない、けど。巡査が初任のノンキャリアが普通（、）の警部補になるにすら確か二十六歳が最短で、彼女が本
当に二十三歳だとすれば例外的なケースと言える。

いや、それよりも酷く気になっっている事があった。

「悠志君は巡査だろうからいいとして」「よくないですよという彼の抗議は無視して続ける。「梶川さんは？」

「警部」

「彼の年齢は？」

「四十……七歳、だったかな？」

「……………」

私は昨日非常に恐ろしい場面に遭遇していたらしい。

片や二十三歳の五級職警部補、片や四十七歳の万年警部。

もちろん警部の方が階級上高い位ではあるものの、注目すべきは可奈さんの五級職という役職だ。統括警部補とも呼ばれるその役職は警部補の中にあつて他の警部補に命令を下せる立場にあり……そんな責務から警部と同じ給料（、）が支給される。

四十七引く二十三は二十四年。過ぎ去った時間は価値なし（バリユールス）。実力社会の悲劇を見た。

キャリア警視正が嫌うわけだ。本来ノンキャリアの出世限界は警視正だが、すでに彼女はそういう制度を度外視してしまっている。

というか、彼女梶川さんを目で使つてなかったか？

「結構な御身分のはずの可奈さんは署に居なくていいの？」

「いいのよ総次郎さんが待機してるし」

この人鬼だ。

「ホント何で来たのよ……………」

「言ったじゃない、お茶しによ」

捜査に関わるために今まで温めてきた名探偵という伏線^{フシゲ}を叩き折られて頭を抱える私。対して可奈さんはにやにや笑顔を絶やさずにさらに付け加えた。

「まあ悠志君の研修にもなるしね」

ああ、私が試験官というわけですか。酷い話だ。鬱憤を晴らすためにも言っちゃった。

「じゃあ不合格で」

本日三回目のダウンとなる若き警察官。

よし、今度は私が取った！ ……じゃなくて。

「ごめんよ悠志君。悪気はないんだ。ただ君が弄りやすいだけなんだ。」

私の精神衛生上非常に役立つているから、君の死は無駄じゃない。安らかに眠ってくれ。

「あと、ハート事件を知らない私達に当時の事を教えてもらいにね。悠志君に聴取の経験積んでもらおうかなって」

研修っていうのはそういう事か。しゃべる気が失せるなあ。

「でも当時の捜査資料には目を通したんでしょ？ 何か疑問でも？」
散々弄り回した負い目もあり、ここでやっとまともに彼へ視線を向けて尋ねる。

「はい、手がかりなし……というのが信じられなくて。そんな殺人が本当にあり得るのかと。遺留品なしと言っても死体は残ってたんですよね？ 刺傷角度から犯人の身長ぐらい割り出せたと思うんですが」

そういうのは、それこそ警察の方が知ってる情報だと思う。私達の立場はあくまで当時を知る巻き込まれただけの学生であって一般人の域を出ない。そんな司法解剖やら科捜研やらで得られるような情報を本来（、）持つてるわけがないのだけど、その点を彼は分かっているのだろうか？

しかしそれを言えば、また彼を弄る方向へと話が逸れてしまうので自制する。資料よりも生の情報の方が頭に入りやすいというのは理解できなくもないし。

「悠志君は被害者六人の身長って覚えてる？」

「いえ、全く」

実にきつぱりとした回答だった。そういう素直な点は評価できる

として……期待通りの答えを貰えたところで、蜜に用意した資料を読み上げてもらう。

「一四六、一五三、一六二、一五一、一四九、最後が一五五だね」

「身長が違えば心臓の高さも違う。けれど胸の刺傷角度は全て垂直、身長すら犯人は隠し通したのよ」

トントンと自分の左胸を手刀で垂直に突いてみせる。哀しいかな、発育の乏しい私の胸に指は押し戻されることなく肋骨を叩いた。

私はスレンダー体型、私はスレンダー体型……。自分にそう言い聞かせながら、意識を無理にでも説明に向ける。

「身長だけじゃない。利き手すら交互に入れ替えてたし、手足の切断面にしても綺麗すぎて力の加減も分からなかった。『手がかりなし』って言葉にするのは簡単だけど、実現するとなると悠志君が言った通り信じられないような神業なの。垂直に刺せば身長が分からない？ 両手を交互に使えば利き手を隠せる？ 綺麗な切断は体格の情報を残さない？ 理論としては考えられても、こんなのは結局机上の空論よ。必死に抵抗するだろう被害者相手に、切羽詰った状況下でそんな事ができるわけがない。けれど、それを犯人はやってしまっている」

それがハート事件の最大の特徴であり、恐ろしさだった。

犯人が切れ者だった事は言うまでもないが、それ以上に、

「天才だったのよ、ハート事件の犯人は」

その点こそが恐ろしい。

鮮やかな手際や明晰な頭脳を駆使する大泥棒や怪盗が、盗む対象を宝石や美術品から人命に転向したようなモノだと考えればいい。

その才能が盗みに向けられているからこそ、彼らは創り物の中で人々の共感を得られるのであって、それが殺人に向いてしまった時の大惨事を実際に経験させられたのがハート事件だったとも言える。

「だからこそ、手がかりがなかった」

「天才、ですか？」

悠志君は納得しかねるといふ表情を寄越してきた。

その反応は正しい。確かに人殺しの天才などと創りモノめいた存在をそう易々と理解できるわけもない。それはあの当時をまさにその場所で体験していなければ分からないものだろう。

なので、もう少し掘り下げて話す事にする。

「悠志君、ハート事件の犯行がどのように行われたか、警察の資料にはほとんど載ってなかったでしょ？」

「ええ……、そう言えば『刺殺後、心臓と手足を切断』としか」

「いや、殺害方法じゃなくて犯行そのものの事なんだけど……まあいいか。犯人はね、抵抗する暇も与えず胸を一突き」

そう言っただけは蜜の胸に手刀で刺す仕草をし、それからぐるりと左胸に沿って手を回転させる。

「後はこうしてアリスを掬うように手を回して心臓を切り取って、倒して四肢を切断、そして腕を絡ましてハートを作って……甘く見積もって約二分でそれをやったのよ」

「二分？　いくらなんでもそれは……」

「それぐらいでなきゃ五件目の犯行は無理なのよ。登下校ネットワークと監視、破られてこそ避難を浴びたけど、あれはほぼ完璧だった。そもそも犯行現場は集合ポイントから曲がってすぐの所だったのよ？　不審がられて作業中に覗かれたら即アウト。監視の隙を狙うのに、それ以上のタイムロスは危険過ぎる。それだけじゃない。さっき言ったけど、問題は殺害自体ではなくて犯行全体の手法の方だね。『手がかりなし』、何度も繰り返した言葉だけど、未だ犯人が捕まってないならともかく、捕まった今になっても資料に詳細が載っていないなんて、やっぱりおかしいでしょ。君の言った通りあり得ない」

「あ……」

彼も気づいたらしく、そう言っただけで頭の中に残っている資料の記憶を探り始めたようだった。

「犯人が捕まれば当然家宅捜索はしたはずよね？　凶器の血を拭いた布とか返り血の付着した衣類とか風呂場の血液反応とか、それら

について記載がないのは何でだと思つて？　そもそもハート事件は『遺留品なし』で有名になつた通り魔連続殺人よ？　犯人がどのように人の目を避けて犯行を行ったのかという点に、一切触れられてないのは何故？」

「ごくりと唾を飲み込む音が聞こえた。一々反応してくれると説明する側としては冥利に尽きる。何せ、その横のやり手警部補は私の連れとポーカーをやつてるのだ。これほど熱心な視聴者の有り難さが身にしみるシチュエーションもない。

「気にしても仕方ないので気を取り直して話に戻る。

「なかつたからよ。犯行手法を推測できるようなモノが何も。もちろん五、六件目に関しては制服のブレザーを裏に着て犯行を行つたつて分かつてはいるけれど、それはハート事件としても例外的な状況下での犯行だから別として……前の四件、通り魔的な犯行だったその四つに関して、犯行で必ず出るだろう血の付いた廃棄物すら全く見つからなかつた」

「今度は叫ぶ事なく静かに私の続きを待っていてくれる彼。聴取の練習つて事も忘れてるんだらうなあ。

「どうやればそんな犯行が可能なのか。死人に口なし。犯人の口から語られる事がない以上、真実は永遠に闇の中だけど、それでも結果から逆算してみる事ぐらいはできる」

「どう、やつたんですか？」

と、そこで、

「池田君、少しぐらい自分で考えなよ。『犯人になつたつもりで』つて刑事の大切な手法よ？」

「今まで話に加わらずに蜜とポーカーをしていた可奈さんが口を挟んできた。トランプにも飽きたんだらう。気配な人だ。

「はい、がんばります……」

「職務を放り投げて、娯楽に走つてる上司に頭が上がない悠志君に合掌する他ない。

フルハウスで蜜の五〇〇円を巻き上げながら彼女は続ける。

「どうしても無理なら、こう考えてみようよ。いい？ 君の近くには憎たらしいあん畜生が居る」

「はあ……？」

「そいつは自分とあまり変わらない歳の癖に出世頭で、大して凄腕には見えないのに何時の間にか手柄だけを持つていく」

一斉にそのご本人様に視線を投げる残り三人。

「さらには身分を利用して我が俣ばかりやって、拳句上司まで顎で使う悪党。これ以上好きにさせるわけにはいかない！ 僕が殺らなければ！ ……さあどうする？」

「本当に勘弁してください」

だよね。もうやめてあげて可奈さん。酔っ払いみたいな絡み方しないで、お願いだから2人で大人しく遊んでください。

「完全犯罪…… ああ、今回は快樂殺人に限定するけど、それを行うにあたって問題になってくるのは何だろう、悠志君？」

「凶器の処理、返り血…… 目撃者だと思います」

「まあそんな所だけど、もうちょっと正確に言えば凶器の調達と処理、遺留品と目撃者、被害者と自分を結びつけてしまう廃棄物よ。

復讐殺人じゃないから疑われさえしなければ調べられないとはいえ、凶器から身元がバレる事はまず考慮しなければならぬし、万が一疑われた際に証拠さえ残さなければ罪には問われない。逆に言えばそれをクリアできれば完全犯罪は可能という事になる」

「けど、無理でしょう？ 刺殺なら血のついた何かしらが絶対に残る、白藤さんも言ったじゃないですか」

「普通ならね。でも不可能ってわけでもない。返り血ができるだけ付かないようにするっていうのは言うまでもない事だけど、付いた血にしたって要は染み込む布地に付着させなければ、調べようのないモノで拭き取ればいいんなら 裸で殺して血は舐め取ればいい（、、、、、、、、）。肌なら衣類と違って血は染み込まないし、肌が付いた返り血は舐めれば取れる。凶器も同じように舐めて血さえ拭るか、口内粘膜細胞のDNAが気になるんだったらティッシュ

で拭いて飲み込んでもいい。何にせよ、服に血がつかなくなる程度に舐め取った後に銭湯にでも温泉にでも入りに行けば自宅の水回りに血液を残す事もないわ。浅越市にはスーパー銭湯が五つに個人経営の銭湯が二つ、それにこの県に限って言えば電車で一時間もしい所に温泉街がある」

「でも凶器の血液反応は誤魔化せませんよ？ 凶器だけはどう足掻いても問題として残るでしょう？」

「それについては凶器の調達と一緒にクリアできるのよ。凶器の刃物。これも足のつかない所から手に入れて、気付かないように処分すればいいんだから、結局のところ自分と結び付けられないような場所から借りてきて返せば（、、、、）バレはしない。調べられさえしなければ血液反応なんて気にする必要もないでしょ？」

「確かに気づかれずに借りられそうでしょうけど……、普段使わない刃物が置いてあるような都合のいい所なんてあるとは思えませんが」

「あるのよ。刃物を保管していて、毎日使うわけでもなくて、管理の仕方がきつちりしてる分盗むも返すも比較的やり易い場所 小学校の家庭科室（、、、、、、）がね。まさかそんな場所に包丁を戻しに行ってるとは思わない。家庭科実習までに返せば、生徒が血が付いていたとは知らずに調理してしっかりと洗ってもくれる……まあ、纏めると凶器は学校の家庭科室から盗って、春の露出狂ファッションで出歩いて、裸を見せて啞然としてるところを殺して、返り血は舐め取って、犯行帰りに銭湯でさっぱりして事よ。帽子の下にシャンプーハットでも被れば髪の毛を落とさなくて済むし、あと体毛も先に処理しておくことさらにいいかな。耳掃除もやって皮膚片がポロポロ落ちないようにローションでケアなんかもすれば完璧」

「まるでデートの準備ですね……」

「それぐらい気を使わないと遺留品やら何やら残しちゃうもの。でも、そこまでして死体を晒すぐらいなら事件自体の発覚を防ぐ方が楽でしょ？ だから殺人犯は死体を隠すものなんだけど、……そう

いう意味でも死体を残したハート事件の犯人は異質だった。今話した完全犯罪の方法だって、手がかりなしって結果から導いただけの机上の空論だしね。理論的に可能であっても実現可能とは限らない。そもそも幾ら念入りに準備をしても目撃者だけはどうしようもないじゃない。犯行を重ねる毎に標的が減るのと同じ理由で目撃される確率は減るとはいえ、五人……いや、一人はトイレだっけ？ともかくそれだけ屋外で殺しておいて一つの支障もなく全て成功させられる確率はどれくらい？ 怪盗の手口を真似られないのと同じで、あんな方法常人にできる範囲を超えてるのよ。『死体さえ発見されなければ』なんてセコくて合理的な手段が私達泥棒風情にはお似合いな。だから、こんな事ができた犯人は間違いなく天才だった」

「けど、捕まった？」

「まあね。でもはつきり言っただけの偶然よ。ネットワークやらで焦れに焦れて登校中の生徒を狙ったからこそ、自分も学生だった彼は着脱の面倒な制服姿で殺すしかなかったわけだし、それでブレザーを裏に着て犯行を行ったわけだしね。前四件に比べればお粗末なその犯行にしたって私がブレザーに苳ミルクぶっ掛けなきゃバレはしなかったし、犯行はもつと続いていたかもしれない」

「ああ」と彼はさつきから筆記に使われていない右手のペンを私に向けてきた。「そう言えばどうして噴いたんです？」

「あれね……」

そこで台詞を区切って、一口自分のカップに口をつける。悠志君が誘われて珈琲を口に含んだのを確認してから言っただけだ。

「蜜が言ったのよ。『牛乳に血が混ざったら苳ミルクみたいな色になるのかな？』って」

ブツツとむせる悠志君。まあ、そうなるわよね。

「よく……分かりました」

「でしょ？ でも結果的にそれが広一君の計画を狂わせた。シャツにまでついた苳ミルクを拭くために、私の手はブレザーの中に、ハンカチには血が。その時は気付かれなかったものの、見つかるのは

時間の問題。それまでに私を殺さなければならぬのに、よりにもよって私ほど男と二人きりなんてシチュエーションを作り辛い人間もないわけで……。万事休す、彼は捕まるまでにどれだけ多くの人間を殺せるかに狙いを変えた。私に対する復讐のつもりでその中に蜜を入れてね。蜜と仲のいい数少ないクラスメートの一人だったのよ、彼」

「それでももう一人の被害者と教室に？　でも集会前で点呼もあったでしょう？」

「うーん、中谷真希ちゃんは別のクラスの子だったから、たぶんサボろうとして残ったところを引きこまれたんじゃないかな？」

「僕は『話があるんだ。点呼が終わったらこっさり抜けてきてくれないか？　白藤さんのハンカチに血みたいなのがついてた気がして……彼女の鞆を調べたい』って言われたんだけどね」

「それで、後は知つての通りの結末よ」

「白藤さんや教師が駆けつけて……警察が到着、ところがそこで彼は容疑を否認してあなた達こそ犯人だと言った」

「そうよ。そこが問題だった。さっき言った通りハート事件の四つ事件は証拠が一つもない。中身がすつからかんで何も分からない中、犯人だけが捕まったの。凶器から被害者全員の血液が発見されはしたけれど、ハート事件と彼を結びつけるモノはそれだけで、目撃者である私達が犯人だとすればその証拠も疑える。彼の自宅捜査は当たり前前として、私達が彼に罪を着せたとすれば残るはずの証拠を隠滅される前に発見しなければならぬ。その結果が例の大捜索。まさか、そこまでやるとは私も思わなかったけどさ。ニュースでも流れてたから知ってるでしょ？」

「ああ、はい。確か『現行犯逮捕に関わらず大規模捜索』とか」

「そう。最初は大つぴらに言いはしなかったけど、犯人が既に捕まってる中で、全校生徒が持ち物全てを調べられたのよ？　私達の私物は科捜研行き。言わなくても噂は立つし、私も詰め寄られて白状するしかなかった。警察も同じ。下手に隠すのも無理があったのよ」

あの状況は。結局そんな証拠が見つかるわけもなく、彼が犯人として捕まったけど、私達に対する疑念が払拭されたわけじゃない。そんな中で彼は否認をし続けた挙句自殺した。白桃シロップ説を信じる人間も怖いけど、私達に恨みを持つ人物にとつてもつけ入る格好の際になるでしょ？ 恨まれる生き方をしてると自覚はしてるから、その予防というか牽制というか……そういうのを兼ねて名探偵なんて名乗ってるのよ。こうなっちゃった以上予防の意味はなくなっちゃったけど」

「はあ……恨まれてるんですか？」

「そりゃあもう」

自分で言うのもなんだけど常人の数倍は恨みという恨みを大人買いしてる自信がある。

ここでやつと彼は聴取らしくノートにペン先を当てた。

「じゃあとりあえず特に恨まれてる人に心当たりは？」

「「両親」」

蜜と声がハモる。そんな些細な事がやっぱり嬉しい。ハモった内容はともかくとして。

「僕の両親は児童虐待その他で服役中で」

「起訴の首謀者が私。で、私は両親と縁を切って家を出ただけ、その際貯金やへそくりをかつさらったのよ」

だつて裁判維持費に必要だつたんだもん。刑事と民事の両方で訴えたからなあ。

「あと蜜の父親をバッドで殴って訴えられもしたし、その事でも恨まれてるかもしんない」

そんな私達の台詞に悠志君は啞然としている。

「ほ、他には？」

「えーと、当然だけど広一君の遺族、後は白桃シロップ説を信じてるハート事件の被害者遺族という可能性もあるし……」

「野村君は？」

「あー、あのいじめっ子？」

「依頼はいじめの調査だったのに、解決までしちゃってさ」

「そんなにサービスしたかなあ？ 目線入れて動画サイトに投稿しただけじゃん」

「ブレザーに思いっきり校章と名札付いてたけどね……」

名札の色が何かで学年まで分かるのよね、中学高校のつて。

「ちよつと待った。蜜だつて高校の社会教師の授業内容が分かりにくいつて解雇させたよね？」

「やだなあ。それは前々から悪評だったからだよ。僕一人の意見でなつたわけないでしょー？」

「私立高の、それも校長御曹司がそれぐらいで解雇されるわけないじゃない。何やったの？」

「ちよつとセクハラを暴いただけ。というかさ、その校長もすぐ居なくなつちゃたけどあれは桃ちゃんだよな？」

「だつて仕方ないじゃない、変に恨んで蜜の虐待の話蒸し返そうとしたのよ？ 発言力のない地位まで引きずり下ろさない」と

「ずり下ろすつて言えばさ、男子のズボンずり下ろさなかつた？」

「小学校の頃の話でしょ、それ」

「後はー、ああ南城君。中学の時一緒だつた南城和樹」

「南城、和樹……？ クラスに居たつてそんな人」

「えつ、覚えてないの？ ひつどいなー。いい？ 南城君はね、熱帯魚好きの引つ込み思案で大人しい男の子だつたんだよ。そんな彼がある日、学内で有名な美少女桃ちゃんを体育館の裏に呼び出したの」

「へえ、今時珍しい告白よね」

可奈さんもそれには興味を惹かれたらしく話に入ってきた。

「ちよつと待った、美少女？ 私が？」

「桃ちゃん、ホントに自分の事分かつてないよね……。長身ですらつとして足長くて長髪で大人びてて、かなり男子から人気あったんだよ？」

「ふうん？ 私あの頃から蜜しか見てなかつたしなー」

「うん、ありがと。で、話に戻るけどちょー美人な桃ちゃんに勇気を出して告白した彼に、桃ちゃんはこう言いました。『女装して出直しなさい』」

「……………うん、どうかしてたな当時の私。その頃読んでた小説の影響だろうか？ 今なら蜜以外に興味ないって言うのに！」

過去の自分に問いたい。どうしてそんな事を忘れていたのか、どこら辺が自重していたのかと。

「そうして彼は引き籠り現在に至るわけだね」

それから室内に漂う気まずい沈黙をどうしてくれる。

悠志君もちやつかり彼の名前をメモしないでほしい。

「白藤さん、本当に覚えてないんですか？」

「いや、どうだったかな……………」

和樹かずきカズキ…………。熱帯魚好き。そう言えばそんな子が居た。

「水槽の水つて餌をあげ過ぎると酸性に傾くんだよ」 そんな台

詞を聞いた覚えはある。後は『引き籠り』。その類のワードにも聞

き覚えはあるのだけど、あれはたぶん中二の時だったかな、ええと

…………。そう例の広一君からだ。和樹君が不登校になってしまったから

見舞いに行つてほしいと面倒見がよく、彼にプリントを持っていつ

ていた彼に言われて、私は確か 「蜜とデートがあるから無理」

…………と答えたわけか。

「……………」

さあて、新たな情報も出てきた事だし、改めて自己紹介をしよう。

私の名前は白藤桃 人間の屑だ。

しかし、待つてほしい。

「それを言うなら蜜だつて、告白してきた三浦君の事フツた拳句に

彼女にチクツでしょ？」

「そうだっけ？」

「そうよ。あの時の蜜、『男に手を握られた』って泣きっぱなしで

大変だったんだから。それで大事になつて結局彼女と別れちゃった

上に噂になつて『三浮気』とか呼ばれてたじゃない」

「あー！ あったあつた！ でもそれって彼女持ちのくせに告った方が悪くない？」

「悪いけどさー。彼女の方まで何か恨んでたって話を聞いた気がする」

「あー、高校の頃だよな？ 時効だと思っけど一応火種は消しとく？」

「元鞘キョーベツで？」

「いや、恋の矢で貫く方。どうせ今でも女漁りしてるんでしょ三浮気君は。その辺の噂を彼女に流せば失望で恨みもなくなるんじゃない？」

「じゃあ健二君と……美優ちゃん真美ちゃん辺りに連絡取ってみる？」

「ん、どうせなら徹底的に叩き潰したい、かな」

「となると同級生に直接接触するのはNGか。でもなー、人雇うとなると結構取られるしねえ」

私達のそんなやり取りを聞いていた悠志君が可奈さんに言う。

「先輩、ここに諸悪の根源が居ます」

失礼極まりない台詞だけど全くもってその通りなので否定できない。

けれど言われればなしも嫌なので、ここは一つ彼よりは分別のある大人として言わせてもらおう。

「悠志君、そんな君に有り難い格言を教えてあげる」

「はあ、なんですか？」

「憎まれっ子世にはばかる」

彼は無言で私の名前を手帳に書き込むと、それを何重にも丸で囲んだ。

4、殺人継続 エレベーターは人を呑む

「つーまーんーないー……つまんないつまんないつまんないっ！」
朦朧とした意識の中、霞んだ視界を揺さぶられて、私の思考は余計に混濁する。

ソファーにどっぷりと背を預けて、束の間の休息を得ていた私に乗りかかるようにして、蜜が私の肩を掴んでいるのだ。

「つまんないのー、ねえ桃ったんー？」

第二の事件……生足ポスト事件からすでに十二日が経過し、その間捜査やら何やらに忙殺された私は当然蜜の相手ができずに、蜜は欲求不満でもはや爆発寸前というのがこの状況。

「とりやつ」

「のうっ！」

寝不足で力なんてロクに入らない身体をソファーに倒され、いつも通りのポジションになってしまった。

駄目だ。このままだと過労死の前に蜜に殺されそうだ。

「蜜……我慢してよ。構ってあげたいのはやまやまだけど、今の私達結構ヤバイのよ？」

「うー」

「二度目よ二度目。私の周りで同じ手口。間違いなく私達が疑われる。気が抜けないの」

「……だって、桃ちゃんすっごく辛そうだよ？ 眉間にしわ寄ってるよ？」

誰が揺らしたせいだと。

「それに……こう、なんか、もやもや」

何かしら感じているのには気づいているけれど、それが何なのか分からない様子で彼女は頭を掻き篦った。

「嫌い、嫌、哀しい苦しい……」

「妬ましい？」

「それ！」

「……嫉妬してくれるのも心配してくれるのも嬉しいけど、それなら手伝つてよ。蜜の肩書きは一応名探偵助手なんだからさ。情報整理とか得意でしょ？」

今にもくつつきそうになる私と蜜の面前に、合わせた両手を滑り込ませる。蜜はふくれっ面をしながらも拘束を解いてくれた。

「それで何すればいいの？」

「2-1の関係者に連絡入れたでしょ？ あれの聴取メモ纏めて。私は他の関係者当たってみるから」

押し倒された体勢から腕をテーブルに伸ばして、ケータイとクリップボードを手取る。ボードに挟まれているのは学級通信網などのプリントだ。プライバシー問題が叫ばれる昨今、作らない学校が増えたので自作した自信作ではあるものの、その情報量の多さに今自分が苦しんでいる。

今回の件が白桃シロップ説からくるハート事件の復讐であるとするとならば、犯人は当然あの時の関係者 被害者遺族及び被害者に強い想いを抱いていた第三者だろうことは想像がつく。

ただ、問題は何故今になってという点で、もしも事件が起きたのが来年だったなら、私達が成人して少年法の適用年齢から外れるのを待っていたとも考えられるけれど、現時点での私達の年齢は十九歳なのであり得ない。

となれば、この五年間の空白には何かしら他の意味がある事になるわけで、『今になって』、その条件は犯人を絞り込むにあたっての外せないものになる。

……のだが、それを捜査するのは骨を折る作業だ。

少年法抜きに考えると、他にはその理由として、何かしら白桃シロップ説を信じるきっかけが最近あった事なんかが挙げられるのだろうが、それをどうやって調べるかと言えば、関係者を当たって最近誰かにあの事件について話す機会があったか聞いて回る事ぐらいしかできない。話したとなれば、その相手にも連絡を入れな

ければいけないし、こんな目の粗い網では犯人を見逃している可能性すらある。

時間が刻一刻と過ぎていく中、成果の上がるかも分からない作業に追われる不安感ほどストレスになるものはない。

「もしもし、板川リリナ様ですか？ はい、いえ、実は……」

この事件はハート事件と同じく全く手がかりがないため、遺留品からなんていう現代科学万歳な捜査法も、占い師もびっくりなベテラン刑事の山勘も、何そのこじつけと言った感じの名探偵の推理も役に立たない。

あるのはただ、消去法による地道な努力と実るであろう地味な結果だけだ。そして選択肢がごまんとあるこの世界の中では絞り込む事すら大仕事になる。

「はい、お忙しいところ、ありがとうございます」

通話を切り、溜息を吐いて、赤ペンで彼女の住所に線を入れる。

収穫は芳しくない。他の条件を当たってみる方がいいのだろうか？
例えばハート事件とは関係ないけれど最近恨みを買った人物とか、前に悠志君が訊いてきた事ではあるけれど、確かにその可能性は捨てきれない。ハート事件の関係者でなくてもあの事件を利用しようとする者も居るだろう。

ただしその場合問題となってくるのは、あの殺人方法を短期間で再現できるかという事だ。天才の犯行と私は表現したけれど、それが凡人にできないとは思わない。人間、他を顧みず一点集中すれば、達人の業に匹敵するのは不可能ではない。が、そこまでしてハート事件に執着する理由がそもそもそう言った連中にはないし、五年間を犯行を真似るのにかかった期間と捉えると、最近の因縁絡みでは、

「うん……？」

自分の思考に引つ掛かりを覚えて首を傾げた。

最近……短期間では無理？

それから今まさに自分が持っているクリップボードを一瞥し、何

故それを調べているのかを思い出す。

白桃シロップ説を信じるきっかけが最近(、) あったかどうか。
「ぐああああ……」

何とも言えない喪失感に苛まれソファで悶え、拳を転げ落ちた。
無駄！ ここ数日間の努力が全部無駄あ！

「嫌だもお……」

ただでさえない気力を絞っていたというのに、ここにきてトドメを刺された気分だった。

バタつかせた手がテーブルにあった今日の朝刊を床に落としてしまい、仕方なく手を伸ばして拾い上げる。三面記事に踊る見出しは『マスコミ関係者騒然？ 小包み爆弾依然として続く』。最近やっているのはこの事件ばかりだ。放送局・新聞社・雑誌社に爆弾が届いたというその記事は、「未だかつてないテロ活動？」と大仰にマスコミテロを匂わせていた。自意識過剰なのか自信過剰なのか。自分の報道するその情報にそれほどの価値があるのだと本当に思っているのだろうか？ 警察嫌いとマスコミ嫌いを患っている私にはくだらない以外の感情が湧いてこない。

そんな記事より、目下問題なのはハート事件の記事だ。

力なく立ち上がってホワイトボードを眺めれば、そこには被害者の写真と詳細、遺族に関する事柄が書かれている。そのスペースを確保するために、長い間居座り続けた人食いパンダを消したわけだけど、その際に断末魔が聞こえた気がするのは気のせいだと思いたい。テーブルの上には付箋を貼り付けたA4用紙やメモ用紙、写真なんかバラけていて、その中で目についた一枚を拾い上げれば、それは何の変哲もない修学旅行の写真だった。映っているのは犯人であるところの広一君だ。

ボードの空きにその写真をマグネットで止め、名前と『犯人』の文字を書き込んだところで手が止まった。遺族、それについてペン先を滑らせる事ができないのを思い出してキャップを嵌め直す。

彼の遺族であり唯一の家族だった祖母は彼の死後一ヶ月も経たな

い内にこの世を去っていた。

ハート事件と違い復讐殺人であるこの事件において、犯人の最有力候補になるはずの彼との因縁だけはブツリと切れてしまっているのだった。それも今私を悩ませる要因の一つと言える。かなり縁遠い親族にまで遡ってはみたのだけど、目ぼしい人物は居なかった。だからこそ、犯人は被害者の関係者にほぼ絞られるのだけれど、それにしたってかなり微妙な線には違いない。

ハート事件の犯人が白桃シロップ説に則って私達だと仮定するならば、その実行犯は蜜であって私はその隠匿を手助けした共犯者という事になる。ならば被害者遺族の恨みの矛先はまず蜜に向かいそんなもので、二回に渡って私を狙うのは筋が通らない。

何もかもが不確定であやふやで推理しようにもその土台から不安定すぎる。

ただ一つ確かな事があるとすれば、今後事件がどのように展開していくにしても、それが私達にとって不利な事であるというその一点だけだろう。

ハート事件という縛りがなければ私達に恨みを持った人物は今も昔も掴み放題なぐらい居るが、それこそ私達に直接手を下せばいい話でもある。

まさしく五里霧中だ。

ホワイトボードからコルクボードに視線を移し、そこにピンで留めてある新聞のコピーを手取る。最初の事件の被害者に対する記事で、それに貼られた付箋には『猫の名前は「美々」とメモされていた。一体何の役に立つのか分からない情報だけど、思いついた事柄を手当たり次第貼り付けたのでそんな付箋が至る所にある。

同じ推理を堂々巡りするのを避けようと『殺人真似るにも時間的猶予が要る』と書こうとして、付箋が最後の台紙だけになっているのを見つけた。その原因は間違いなく私が馬鹿みたいに乱用したからで、その消費ペースと比例して愛用している事もまた事実である以上、切らしてしまうのは困る。

整理という行為が好きな蜜と違って私はかなり大雑把な性格をしている。どこにでもメモを貼れる強粘着のポスタイトがないと頭の中の情報すら纏められはしない。

……仕方ない、買いに行こう。

気晴らしにもなるだろうし、流石に籠り詰めでインスタント食品もなくする頃合いだ。そろそろレトルトカレーと乾麺には飽きたし、スパゲティのソースでも色々買い込んでみよう。

「蜜、ちよつと買出し行ってくるから」

「あ、じゃあグミ買ってきて、果汁グミ。あとキャラメルツ！ それから歯磨き粉とティッシュとお米もそうだし……いつものサプリも切れかかっているからよろしくねー」

必要物資を買いに行くだけの私に、自分達の置かれた現状を理解してるとは到底思えない台詞をかけてくれる蜜。目で訴えてみるもまるで効果がないようで、彼女は小首を傾げてはにかんだ。

「……行ってきます」

突然だけれど、総合スーパーってすごく便利だと思う。

ポスタイトは文具店、簡易食品とお米にお菓子は食品売り場で日用品である歯磨き粉とティッシュも同じフロア。サプリメントだけは別の場所にある薬局で買わなければいけなかった事を差し引いても、これだけ多種多様の物が一ヶ所で済むのだから有り難い。

欲を言えば買い物リストの中に無洗米五キロが入ってなければさらにこの買出しは楽だったのだけど、散々レトルトカレーで消費したのは自分もよく覚えているので、今後また引き籠り生活をするためにも買わないという選択肢はなかった。

しかし重い。その上ビニールが手にめり込んでかなり痛い。

車、買おうかなあ。

通学にも便利だろうし、温泉好きの蜜と湯巡りツアーというのも

乙だ。運転できないわけでもないしね、免許がないだけで。

あーでも運転の仕方知ってるのに教習所とかめんどい。内容をほぼ映画で知ってる原作読むような面倒くささがある。

スーパーからほど近い場所に居を構えているとはいえ、重いものは重いし痛いものは痛い。

お米だけでなくレトルト食品もかなり買い込んでいるため、重さと重要性が比例しているだけに、投げ出すわけにもいかない。よって、何度も降ろして休み休み進んでいくしかないのだけど、紫外線対策も怠った太陽の下など一秒たりと居たくもない。

痛みかメラニンか……何度目かの葛藤中、ふと視線をいつも行っている喫茶店に向けると、中にあり得ないモノが見えた。

思わず立ち止まり眉間に皺を寄せる。目を擦って額に手をやって異常がないのを確認してからもう一度。

そこには変わらず、我がかつての同級生が例の中年刑事梶川さんの胸倉を掴んでいる姿がある。

そんなシュールな光景を眺めてしばらく、

「よし」

何かしらをまくし立てる中学校の旧友を見て、私は大きく頷いた。「無視しよう」

あんな所に入っていていい事はない。話してる内容も容易に想像できるし、ここは見なかった事にしよう。そう思い、踵を返した時には遅かった。

こっちに気がついた彼女がバンバンと店のガラスを叩いて自己主張し、その度に左手に握られたネクタイも一緒に動いて、梶川さんの首を絞めているらしく、彼までもがこっちにSOSを求めてきた。「うわぁ」

鬼気迫った顔の彼、そんな事はお構いなしに旧友を見つけにこやかに手を振る彼女。その惨状に余計関わりたくなかったのだけけれど、逃げ出そうにも店内のお客や従業員までもがこっちを見ている。この喫茶店は私の行き付けだ。ここの苺のショートケーキは絶品

で大学帰りによく食べに行く。よって店員とは顔見知りであり、もしここで私が逃げれば、次に来店した時気まずい雰囲気になる事も目に見えているわけで……………、
ち、畜生！ い、苺ショートが！ 苺ショートさえなければ！

「 ああ。こいつ刑事なんだよ、だから絞めてた」

言うまでもなく店に入り、腹いせにそれなりに値の張る苺ショートを三つ並べた私の、「で、何してんのよ？」という問いに対して、我が友人から返ってきたのはそんな答えだった。

なるほど、合点した。どうやら私の知らない間に、この世の中は警察というだけで暴力を振るわれるようになっていたらしい。

…………… まあ、冗談はともかく。

その色々と情報の足りない台詞の間には「お前の事をコソコソ訊こつとしてきたから」という言葉が入るのだろう。この男口調で話す豊実ゆたかという名前の旧友が情に厚く、気立てのよい人格者である事はよく知っている。ハート事件の大捜索の際に私達を庇ってくれた誇れる友人だ。

が、彼女が実弟にベタ惚れで、彼の前となるとお淑やかな少女に変貌する恋する乙女である事もよく知っているので、素直に誇る気にはなれない。

そう、私達に白桃シロップという名前を付けた例のシヨタ女がこいつなのである。

全く。一発ぐらい殴ろうと思っていたのに、こんな光景を見せつけられると殴るに殴れないじゃないか。

「それも聞けばこいつ、例の事件に携わってたらしいじゃん」

その言葉に私は少し驚いて梶川さんを見た。

「そうなんですか？」

「あ、ああ…………… まあ、捜査員の一人としてね。当時に面識はなかったはずだが」

そういう事か。刑事というだけで手を出すのはやり過ぎだと思っ
ていたけれど、だからこそ実は胸倉を掴んだわけだ。当時、刑事に
罵られた事があるだけに、そんな連中がまた私達に容疑をかけてる
と知ってキレたと。

駄目だ、完全に殴る機会を逸した気がする。

「でも、なんだよ。知り合いなの？」

「うん、まあ」

「ふーん、じゃあいいか」私の一言で彼女は敵愾心がすっかり失せ
たらしく、警戒をすんなり解いた。「でも、おっさん何が訊きたい
んだ？ あの時現場に居たんだろ？」

「いや型通りの聞き込みだから、特にどうこうというわけではない
んだ」

「何それ、胸倉の掴まれ損じゃん」

梶川さんも、掴んだ本人には言われたくないだろうに。

「じゃあいいや。それよか白桃に相談したい事があるんだけどさ」
国家権力である警察の仕事を「それよか」の一言で流して彼女は
ポーチから紙切れを取り出した。新聞の切り抜きらしく、折りたた
まれた裏側に小さな文字が羅列している。内容を見るまでもなく心
当たりがあつた。それは今朝の新聞にも書かれていた事だ。

「例のマスコミテロの事？」

「え？ 何で？」

ところが彼女は、その応えをまるで予期していなかったようで、
きよとんとして目を瞬かせた。いや、「何で？」って……、

「……あなたの父親、記者じゃなかった？」

「あ、ああーそっぴいやそっぴいだっけか。うん……でも何で？」

本当に、本当に父親の事はどうでもいいと言わんばかりの台詞に、
梶川さんが辛そうな顔をしている。考えてみれば私達と同年代の娘
が居てもおかしくない年齢だ。いや、反応からして居るんだろうな。
可哀想に……。

しかし、この年頃の若者が親に大して興味を抱いていないにして

も、少々なさを過ぎやしないだろうか？ 普段ならともかく、報道関係の会社に小包爆弾が届けられ続けている非常事態下だ、普通気にしないだろうか？ そう思っただけで自分に照らし合わせてみる。同性愛のカミングアウトから関係が決裂したまま、一度も顔を合わせていない両親。あの二人に何かしらあったとして………うん、別に気にしないな。

そう結論を得て、それから思い当たった。つまり、私と同じ？

「あんた親にブラコンバレたの？」

言われて、彼女はうげつと可愛くない声を上げた。

「バレたんだ……」

あの変貌ぶりだ。いつかバレると思ってはいたけれど、ついにその時が来たらしい。

「まあ、ここ半年ほど口聞いてないかな。母さんは大丈夫だったんだけどさ」

「父親が？」

「『馬鹿な事に感^かじてないで』だと。自分こそ馬鹿な事件を追いかけてるくせにな」

警察同様マスコミもバツサリ切り捨てて鼻で嗤う彼女。ここまで来るといつそ清々しくもある。

「まあ、私もジャーナリズムって嫌いだけどさ。じゃあ相談したい事って？」

「これ、にゃんこ虐殺事件」

切り抜かれた新聞記事を広げて、バンとテーブルの真ん中に叩きつけて彼女は言った。

「この犯人を見つけたいんだ。今日はこれを白桃に相談するため浅^{あさ}越市に来たんだよ」

『またも猫の虐待死体、これで七件目』という見出しを見て思い出す。確か七月上旬頃、地方新聞を賑わせていた事件だ。前に大阪の公園であった『連続捨て猫虐待事件』の模倣犯だとか変な憶測まで飛んで、それなりに大きく取り上げていたけれど、報道テロで完全

に紙面やニュースから消えていた。が、当然の事ながらだからといって犯行が止まったわけがなく、今でも尊い命は奪われ続けているのだらう。

「一、二件目は公園で毒殺、その後の五件は殴殺。浜川市で起きてる連続猫虐殺事件。これの犯人を追ってるんだが、素人じゃ限界がある」

「ふうん？ でもどうして？ あんた愛猫家だったっけ？」

「うん。こーちゃんが好きだからな」

こーちゃんというのは彼女が猫（、）可愛がりしてる弟の愛称だ。「こーちゃんは可愛いモノが好きでな、特に小動物をもふもふするのがお気に入りなんだ。それで公園の餌付けした猫をよく撫でるんだが、その仕草がもう可愛いなのって。だから俺も猫は好き」

ああ、……先が読めてきた気がする。

「ところが、だ。そんなある日、いつも通り公園に行つてこーちゃんが見たのは何だったと思う？ ……ふふっ、それっきりこーちゃんは塞ぎ込んだままだ」

笑顔でポーチを漁り彼女が取り出したのは女性の手にはあまる大型のペンチだった。

「まあ……小指ぐらいは、ね」

この世に、人の愛ほど怖いモノはないと思う。そして触れぬ神に祟りはない。ここは下手に刺激しないように犯人には犠牲になつてもららう事にしよう。

「いや、待ちなさい」

指詰めなんて今じゃ暴力団だつてやらないだとか、そもそもペンチじゃなくて刃物でやるものだとか、そういつた事を口にせず適当に流そうと思つていた私より先に、梶川さんが暗い笑みを浮かべている彼女からペンチを奪つた。

空気を読んで欲しかったのが半分、読んで何もしなかつたらしなかつたで警察としてどうかと思つただらうというのが半分。ともかく、先ほど胸倉を掴まれまでの彼はそれでもはつきりと言つた。

「そんな事をやって損をするのは君の方だ。愚劣な人間相手に時間を消費する必要はない。そういう事こそ警察や検察、裁判所に任せおけばいい」

凶器を奪い返そうとした手を止めて実は梶川さんを珍しそうに見つめ、

「梶川……さんだっ たっ け？」

初めて彼の名前を呼んだ。

「あんたの言い分は分かるよ。それをあんたが至極真面目に俺を心配してくれて言ってるのも分かるし、雑巾みたいに皺の寄ったネクタイで何かツッコつけてんのは思わない」

だからそれはあんたがやったんだろうと私が突っ込む事はなく、それを口にした時点でアウトだとも突っ込む事なく、彼女の話は続く。

「けど、的外れだ。俺、別に犯人を捕まえたいわけでも、裁きたいわけでもないもん。司法機関が裁くのは罪に対する罰だろ？ 私がやりたいのはこーちゃんを傷つけた事と、こーちゃんに笑顔をくれたにゃんこ様を惨殺してくれた事に対する個人的な復讐だ。だいたいさ、知ってる？ 愛護動物の殺傷って、一年以下の懲役か一〇〇万以下の罰金だけなんだぜ？ 法ほど命の格差を教えてくれるものはないね」

そう言われてしまえば彼は黙るしかなく、彼女がポーチから新たに折り畳み式の鋸を取り出したのを見て、無駄だと理解してペンを返した。

私としては、蜜が同じ目に遭った場合、同じ事をするだろうと自分の事ながら容易に想像がつくので何も言えない。いや、指で済ませられる自信すらない。

彼女は弟を私は蜜を、同様のベクトルを持って愛しているからこそ、私達は中学校からウマが合って友人をやっているのだ。

ならばせめて、彼女の復讐の矛先が無関係な人物に行かないように努力するでしょう。

テーブルに置かれた記事を引き寄せて、内容を確認した後に見る。

「他の記事とかは持ってる？」

「ああ、持ってる」

そう言っただけで彼女が取り出したのはA5サイズのファイルだった。手渡されたファイルを開いて、事件の概要を確認していく。

涙川市猫連続虐殺事件。彼女曰く「やんこ虐殺事件」。

七月上旬、今回私が巻き込まれた事件の少し前にその事件は始まった。初めの一件目、そして二件目共に近所の住民が餌をやっていた餌皿に農薬が混ぜられていたらしい。その後三件目は前二件と時間を開けて、公園から路地に場所を変えての殴殺。いや、殴殺や撲殺やと記事によって表現が違う事からみても、おそらく殴ったり蹴ったりだけではないのだろう。尻尾を持って叩きつけたとブログ記事の印刷には書かれている。その二件目以降は全て殴殺で、犯行現場は公園から離れて路地などが多くなり被害も拡大し続けているのが現状、と。

「ふむ……」

二つ目の毒ショートを口に運びながら、解決策を考える。

まず、一件目と二件目の毒殺が同一犯の犯行かどうか。これは検出された農薬を調べれば分かる。もし違っていた場合面倒になるんだけど……まあほぼ同一だろう。

「一応俺も調べてみたんだよ。ほら、途中から犯行現場が公園から路地になっちゃってるだろ？ これって公園で餌づけしてた猫が居なくなっちゃったからじゃないかと思ってさ、ネットを色々調べてみたんだよ。捨て猫なんて探してそう見つかるもんでもないから、ネットで情報集めてるんじゃないかって」

「……趣味を持ってないほど精神的に余裕がない、あるいは趣味に時間を割けない生活を送ってる。だからストレスをうまく発散できない。人や物に当たるのは怒りに行き場がないから。猫の虐殺は猫が居なければ成り立たない。犯人は登下校途中か出勤途中か帰宅途中

か、猫が公園に居るのを見て虐待を思いついた。故に近場に住む人間　まあ犯人像はそんなところでしょ。その捜査法で正解ね」

「ああ、結果『浜川市の猫を守ろう』とか言って捨て猫の情報集めてるサイトを見つけてさ、偽情報で鎌かけてみたらあっさりヒットで、絞めたわけよ」

「首を？」

「首を。けどなかなか吐かなくてさー」

「そりゃ首がしまつてちゃ息すら吐けないでしょうに」

「まーそうなんだけど。とりあえず弱らせてから問いただしたら、『僕がやりましたごめんなさい殺さないでください』って吐いたわけ。そうと分かれば、後は小指で落とすし前を着けさせるだけじゃん？　ペンチ片手ににじり寄ってたらそこでメール。開いてみたらさっきの記事だよ。『またも猫の虐待死体、これで七件目』。改めて訊いたら、そいつが殺つたのは四から六件目の三件だけなんだと。こーちゃんの猫が殺されたのは三件目。間一髪だよ全く。間違つて指落とすところだった」

確かに間一髪だ。言うまでもないが、もちろんその猫殺し君にとって。彼は今後、生まれ変わったように真面目な人間になる事だろう。

「それで結局振り出してわけ」

「なるほどね。犯人は捕まえたはずなのに犯行は続いているってパターンか」

と、言ったところでふと思いついた。

ハート事件で捕まった広一君。少なくとも五、六件は彼の犯行以外ありえないけれど、他の四件について繋がりを示すのは凶器だけだ。そもそもその凶器は犯行後には調理実習室に戻されたという私の仮定を前提に考えれば、包丁が真犯人から広一君に渡った可能性はな
くはない。

もちろん天文学的確率だけれど、理論的に矛盾はない……のか？
いや、幾らなんでも飛躍しすぎか。

例えそうだとしても、ハート事件が終末を迎えた後の行動に疑問が残る。もしも真犯人が事件終結をよしと思わなかった場合、広一君逮捕後にも犯行は続いていたはずだ。この五年間それがなかった事からして、これ幸いと真犯人は、少なくともハート事件の手口では犯行を自粛しただろうと考えられるが、だとすればここにきて再度ハート事件を再開する理由は何だろう？ 快樂殺人犯的な気まぐれ？ そんなふざけた動機、推理小説ですらブーイングされそうだが現実的に馬鹿らし過ぎるし、私だって納得できない。殺人を愉しむのならもつとリスクの少ない方法は幾らでもあるし、劇場型殺人

いわゆる目立ちたがり屋による社会お騒がせ型犯罪だとハート事件を考えてみても、それだってさらにインパクトのある演出を私にですらプロデュースできる。何より説明できないのは、私達の周りで殺る理由が真犯人には全くないという事だ。ハート事件が冤罪で終わった事を黙認していただから、逆恨みすらされる筋合いがない。うん、現実的に考えてこの線は無理がある。

そう結論つけて、違う事柄に向いていた思考をにゃんに戻す。

「要は三件目の犯人を探したいって事なら、私は毒殺犯から攻めるかな」

「初めの二件か？ でも三件目とは手口が違うぜ？ 犯人が複数居るのはすでに確認済みだしなあ」

「自分で言ったじゃない『公園で餌づけしてた猫が居なくなった』って、路地のにゃんこスポットがどんな所か知らないけど、餌づけされてるとは限らないわけでしょ？ 餌に農薬混ぜる方法は取れないから殴殺に変更したって取る方が自然よ。手口が違うからって犯人を分けて考えなくてもいいと思う。まあ確かに最悪後四人の犯人が居る可能性もあるけど、今は無視して問題ない。犯人がまだ複数居たとしても、それを絞り込むのどうせ確かめる必要があるから」

「ああ、だから『毒殺犯？から？』……ね」

「そ。猫が居なければ猫の虐殺はできない、毒がなければ毒殺はできない。農薬が身近な毒物っていうのは否定しないけど、その農薬

だって日用雑貨ってわけじゃないんだから家に置いてあるとは限らない。仕事の関係か趣味か……」

「待った待った、農薬ぐらい花屋で買えるだろ？」

「買えなくもないだろうけどさ、そういう所に売ってるのって大抵鉢植え用のでしょ？ 小動物とはいえ、猫一匹殺すにはちよつと頼りないと思わない？ 致死量なんて分からないし、毎日やって死ぬのを待つのはストレス発散としてはねえ？ 目撃される恐れもあるしさ。わざわざ用意するのにそんなモノを買うかなあ。私だったらホームセンターの業務用品にするわ」

「あ、そっか。浜川市にはないな、ホームセンター」

「浜川市からだすると浅越市のセンターが最寄りになるのかな。

まあそこから調べるのもありだけど、二件と三件目が同一犯とする、割とあっさり手口変えてるのよね。大して毒殺に拘ってないみたいだし、農薬は単に身近にあつたから使つたんじゃない？」

「そっういや、ガーデニング好きの奥さんのトコ、不祥の息子が居たなあ……」

「人様の息子を不祥呼ばわりするのはどうかと思うけど……、まあ、それで無理ならまた来なよ」

「ああ、ありがと。お礼は？」

「いいよ、ケーキで充分。いい気分転換になつたし。やっぱ推理するなら簡単なフーダニットよねー」

「フーダニット？」

聞きなれない単語だったのか、さつきから黙つて私達の会話を聞いていた梶川さんが口を挟んできた。

「Who done itでフーダニット。『誰がやったか』が推理の主題って意味です。推理小説で使われるんですけどね。他にも How done itハウダニットや Why done itホワイダニットというのがあつて、それぞれ『どうやってやったか』、『何でやったか』を示すんです。犯人が誰か、手口はどうか、動機は何か。要はどれに重点を置いて推理が展開するかって事なんですけど……例えば、今回私達

が巻き込まれた事件は、私達からすれば犯人探しだからフードニツト、警察が私達を疑う場合は今更同じ手口で殺す動機が問題になってくるからホワイダニツトで、さらにハート事件で大搜索の容器が見つからなかった事を考えるとハウダニツトになります」

「まあ、やってないもんを探ったって何も出てこないだろ。白桃は幾らなんでも自虐が過ぎるよ」

実はそう言ってから手を上げて店員に追加のマンゴージュースを頼んだ。そのどさくさで私もモンブランを注文。新しい皿が来る前に残っていた三つ目のケーキ一口を平らげる私を見て、珈琲しか頼んでいない梶川さんは他人事のように呆れ顔だったけれど、どうやら彼は私達の会話がいまいち理解できていない(、、、、、、、、)ようだ。

運ばれてきた甘い栗のケーキを一口目は味わって、後は足早に口に放り込み、最後に少し残しておいた紅茶を飲み干す。

さて、これで被った迷惑に見合うだけのケーキは食べた。

違う事に意識を向けさせて逃げる、違う事に意識を向けさせて逃げる……大丈夫、今日は可奈さんは居ない。難易度は低いはず！

「でも、警察は証拠や手口なんて気にしないんでしょうけど。昔から変わらず何よりも重要視されているのは自白ですから」

わざと漏らした批判の言葉に、彼が反論しようと口を開いたタイミングで立ち上がった。

「それでは、結構余裕がないんでこれで」

実もそれに合わせて席を立ち、もう一度ネクタイの事を詫びた後、先に出た私に次いで店を出た。

店に残されたのは何も言えないまま、立ち上がる機も逸つして座り続ける梶川さんと、実の私への相談料も含まれたケーキ八個と飲み物五つ分の勘定書。

大丈夫、経費で落ちるさきつと。

道草の後、例の重い荷物をさらに休み休み運んで、私はやっとマンションまで辿り着いた。

事務所は二階、普段なら階段で上がるところだけれど、流石に今日ばかりはそんな気力もなく、エレベーターを使わせてもらおう事にした。すでに持ち手のところが細く変形してしまったビニール袋を、足の間に下ろしてボタンを押す。十七階で止まっていたランプが降り始めるのを確認してから、暇な時間を潰すために袋の中から一つ商品を取り出して眺めてみた。

いつものとは違う会社のカルボナーラソース。どうせなら食べ比べをしてみようと大量に販売社の違うものを手当たり次第買い漁ったものの一つだ。

そのせいでここに辿り着くまでが険しい道のりとなったわけだけど……。

その苦労分は美味しい事を願いながら再びそれをビニール袋へと放り込んだ。視線を正面に戻せばいい頃合で、電子パネルは「2」と表示していた。

やっと帰れる。その一心でもうひと踏ん張り、拷問器具と化した袋を持ち上げる。エレベーターへと入ろうとして　けれど、ゴトン、と。

せつかく持ち上げた荷物は、直後、四角い化け物の胃袋の中広がる光景に面食らって、力の抜けた私の手から落下した。

そこにあるのは、まさしく消化途中と表現するのが相応しいような　バラバラ死体。

エレベーターの正面、一番奥に掛けられた鏡に映った私の姿は赤く、側面の壁はペンキ缶をぶちまけたかのような勢いのある模様が血で描かれている。視線を床に落とせば切断された手足が転がされ、血の気が失せて白くなった肌を汚す赤が毒々しい。

仕上げとばかりに生首がごろりと転がっていて、その瞳と目が合ってしまった。

これは……きつい。

人が人を認識するにあたって最も重要な役割を果たす頭部が損壊されているというのは、手足が切断されているのとは比べものにならない怖気がある。慣れているとは言わないまでも、この先死体を見つけるかもしれないと覚悟はしていた私でさえ拒絶したくなる光景だ。

けれど、これが私の相手にしている事件である以上、現場を確認する絶好の機会を逃すわけにいかない。冷静に努め、改めて現状を確認する。特に気をつけなければいけないのは凶器。その有無で大きく意味合いが変わってくるのだけれど、それが見当たらないのもう一つ、その場に足りないモノに気づき、私は思わず顔を天井へ上げた。

ないのだ、胴体が。

その事と内壁の飛び散った血痕、加えて監視カメラの存在から考えて殺害現場はエレベーターの中ではない。四肢と頭は投げ込まれたと考えれば現場は……。さっきエレベーターが何階に止まっていたのかを思い出す。

十七階。おそらく心臓のない胴体はそこに置いてきぼりだ。

そう。心臓がない胴体。

前回の事件とは似ても似つかない異常に異常を塗り重ねたような惨状にも関わらず、ご丁寧にも切り離し投げ込まれた手だけちゃんとハートを包んでいる。

……最近、扉という扉を開けるのが怖くなってきた。

呆然とその様を眺めていた私の目の前でドアは閉まり、ゆっくりと上昇していく。

大して高くない階層からの呼び出したのか、すぐに停止したびっくり昇降機が第二目撃者を作り出したらしき悲鳴を聞きながら、私は一一〇番した。

俯瞰から覗かれる青みがかった視点。

しばらくの沈黙の後、急に音が生まれドアのガラスから狭い箱が上昇しているのが分かる。

目的の階層についたらしく『17』と電光板に表示させて規則正しい機械音と共に開く片側式の扉。

けれど、呼んだはずの人物が一向に乗り込む気配はなく、しばらくして無人のエレベーターに左足が放り込まれ、右足が放り込まれ、両手が優しく投げられて、最後生首がごんつと鏡に当たって床を転げた。

決められた滞在時間を過ぎてドアは自動でしまっていく……。

これが例のエレベーターから撮影された第三の事件の貴重な映像だ。はつきり言って、下手な心靈映像よりホラーである。

額に保冷シートを貼ってソファーに寝っ転がり、MP3プレイヤーの小さい画面でそれを確認した私は、それを悠志君に渡した。特捜本部からはぶられ、こんな映像すら見せてもらえない彼はその映像を見て素直に感嘆の声を上げた。

「よく手に入りましたね、こんなもの」

警察と友好関係を築く意義もあって名探偵を名乗っている私達が、何で警察に情報を回してるんだろう。頭痛を覚えて保冷シート越しに額に手をやって、天井から向かいのソファーに視線を移した。

悠志君、そして可奈さん。

もはやサボタージュの弁解すらせずに訪ねて来ては駄弁るのが習慣と化している彼女らは、今日も今日でお茶を啜りながらお茶請けに手をつけている。いつもなら私の好物そのままに果物なのだけど、今日は趣向を変えてみてフルーツ餅にしてみた。剥いたり切ったりが要らない分用意はしやすかったし、甘味の好きな蜜の事も考えるところの方がお茶のお供にはいいのかもしれない。ただ賞味期限の事を考えると先に用意しておけるモノではないんだよね。

一通り見終わって悠志君が返してきたプレーヤーを灰皿に放り込

んで火を点けた。

「ああつ、もつたいない！」

「あのね……違法手段で手に入れた証拠物件を残しておけるわけないでしょ」

プラスチックスを焼く嫌な臭いを追いやるために窓を開け、再びテールに戻ってきた頃にはしぼんで黒い塊になっていたそれを屑かごへ放り込んだ。

「それにこれ、書き込みと再生しかできないのよ。データの売買用のちゃちい造りで壊す事を前提に安く脆く作られてるの」

情報自体はそれなりにかかったけれど……まあ元々手がかりになる事を期待してはなかった。どちらかと言えば警察がどんな情報を得たのかを知りたかったというのが大きい。それにしたって警察からタダで手に入れる事に越した事はなかったのだけど……、

「まあ、犯人の姿は映ってないんだから大して価値のない映像よね」仲間外れにされている可奈さんといえは全く気にした風もない。

「はあ……」

あれから四日が経って八月二日の現在、依然として犯人は分からないままだった。

いや、どこるか犯人の意図が全く読めない事件展開になってしまっている。

一件目の佐々木裕子、二件目の押川友恵、そして今回の件にしてもハート事件と同様、遺留品と同じく、凶器が見つかっていない。ハート事件の因縁説を考えた場合、今回わざわざ私の周りで事件を起こしたのは冤罪をかけるためだと考えるのが妥当だ。特に広一側の人間からすれば、彼に冤罪をかけた私を貶めるという意味合いを持ってくる。だからこそ、犯行現場に凶器のないこれまでの三つの事件は解が合っていない。

犯人の計画はまだ途中で、だから凶器は取つてあるとも考えられはするものの、それは事件が終わってからでしか判断しようがない。問題は犯人の狙いが分からない状況では、当然動機が断定できない。

い事だ。このハート事件の二番煎じが復讐殺人だとすれば、キーワードは動機。大切な人を殺した『白桃シロップ』に対する復讐なのか、大切な人に冤罪をかけ自殺に追いやった復讐なのか。それがあやふやなままでは幾ら推理しても確信は持てないだろう。

けれど、だからと言って事件が終わった後では自分達は身動きも取れない可能性すらある。

何にしても頭が痛い話だ。

三時間ほどで効果の切れた安物の保冷シートを剥がして新しいものに変えに立って、私は再びソファにだらんと寝転んだ。

接客中にも関わらずそんな姿を晒す私の姿や、お茶請けに舌鼓を打ちながら携帯ゲームをやり始めた上司、フルーツ餅をミルクココアに浸して遊んでる蜜の様子を見て、流石に問題意識を持ったらしい悠志君が口を開いた。

「いいんですか？ 推理しなくて」

「そういうなら、自分がやってごらんよ」

正直、推理しようがないという結論を得た私にやる気はない。

「ええっ、僕ですか？」

「そうだよワトソン君」

「さあ、話したまえワトソン君」

私と可奈さんの二人に促され、しばらく考えた後彼はしゃべり始めた。

「僕は、この事件、四つほど可能性があると思います」

「へえ？」

「一つ目は白藤さんも言っていたハート事件の加害者内山広一遺族による犯行です。これだと、桜川さんではなく白藤さんを狙っているのも説明できますし、直接手を下さないのも冤罪をかけるためだと考えられます」

「でもそれじゃあ現場で凶器が見つかってない事は説明できないし、そんな分かりやすい動機を持つてる人物が居たら、もう事件は終わってるわよ」

「……第二にハート事件の被害者遺族説」

「それも私の説だし、広一君の遺族説以上に矛盾が多いから考えにくい。被害者側なら蜜を先に、それも直接的に狙うだろうし、そもそも自分が娘を亡くしたっていうのに無関係の他人を殺すと思う？」

「三番目は全く別の恨みを持った人物の復讐」

「だったら尚更直接手を下すでしょ」

「四つ目、これが本命です！」

相次ぐ私の駄目出しにムキになった彼は叫んで言った。

「白藤さんと桜川さんの自作自演！」

……彼はある意味大物なのかもしれない。よく本人の前で言えたわよね、それ。

「悠志君、じゃあ訊くけどさ。何で今更になって事件を蒸し返したの？」

「え？」

「せっかく噂が収まったのに、それを自分達で蒸し返すメリットは？」

「え……と、目立ちたいから？」

言って、自分でもかなり無茶な理由だと思ったらしく目を泳がしている。

「あと、もう一つ、ハート事件もが私達の自作自演だとしたら、自分達で終わらせた理由は？ 事件を終わらせたいなら犯行を止めればいいだけでしょ？ 一ヶ月もすれば世間は忘れる。危険を冒して、結果白桃シロップ説なんて疑惑までかけられてまで、警察が手掛かりの一つも掴めなかった事件をあんな終わらせ方をする必要があったの？」

「……無理がありますね」

「それに、例えば悠志君が言う通り私達が目立ちたがり屋の連続殺人愉快犯だと仮定しても、その説は無理があるのよ。より多くの人間を殺したいならそもそも死体を隠した方が数を稼げるし、少なくとも

も自分達がまず疑われる同じ手口で殺したりしない。目立ちたいんなら、十人でも二十人でも殺した後、交番に凶器でも送りつければいい。ハート事件と関連づけたいのなら飾りつけた死体の写真を同封すれば済むのよ。その方が捕まるリスクが減るし、何より警察に邪魔もされないでしょ？」

「確かに……」

「だから今回の事件に白桃シロップ説を適応するのは難しい。……というか、そんな事本人に言わせないでよ」

「すみません……。でも、それじゃあ」

「ん？」

「犯人は誰なんでしょう？」

こつちが訊きたい馬鹿野郎。

「一番考えられるのは一番目の広一君遺族説なんだけどね。蜜でなく私を第一ターゲットにしてる理由も説明できるし、今後凶器さえ見つければ推理としては矛盾も解消されるし。でも、現段階ではそれも判断できないから、今はこれ以上推理しようがない。……と言っうわけで私も君の上司もやる事がなくなってだらけてるの」

お分かり？ そう言って、私はまた保冷シートを剥がした。くそう、これ全然冷たくない！

シートに頼る事を諦めて、冷蔵庫からソーダアイスバーを箱ごと持ってきた私は一つを口に咥え、もう一つを額に乗せた。その様子を呆れ顔で眺める彼にも一本投げつけてやる。

包装を破り食べようとしたところで、彼の口は開いたまま止まった。

「そついや、一つ気になるんですけど、犯人はよくあんな状況で人を殺せましたよね。昼間とはいえ、誰がいつ通るかも分からないエレベーター前で、それも一歩間違えれば姿を取られかねないリスクまで犯してる。幾らなんでも殺しに慣れ過ぎてると思いませんか？ 今回の事件だって天才的ですよね？」

「天才がそう何人も居るかって事？ まあ確かにそこが遺族説のネ

ツクなところで、逆に言えば白桃シロップ説の強みでもあるんだらうけど……それも判断が難しいわよ？ 天才的行為を成すのに天才である必要はないんだから」

「でも、ハート事件の起きた際に現れた模倣犯は全員逮捕されてますよね？ 未遂で逃げられたとか遺留品でバレたとかで」

「それはハート事件から間もない頃の話でしょ？ あれから随分年月が経ってるし、そもそも興味本位でやったやつらと、復讐のためにハート事件の手口を再現しようとした人間を比べるのが間違いよ。そうでなくても天才は素質の有無ではなく才能の片寄りで生まれるんだから」

「才能の片寄り……？」

「脳科学的には天才も凡才も才能の総量は変わらないって話、知らない？ 天才と凡才の差はその限りある才能をどう分配するかで生まれるってやつ。ほら、本当に天才って呼ばれる人物って風変わりな人が多いじゃない？ 偏屈だったり、人とうまく付き合えなかったり……集団の中で異彩を放って見えるっていうのは、そういった集団に溶け込む能力を別の分野に回してるから。ま、だから天才と呼ばれる人間は才能に自己表現を依存しがちだったりするんだけどね。秀でた能力を持つ者は他の能力に乏しい、あるいは好きこそ物の上手なれって表現でもいいかな……要は天賦の才と努力の才は違うように見えて仕組みは同じで、当然得られる結果も同じって事。殺人だつて突き詰めれば一つの技術なのよ。コツさえ掴めれば再現できない事はない。だから、復讐のために他を顧みず、多くの才能を犠牲にして、犯行手口の模倣だけを考えた人物が居るとするなら不可能とは言い難い。最長五年も時間があって、しかもハート事件という前例おてほんもあつたわけだしね。それにそう考えるとハート事件と今回の事件とでの犯行の違いも説明できる……」

「え？ 違いつてありましたっけ？」

「ハート事件はほぼ屋外、今回のはほぼ屋内で行われてる。目撃者だけは運の問題だから。それが天賦の才と努力の才との自信の差と

も取れなくもない」

「なるほど」

「いや、納得しないでよ。筋は通るっただけで証拠は一切ないただの推測なんだから」

すると、彼はおかしなものを見るような目で私を見つめた。結局まだ一口もつけていないアイスバーが垂れかかっている。

「何よ？」

「いや、普通そういう事って自分では言わないって」

「あのね……、私一応名探偵を自称してるのよ？ 推理に関してはそれなりにポリシーがあるの。感情入れてたら正確に答えが出せない。そんな危なっかしい推理はやりません」

何を感じているのやら、今度は神妙な顔つきになった。

なんだろう、ここまで素直な人物を相手にするのは逆にやりにくい。何でこんなまつさらな人間が警察なんてやってるんだらうと、偏見でしかない事を考えて思わず訊いた。

「悠志君は警官になりたくてなったの？」

「はい」

返ってきたのは当然肯定で、彼の清く正しく正しくに憧れる真面目青年な天然記念物という印象は確信に変わった。

駄目だ、汚れてる私には辛い相手だわ。

「白藤さんは『一応一応』って言い続けてますけど、探偵じゃなかったら何になりたかったんですか？」

「うーん、蜜と結婚？」

「それ……？ になりたい？ 夢ですかね？」

「まあ、今の日本じゃ籍は入れられないし、夢っちゃあ夢でしょ？」

「そうかもしれないが……、それじゃあ他では？」

「えー？ そう、ねえ……不老不死かなあ」

「なんですかその子供みたいなの……」

「失礼な。私はまだ十九歳の子供だし、警察官よりよっぽど現実味がある夢よ」

一本目を食べ終ったので、幾らか溶けてしまった額のアイスを頬張って、代わりに新しいのをおでこに乗せる。クーラーをガンガンかけた部屋で思いつく限り身体を冷やしてみるのだけど、一向に熱っぽさは解消されない。熱がある事を意識すると気力までもが蒸発して抜けていくような気がする。もはや悠志君に相槌を打つのすら億劫だった。最初は抗議の声を上げていた彼も、私の聞く耳を持たない態度に諦めたようで、やっとアイスバーに口をつけた。

会話が途切れ、刑事と名探偵が事件そっちのけでだらけるという混沌とした状況が続いてしばらく、

「あー、そういえば」

今までゲームに熱中していた可奈さんが口を開いた。

「そういえばさ、綾香ちゃんがよろしく言っというたって」

その言葉に、散々噛んでボロボロになったアイス棒を投げ捨てようとしていた私はフリーズして、恐る恐る訊く。

「……………彼女と知り合いなの？」

「んー、というか従妹が同類（、）（、）」

その予想の斜め上を行く答えに、精神の安静のために、もう一度口に戻していた棒がへし折れた。

『従妹の時に精神疾患について調べた』って、そういう事か。確かに精神疾患とアレは似てはいる。彼女がやり手警部補なわけ……。化け物とコミュニケーションが取れるのなら人間を手玉に取るのは容易いだろう。

そもそも連中と関わり合うという事は、運如何で食いモノにされる可能性があるという事だ。地雷原で障害物レースをやるより致死率が高い。そんな中で平然と生き残れる人間……。ぬらりひょん。焼け太り可奈ちゃん。なるほど、それ以上相応しい言葉もない。悠志君と違って正義感や使命感で警官をやっではないとおもっていたけれど、それどころか一般人以上に道德観を持ち合わせてないんだ、彼女。

となると、彼女がこうして度々ここに居る理由も何となく分かつ

てきた。

捜査から外されても平然としているのも、むしろどちらにつけば得をするのか判断するのに都合がいい程度にしか考えていないのだから。

なるほど、なるほどね。

あの幽霊め。

まさかあんたの差し金じゃあないだろうな。そんな気持ちを込めて天井を仰ぐ。

こちらからは見えないがあちらからは見えているはずだ。全く、趣味が悪い。

「どうかしたんですか？」

天井を覗むという奇行に走った私に、悠志君がもつともな疑念をぶつけてくるが、こればかりは説明が難しい。

「ちよつと浮遊霊がね……」

ぼやかして言った私の言葉に彼もつられて上向いた。

「視えるんですか？」

「いや全然。ただ、居るのは間違いないわ」

性格の悪い彼女の事だ。ケラケラ笑いながら私達の現状を見て笑っている事だろう。

それを厭わしく思うのと同時に、傍目から見てもこの事件が無責任な大衆の興味をそそるに十分である事も再認識させられる。

最悪の事態を想定しておいた方がいいかもしれない。床に転がり捜査資料で紙切りを始めた蜜が目に入って、真剣にそう思った。

何の変哲もないA4用紙があら不思議、ほんの五分で飛び出す人食いパンダに！

……いつその事海外に避難するのも手か？ あんな感じで蜜には手に職があるし、私にもクローズアップマジックがある。英語なら私ができるし、何より海を渡れば、さすがに白桃シロップ説などという忌まわしき因縁に振り回されはしないだろう。私達が名探偵なんてものをやっているのは、純粹に謎解きが好きなわけでも、勧善

徴悪が好きならわけてもなく、要らぬ火の粉が飛んでくるのを恐れてなのだから。

事件が解決しなくても、自分達に害がなければどうでもいい。けど、この五年間ほどで広げてきた人脈を、ほぼ捨てなければならぬのは痛い。

そんな事態になるとはあんまり考えたくないけれど、何にしても備えはしておくべきだろう。

せめて知り合いの弁護士に連絡ぐらいはつけておこう。

そう思っただけのケータイのアドレス帳から『友達』のカテゴリーを選択し、そこで指が止まった。

「弁、護士」

思わず呟いて、その意味を考える。事件において被告側に立って弁護する人間。被告側の味方（、）につく人間。

ハート事件にも弁護人はついてはいたはずだ。確か、一度会っている。

二番煎じ事件犯人の条件は、ハート事件と関わりを持ち、かつ事件で得た不利益を私達のせいだと考えている者……。

広一君の自殺。あれは確か弁護士が差し入れた聖書を使ったんじゃないか？

となると、ありもしない責任を取らされた可能性は高い。

弁護士、ね……。思えば、その発想はしてなかった。

ハート事件で人生を狂わせた人物、そして遺族のいない広一君側から私達を恨める人物。

居るじゃないか。

5、推理閉鎖 その先行き止まり

道元麻央、当然女性で当時二十六歳。浅越市女兒連続殺人事件の被告内山広一の弁護士を担当。

しかし、初公判前に広一君が彼女の差し入れた聖書の紙を口と鼻に詰め自殺。あれほど騒がれた殺人犯の自殺はマスコミの標的となり、所属していた弁護士事務所は彼女を解雇、キャリアに傷をつけた彼女は弁護士生命を絶たれた。あれから数年、司法試験という大きな壁を乗り越えた彼女は、ハート事件による世間の仕打ちをも乗り越えて、現在小さな法律事務所を構えている。全くマークしていなかった彼女の近況を至急探るべく、面倒くささから金にモノを言わせて、本物の探偵に集めさせた情報を纏めると大体こんな感じになる。

再起してる時点で、『弁護士生命が絶たれた』という表現がそぐわない気がするかもしれないけれど、実際にはそう表現するに相応しい状況だったはずで、事務所まで構えられるほどに立ち直っているのは一重に彼女の能力の高さからだろう。

夢だの何だのと遠く曖昧なモノを見ている人間は成功できない。設定した目標に対してどうステップを踏めば叶えられるかを見据えて行動できるタイプ。それに、逆境に耐えうるだけの忍耐力もある。今回の件　　と言いつけるのも分かり辛いので『ハート二番煎じ事件』と仮称しよう　　の犯人像には合致する。

動機も充分、わざわざ私の周りで人を殺すという遠回りをする理由もある。凶器を残さないという矛盾した行動は事件がまだ途中段階であるとして今は判断を保留。

となると次の問題はアリバイだ。

幾ら動機があっても物理的に不可能では話にならない。推理小説ならアリバイがあったとしても、『犯人はあいつに間違いない！アリバイはトリックだ！』なんて展開になるのだからうけれど、そも

そもそんな確信を持てるのなら今私は苦勞してないし、この現実世界でアリバイほど無意味なトリックはない。アリバイトリックなんて考えるくらいなら、死体を発見されない方法を考える方が幾らか建設的だ。

容疑者に決定的アリバイがあるなんてまだいい方で、あやふやだったりしたら最悪だ。犯人なのか違うのか、それすら判断できないまま捜査はやり直しになる。

単調で地味で、成果が挙げられたかも判断しづらい。閃きがなければただただルーチンワークでしかない、それが名探偵の思考作業である。

はつきり言つて探偵本人の心情描写を地文に描かれている小説はすごくつまらないものになるだろう。探偵が事件を説明する途中経過が書かれているんじゃ、謎解きとしても面白くないし。

……ああ、だから推理小説は探偵自身ではなく少し頭の緩い助手が主人公なのかと今更ながらに思った。

ともかく、作業は地味で内容はほぼ脳内会議に始終する捜査活動の結果、私は今繁華街にある貸しビルの前に立っている。

二日という短期間で探偵社に調べさせた情報によれば、道元麻央の拠点はこの七階建てビルに入っているという。狭い範囲に店やら事務所やらを詰め込めるだけ詰め込もうとしたような、節操のないこの一帯には珍しくはない低く狭い建物だ。

通りへ突きだされた看板を確認すれば、一から三階はアパレル店で四階は囲碁教室、六、七階は雀荘となっていて『道元法律事務所』が五階フロアである事は資料とも一致していた。

ビルそのものに備え付けられているらしいエレベーターと階段を、アパレル店とは切り離された端の廊下奥に見つけて足を進める。

その途中アパレルの可愛いワンピースが目に入った。ああいうの、蜜に似合うんだろうけど彼女は買っても着てくれないだろう。彼女は黒ワンピースと帽子が殊お気に入り、他の服を着たがらないから。

改装されてはいるものの、年季の入ったビルの昇降機は五人入ればぎゅうぎゅう詰めになりそうなほど狭い。

エレベーター。その単語にふとこの前の事件を思い出し思わず上を見上げた。あいにくとこの機体にはカメラは備え付けられていないが、マンシヨンのモノと重ねてこの小さな箱で起こった出来事を思い返してみよう。

一歩間違えれば監視カメラに写ってしまう状況下で、わざわざ四肢と頭部を放り込むような真似をする理由には何がある？ 何せ肝心の胴体は十七階で、凶器だって結局見つかっていない。それにあの事件に関して私は殺害現場に足も運んでいないのだ。冤罪をかけるにしては不可解な行動が多い。冤罪が目的……とは言い難くはないだろうか？ けれど、だとすれば何が狙いになるのか、それがまるで思いつかない。

犯人の考え、狙い……それが何なのか、私は本心から分からない。チン、と到着を知らせる電子音に顔を天井から戻す。視界に映るのは事務所と廊下を仕切る擦りガラスとシールで貼られた事務所名。恨まれているかもしれない相手との対面だ、少し緊張する。

一息吐いてからドアノブに手を伸ばした。

道元さんと初めて会ったのはハート事件当時、広一君弁護の関係で事情を訊きに彼女が訪ねて来た時だった。駆け出しでの経験不足を真面目さや堅実さで補って、日々励む若き弁護士という印象を持った事を覚えている。

ただでさえ警察やマスコミ相手に気を張らなければならなかったあの頃の私は、かなり精神的に参っていたのだけれど、広一君を弁護するには私達を貶める事が最も容易かつたはずの彼女がそういう目で私達を見る事はなかった。

無実を証明するのか無罪を主張するのか。まずは事実を見極めようと彼女はしたのだらう。「広一君は人を殺して喜ぶような子に見

えなかったわ」と彼女は彼の印象を語ったが、その同じ目で私達を潔白とも判断し、彼に減罪を求めめる方向で裁判を進める事を伝えたいらしい。けれど、同意したかに思えた彼はその時欲した聖書で自殺してしまっただ。

「私が罪を軽くする方向性を示した時、広一君は裏切られたと感じたのでしよう」

自分で運んだ紅茶を一口、上向いて彼女は思い出すように言った。あれから五年。私達が中学生から大学生になるほどの目まぐるしい時の経過に、彼女もまた晒されたようだった。皺が刻まれるとは言わないまでも、心労が身体に影響した結果なのだろう、凜とした顔立ちの中に疲れが見える。髪の手入れすら億劫なのか、髪型はあの頃とは違ってベリーショートで、それでもタイトなスーツ姿は当時のままだった。

「弁護すべき……味方であるはずの人間が自分の主張を信じてくれなかった、その絶望が彼を自殺させてしまった」

私の責任ですね。そう苦笑いしてカップを置く。

「……あなたは今でも彼が犯人ではないと思つていますか？ 絶望して自殺した彼は犯人ではないと……あれは冤罪だったと」

「分かりません。ですが今でもこの目で見た彼の印象が間違つていたとも思いません。自分が女兒連続殺人事件の容疑をかけられていと知つた彼の驚きとショックは本物だったと思つています」

ですが、と彼女は私をまっすぐと見つめる。

「あなた達が犯人だとも思えません。例え彼の言い分通りだったとして、血を持ち運ぶのに不可欠であるはずの容器は見つからなかった。学校中をひっくり返したんですよ？ あれほどの大捜査の結果発見できなかった。疑う余地はありません」

「そうだといんですけどね」

けれど、実際は疑われている。

白桃シロップ説の根底にあるのは悪魔の証明だ。

血を運んだ容器が見つかれば、『私達が犯人である』という証明

になり得るのに対して、大捜索で見つからなかった事は『ない事の証明』にはならない。

見つからなかっただけ……幾ら完璧に捜索が行われていても、疑う余地を末梢する事はできない。

少なくとも警察の特捜本部の捜査が私達に及び始めている事は知っているし、

「私達が犯人であつてほしいと願う人物にとって、あの捜索は疑いを晴らしてくれはしません」

「そうかも、しれませんが。そして……疑いをかける人間は、かけられた人間の心を蔑ろにしがちです」

「ええ、本当に」

「あの事件で身に染みてそう思いましたよ。彼は死に、あなただつてストレスで胃に穴を……。だから、その経験を生かして、私は今加害者の弁護に力を入れています」

それはまた……ドラマチックな話だ。おおよそ私のような人間には縁遠い、清々しいほどの美談だ。その真偽はともかくとして、「実はあなたを疑ってます。アリバイありますか？」なんて訊けそうにない雰囲気である。

「もし何かあれば遠慮せずに頼ってください」

拳句、そう言つて自分で印刷したらしいシンプルな名刺まで差し出されてしまった。

「まあ、とりあえずは自分達で何とかしていきますよ。と言つても関係者一人一人を当たつて可能性を潰していく事ぐらいしかできませんが……。それで聞きしたいんですが、七月二日の午後二時と十六日の午後四時半、それから二十九日の午後三時頃どこで何をしましたか？」

「二日に十六日、二十九日？ もう三人も？」

「ペースで言えばハート事件と変わりありませんよ」

「マスコミは……嗅ぎつけてはいないんですね。ああ、報道テロでそれどころじゃないんですか」

「ええ、それに、ハート事件の事がありますから犯行の詳細は伏せられてますしね。一件目の発見者は錯乱して死体をロクに見てませんし、第一事件以外の発見者は私。一番厄介な発見者が喋らないんですから噂は広がりません」

もちろんこれ以上狭い市内で立て続けに人が殺され続ければ流石に連続殺人を隠し通す事は難しいだろう。

ハート事件の時もそうだ。三人目までは『普通』の連続殺人と思われていたけれど、四人目で急に慌てだした印象がある。

たった一人違うだけで少ない多いと印象が変わるのだから人命の等価なんて言うだけ虚しい。

「そうですか」

何を思っただか感慨深そうに手元のカップに視線を注ぐ彼女。

何というかやりにくい。

少なくとも見た感じは善人な彼女だと、流石の私も不躰に質問するのは憚れる。

この振る舞いが化けの皮ならともかく、素顔そのままの場合はまずい。元ハート事件の被告の弁護士という肩書きはいざという時役に立つ可能性がある。確証を得られない現状、協力関係を築ける余地は残しておきたいものだ。

「あの……それで、アリバイなんですが」

申し訳なさそうな表情を作って、逸れた話を戻すべく再び尋ねる。「え、あつ、そうでしたね。すみません。えーと二日と十六日と……」

……

「二十九日です」

「うーん、たぶんないと思います」

「たぶん、ですか」

「あはは……恥ずかしい話、そう依頼が来たりはしてないから」

これまた突っ込んで訊き出しにくい……。

「そうですか」

先ほど彼女が発したのと全く同じ台詞を吐いて、私は彼女の事務

所を後にした。

……単純にあるかないかの話であれば、道元麻央が犯人という可能性は充分にあり得る。

先ほどの談話で得た印象はともかくとして、彼女が本心を偽っているかどうかなど判断のしようがない。嘘発見器だつて間違えるのだ。生身の、それもたった二十年ほどの経験しか積んでいない小娘に見破れるとは最初から思っていない。

加害者弁護に力を入れていると彼女は言ったが、その言葉が私達にのみ向けられたものである事も考えられる。

私達の弁護を引き受ける事、それが目的だとすれば事件の状況にも説明がつくからだ。

警察の手が私達に及ぶのはどうせ時間の問題だし、裁判所という舞台に引きずり出したいだけなら、裁判を誘導できる立場になれる彼女は凶器をわざわざ遣して置く必要もない。

むしろ凶器が特定されてしまえば、そこから自分に足がついてしまつかもしれない事を考えると、勝手に警察が逮捕してくれるのを辛抱して待つ方がリスクは少ない。

自分で採取しておいた血液を私達の私物に付着させて検察側に流せば有罪に持つていくのは難しくないし、白桃シロップ説で私達が使ったとされる手段を使う事で復讐の意味合いを強める事もできる。そう考えれば矛盾はない。容疑者リストの筆頭候補としては十分だろう。

何も掴めなかった期間が長かっただけにひとまず安心した。

安心ついでに長い間溜め込んでいた肺の空気を吐き出して伸びをする。身体を伸ばし切るところ最近の疲れを追い出せた気がした。

「ん？」

ぱたぱたと階段を上るらしき足音が聞こえて閉じていた瞳を開けると、ジーンズの裾が階段の陰に吸い込まれていくところで、その

視界の端でエレベーターが今まさに締まらんとしていた。慌てて駆け寄ってボタンを押し扉が閉め切りのを食い止めて中に入った。

「ふう、間に合った」

……しかし、アリバイがはっきりしないのは困る話だ。

本当にないのならいいのだけれど、いざという時になって実はありませんなんて事になれば、それまで費やした時間が無駄になる。一応調べてみる方がいいのだろうが、第一の事件に関してはもはや一ヶ月前の出来事だ。情報が散逸してしまっている可能性が高い。今調べられるのはこれぐらいが限度だろう。

元々証拠なんてモノが出てくる事は期待していない。犯人が私達ではないとさえ証明できればそれでいいのだ。ま、その辺は今後の展開を見て最終的な判断を下すとして、今問題なのは警察の方。あんまり私達に注目されるのはまずい。変に疑われて捕まってしまうば展開を観察するどころの話ではなくなってしまう。

幸い捜査本部との繋がりはかなり間接的とはいええてきているのだし、『道元麻央による怨恨説』をそれとなく流して捜査を少しでも長引かそう。

こつこつ事をやろうという自分に自己嫌悪を抱きもするけれど、あくまで私の目的を忘れてはならない。

信用を取り戻すのが大変なのと同じ様に、犯罪歴を持つ人間は疑われやすい。ハート事件において私達がグレーである事には変わりなく、今まさに危ないバランスを保っていた疑いが狂い始めている。危なすぎる。

冤罪。その言葉を聞いて多くの人間が怖い恐ろしいと他人事のように語るが、冤罪なんてものはそれこそすぐ傍に潜んでいるし、思っているほど疑いを解くのは難しい作業だ。

街を歩いていてチンピラに因縁をつけられた時、自分の目がその彼を捉えていなかった事を証明するのが難しいように、あるいは孤島で起きた殺人事件の生き残りが自分ともう一人だけだとして、『自分は犯人ではないから』などという論法が通用しないように、自

分の心内で確信している事柄であろうと、それを実際証明するのは困難を極める。痴漢冤罪は証拠が乏しい中、被害者側の証言を重視する事で起こる。加害者と被害者、容疑の真偽はともかく、人間どちら側に同情するかなんて分かりきった事だ。

何より……、この世界に都合よく冤罪に気づいて真犯人を見つけてくれる刑事や弁護士な存在しない。

だから自分で防衛するしかないのだ。疑われやすい事を自覚しているなら、特に。

縦に流れるエレベーター越しの単調な景色を、ぼうつと眺めながら次に何をすべきかを考えていた私は、景色ではなく振動で一階に到着した事に気がついて『開』ボタンを押す。どうせ開くのだろうけれど、こういうのは気分だ。

けれど、がちよがちよとボタンの寿命を縮めさせていた指は、不意に止まった。

今の今まで思考に集中し過ぎていたせいで、気にも留めていなかった操作パネルから目を離せない。

そこにはごく普通のよく見るボタンが並んでいる。

『1』 『2』 『3』 『4』 『5』 『6』 『7』。そう、各階停止タイプ(、、、)。

わざわざ一階下で降りて階段で上る必要はない。

エレベーターは来たばかり。私以外に廊下には誰もいなかった。乗っていたのは階段を上がっていった人物でまず間違いはない。

それはつまり私に顔を見られたくない人間が、五階に用があったという事

「ッ！」

エレベーターを飛び出て今度は階段で降りてきた階層を上がっていく。

マズイマズイマズイ……！

人の滅多に訪れない事務所、連続殺人事件の連続第一発見者来訪の後見つかる死体、重なる死亡時刻と来訪時刻、閉鎖的な建物と監

視力メラもないエレベーター。

マズ過ぎる。この状況、容疑は免れない！

一気に五階までの全速力、途中足を踏み外して脛を強打しながらも、止まらずに駆け上がり、廊下に出る。半ばこけそうになりつつ足を前に。猶予はない。擦りガラスの扉にびたんと手を突いて、そのまま体重をかけた。

開く扉の先、まず目に入ってきたのはソファーに横たわる道元さん。

その胸には包丁が刺さっていて、出血自体はほとんど見られない。心臓は身体の中、手足も付いている。

殺しかけ。

足音で気付かれた。けど、まだ近くに居る。

見渡して、擦りガラス越しに黒い影が僅かに動くのを見つけた。

外の廊下！ 非常階段から逃げるつもりか！

ついさつき入ってきたドアを体当たり気味に開け放って、エレベーターとは逆方向に非常口の標識ランプの下、今まさに閉じようとしている扉の姿を認める。それが閉じるのとほぼ同時に駆け寄って、ドアノブを掴んだ瞬間、いきなり痺れがきた。振動。視線を落とせば、非常階段に繋がるドアがこちら側に出っ張っている。押しても引いても蹴り歪められたドアは開かない。

「くそっ！」

鉄製の階段を叩く足音は遠ざかり、私の吐いた悪態を最後に主人の居なくなつた事務所は静寂に包まれた。

6、ダブルデート 致命的Miss

久しくベッドで寝ていない。

寝違える事にさえ慣れた、休息としての意味しか持たない睡眠から覚めてソファから顔をもち上げると、テーブルの上に並んだ飲んでそのままのカップが目に入った。

その中から最後に口をつけたカップの記憶を探り当てて、まだ残っていた液体を飲み干すと、温くなったレモネードの甘ったるさが口内に広がった。はつきり言つて、くそまずい。

振り出しに戻った推理と捜査は依然として進展を見せず、せめてもの防衛として籠りつきりになった私達、というか私は片っ端から当時の資料と今回の資料を整理する事に時間を費やしていた。

朝の習慣通りにケータイを確認すれば、今日の日付は八月十二日十時三十一分でメールが二十三件。外に頼んだ捜査の情報等のメールからチェックして、目新しい事実がない事に落胆する……そんな日々がかれこれ八日続いている。

四件目は失敗だった。

四件目、先の三件とは違い訪問後に殺された道元さんの事件の容疑は完全に私にかかった。

外から蹴り歪められた非常扉と慌てて階段を駆け上る私の姿が私の説明した経緯と合致していたために逮捕は免れたけれど、代わりに求められた任意同行を拒否したのは、印象をさらに悪くしただろう。

もっとも、今更その印象が私達に与える影響は微々たるものだろうけれど。

警察の特捜本部は完全に私達を標的にした。『らしい』ではなく断定して言えるのは、私の筋からも確認が取れた事であり、可奈さんの筋からも確実だと聞かされたからだ。

可奈さんの筋とは梶川さんの事で、やり手女警部補と比較される

万年の被害者警部という肩書きを生かし、可奈さんを快く思っていない本部責任者につけ込んで諜報活動に勤しんでいるらしい。何が「総次郎さんが待機してるし」だ。あの人もあの人でとんだ食わせ者じゃないか。

しかしこれ以上ないほど確実に、内容が全く好ましくない情報はいいとして、この際問題にしたいのは連中の考えだ。

私達が怪しい。百歩譲ってそれはいい。そう思われる行動をしている自覚もある。

ただ、疑うのならせめて今までの事件を論理立ててからモノを言っ
てほしい。

仮に私が犯人だとして、何で今回だけ凶器を放置して、それも死体をハート事件を模せてすらいらない殺しかけのまま警察を呼ばなければならぬのか。それだけじゃない、ハート事件の犯人も私達とするなら何でわざわざ自分達で終わらせた事件を蒸し返さなければならぬのか。

少なくともこの二点をクリアしない限り、状況証拠だけで私達を逮捕するのは難しい、はずだ。ハート事件の際に私達が自分達で起こした事件を自分達で解決する動機について、一切触れないままに容疑をかけ、結果無実を自分達で証明してしまつた警察が、今度も根拠薄弱のままに同じ行動に出るのはリスクが高い。

それに今回のハート二番煎じ事件は、正確にはハート事件との繋がりはない。ハート事件の因縁と主張しているのは私達であつて警察は聞く耳を持っていないし、手口が同じであるというだけで、遺留品もなく凶器も一致していないため、模倣犯という可能性を警察は本来捨てられない。そもそも正式にはハート事件の犯人は内山広一として処理されているのだから、今回の件とは繋がりを立証できないハート事件で疑われた私達を、その容疑で引っ張ろうというのがまず無理のある話だ。

白藤桃の周りで四人が死んだ。事実はそのだけで、それ以上でもそれ以下でもないのだ。

むしろ非常扉や目撃者といった反証の方があつた。

そんな中で特捜本部の連中が私達をロックオンしたわけだから頭が痛い。つまりは、それだけ盲目しているという証明みたいなものなのだから。

警察が悪かだと言いたいわけではない。一度確信を得たモノに執着してしまう人間の性質が厄介なのだ。

今後よほどの反証が出ない限り、つまり真犯人が現れない限り疑いを晴らすのは困難と考えた方がいいだろう。

犯人は白藤桃と桜川蜜に間違いない。ハート事件の頃から疑惑はあつた。今回はまさに白藤桃の周りで事件は起きている。動機も不明だがそれは逮捕後に供述してもらう。けれど問題は証明できない事だ。さてどうする？ よし監視しよう というわけで実は現在進行形で監視されていたりする。

困つたなあ。メール内容の表示された画面に再び視線を落とす。

そこには監視警察官の動向について書かれた文章が踊っているわけだけど……何でこんなややこしい事になってるんだか。

名探偵って警察に協力するんじゃないか？ 思っていたのと大分違う関係になってしまった。それもこれも可奈さんのせいだ。テーブルに広げきれなかつたコピー紙が溢れて足の置き場のなくなった床をつま先立ちで進んで、コルクボードに留めた新聞の切り抜きを手にとつた。『警察、大搜索』、そして記事の内容には白桃シロップ説について触れた後、女子生徒二人の身辺から学校中を調べつくした警察の行動について記されている。

全てはここから始まつた。当時蜜にアタックをかけていた私が彼女とより親密になつたきっかけ、そして今一步間違えれば離れ離れになつてしまいかねない最悪の因縁。

一つでも間違えて逮捕されてしまえば容疑を解くのは難しい。すでに四人が死んでいるこの事件で課されるだろう刑罰は無期懲役か死刑か……どちらにしても蜜と会えなくなる。

その考えに寒気がして思わず身体を擦つた。それだけは絶対に避

けなければならぬ。

記事をそのまま床に落として、次はホワイトボードへと視線を移した。描かれたハート事件の相関図は蛸足配線染みてきて、かなり縁遠い人物までに捜査の手を伸ばしている。財産の相続権を調べるように犯人になり得る可能性を探って掘げられた図を見て、苦労の分だけ線を増やした見栄えだけはいい図表だと評価を下した。

そこに描かれたほとんどがハート事件被害者六人の繋がりなのだけれど、私自身……考えたくもないけれど、例えば蜜が殺されたりしたら、直接拷問にかけてやりたいという醜悪な激情のままに、関わりのある連中を血縁含め惨殺するだろうだけに、被害者側という説は納得し難い。それに私に冤罪をかけようとしている風に見えるこの二番煎じ事件は、やはり広一君側、犯人遺族側の立場からの復讐であるという説が最もしっくりくる。それなら遺族側の主な復讐対象になるはずの蜜が、今のところ狙われていない理由も犯人の狙いは私だと納得できる。

ところが目の前のボードから分かる事といえば広一君には遺族がほほいらないという事実だけだ。やってられない。

道元さんに死なれたのは本当に痛かった。生きていれば、彼女には悪いけれど、警察の捜査攪乱と時間稼ぎぐらいはできただろうに。大切なカードを失って容疑だけが深まっていく。ババ抜きで揃ったカードを出す前に引き抜かれ、さらにはジョーカーを引かされた気分だった。

さりとて沈んではばかりではいらぬ。こちらの状況などお構いなしに進んでいくのがこの無情な世界なのである。肩をほぐし首を回して、今日すべき作業を頭から引っぱり出そうとして、

「うわっ、随分荒れてるわね」

そんな聞き覚えのある、できれば聞きたくなかった声に思考を中断させられた。眉間に皺が寄るのを感じながら事務所の入り口に振り向き、思った通りの姿を確認して表情筋を引き攣らせた。受け入れたくない現実から逃避すべく、目を擦り眉間を摘んでから、もう

一度開く。

幻である事を願っても、そこには二人の？見た目？美少女が存在していた。

赤青緑黄と風車のような四色の羽根飾りの付いたヘアバンドで、ポニーテールにしている女子中学生の姿をしたソレ。そして、彼女の趣味に合わせてなのかメイド服を身に纏った女装子。

こんな時に 否、こんな状況だと分かっていて来たのだろう。

「……何の用よ幽霊」

全く、よりもよってケータイの電話帳、その『人外』と『論外』にカテゴリされる二人組のご登場とは！

幽霊、朝間綾香^{あさま あやか}。別名は幽体離脱^{エクトプラズム}。カテゴリ『人外』の筆頭。幽霊と言ってももちろん死んでいるわけではなく、『存在感がない』などという特徴をあげつらった比喩でもない。その言葉から連想される事柄なら大抵やってのける（、、、、、、）（彼女の異質を認識させるのに、『幽霊』ほど相応しい渾名はないからこそ、そう呼ばれている紛う事なき人外だ。

正直、ここ『白桃シロップ』のスポンサーでなければ関わりたくないというのが私の本心で、そんな連中と従妹が同類であるというのだから、可奈さんが他の警察官と一線を画している理由が分ろうというものだ。

それから『論外』の方、月見里遥^{やまなし はるか}。確か幽霊の2コ下だったか、見た目は普通の女装子で、いつも見えないものを見ている、らしい。これ以上の事は論じるのも憚られる。故の『論外』。

どちらにしる人間が人間らしく一生を終える内に遭遇する代物ではないし、一応は人材紹介を主な業務としている私ですらよほどの事がない限り紹介しない連中だ。

そんな連中がこのタイミングで姿を現した。

厄介事の臭いしかない。できればさっさと引き返してほしい。

私のそういった心情をよく理解しておきながら、満面な笑みを私の渋面に返してくるのだから性質が悪い。

睨み合う私と幽霊。けれど、

「あれ？ 越嫁さんは？」

二人の険悪なムードなどお構いなしな遙ちゃんの台詞に毒気を抜かれて、私は仕方なく幽霊に固定していた視線を外した。

分かってる。ここを立ち上げるにあたって援助を乞うた相手に対する態度ではないし、今のところは見た目通り精神年齢中学生の彼女に対して大人げない態度だとも。

しかしながら、幾ら私がそろそろ法的にも大人に分類される年齢にあるからと言って嫌なモノは嫌なのだ。

お茶を出そうと考えてテーブルの資料を床に移しながら、さっきの遙ちゃんの質問に答える。

「あの女装青年なら東日本で入院中よ。今年で三回目」
すると彼は納得したように手を打った。

「あー、あの人マゾだもんね」

「え？ そうなの？」

「え？ だからここで働いてるんじゃないの？」

「……」

なるほど？ それはどういう意味かな、御奉仕(、)、(女装子ちゃん？

その論法、自分にも適応される事分かっているのだろうか？

「うー、女装で聞きたい事あったんだけどなあ」

さすが幽霊とペアを組んでいるだけあって遙ちゃんも結構な癖者だよ。類は友を呼ぶというのは真理を突いていると思う。

女装は幽霊にさせられていたんじゃないか？ 目覚めたとか？

「あー！ パンダちゃんが消えてるー？」などと叫び出した彼に二次元から三次元へと進化して蘇った床の人食いパンダを指差してやると、彼は嬉しそうにそれを掲げてくるくと踊り始めた。

「それで、本当に何の用なの？ 知っての通り忙しいんだけど？」

「ああ、言っただけだった？ デートに誘いに来たのよ」

「ほう？」

既に四人も周りで殺されて、推理も捜査も行き詰って、ハート事件の疑いを蒸し返されて、極刑もあり得る容疑で逮捕されかねないこの状況を分かっているながら言っているのかなこの娘は？

「そう、分かった。さっさと地獄へ還れ地縛霊」

「あなた……人を傷つけないよう本当気を付けた方がいいわよ？ただでさえ言葉がキツイんだから」

「うるさいわね、私があんたの事毛嫌いしてるの知ってるでしょ？」

「ねえ、今の忠告聞いてた？ 言っておくけど、私人並にガラスのハートよ？」

「ああ、幽霊だけに心も透けてるのね」

その台詞に幽霊は遙ちゃんに抱きついてわざとらしくいじけてみせた。その頭を遙ちゃんが撫でる。実に白々しい光景だった。

「だいたい私は蜜一筋なんだから、そんなの断られるのは分かっているでしょうよ」

「いや、私とあなたとでじゃなくてダブルデートよ。シロップちゃんの提案なんだけどね」

「え？」

「最近、あなた彼女に構えてないでしょう？ 事件でかかりつきりで相手してくれないし、気を張りっぱなしだし鬱ふさぎ込んでるしで、『どうしたらいい？』って相談されたのよ」

相談？ 自分から行動を起こす事を極端に怖がる蜜が？ ……私のために？

確かに蜜と幽霊は腹が立つことに仲がいいけれど、それでも精神疾患上、なかなかできる事じゃないのに……。

その事実には言い知れぬ喜びが湧き上ってくる。あ、駄目、嬉しさの余り身体が震えてきた。

「だからデートに誘ったらって言ったの。どうせだから私達もって。それならこっちでチケット用意してあげられるし」

言ってポケットから出したそのチケットとやらをヒラヒラと見せ

びらかしてくる。よくは見えないが色調からして『御伽の国』のパスなのだろう。

本来、今自分の状況下を鑑みればそんな娯楽に現を抜かしている場合ではないのだけれど、それが蜜の気配りであるとなれば私には無碍にできない。

選択肢なんて始めから用意されていないじゃないか。

それが分かっただけでニヤニヤ笑って私がどう出るかを待っている幽霊の性格の悪さを改めて感じるも、癪ながらこの女がシロップちゃんと呼ぶ友人の願いを聞き入れて訪問してきた事もまた事実なのだ。

仕方ない。今回ばかりはその提案に乗る事にしよう。

ただ、

「で、シロップちゃんは？」

そんな彼女の質問に、後ろ、生活部屋にあるベッドの方へ振り返りながら思う。

……自分が提案したくせに寝過ごすのってどうよ？

浅越市の隣にある浜川市を挟んで、反対の県境の戸伽市にある『御伽の国』は、それなりに交通の便がいい立地に、それなりに人気のあるアトラクションを詰め込んだ後、版權に気を使わなくてもいい御伽噺をモチーフにした安上がりなテーマパークである。

戸？伽？市だから御？伽？の国というのに加え、オオ女将さん・赤頭つ巾ちゃん・花から爺さん・鬼いちゃんなるマスコットキャラクターが園内を徘徊するという何とも安直な発想で成り立っているのにも関わらず、経営自体はしっかりしているのかここ数年黒字続きらしい。

安く済むところはとことん切り詰めた代わりに、余った財力はアトラクションに注ぎ込んだようで、ジェットコースターが三つにス

ーパートマホーク、ジャイアントドロップ、ウォーターフォールと六つも絶叫マシーンが存在し、他にも観覧車や仮装施設にスパなど施設だけはやたら充実した遊園地になっている事もあって、世間的に夏休みに入っている八月上旬の今日も人の入りは上々。正直人混みの嫌いな私としては勘弁してほしい密度だった。

が、今はそんな人混みすらが懐かしく、勘弁してほしいのは人がゴミに見える俯瞰に今自分が向かっているという事実だ。

嗚呼、夏の日差しが近づいてくる……。

しっかりと閉じているにも関わらず、目蓋を透かして見える赤い太陽に願う。

……このコースターを止めてください。

視覚情報を必死に遮断しても背中越しに感じる振動とセーフティバーの感触、さらには慣れない体勢でお腹にかかる重力。

そして、

「ねえねえねえ……！ ガタンゴトンって揺れてるよね！ もうすぐだよ？ もうすぐ落ちちゃうよ？ ねえ、ほら、上り斜面もあとちよつと、あとちよつとで……うふっふふふふっ！」

そして隣からご丁寧にも実況してくれる我が恋人。今だけは彼奴きやつも敵だ！

『当園自慢のジェットコースターおむすびころりん、おむすびになった気持ちでGO！』なんてキャッチコピーが書かれていたけれど、外観からしてそんな軽い代物とは思えない。

「えへへ……ほらあ、感じない？ 傾斜が少しずつ緩やかになってるでしょ？ 頂上だよ？ 着いちゃったよ？ もう少しで落ちちゃうよ？」

何でこんな時にだけ饒舌になるんだろうね、君は。セーフティバーを掴んでいるために耳を塞げないこの状況を恨めしい。

「あはっほらほらほらあ！」

「……いつ」

開けてしまった目に飛び込んできた、今まさに落下せんとする視

界に思わず声が漏れた。

「い？」

「いつぎゃあああああああああああああああああ？ あー

！ あー！ あー！」

お教えしよう、名探偵白桃ちゃんは怖いのが苦手なのである。

上昇からの自由落下フリーフォールに続いて急カーブ二回、遠心力にふらふらになった頃にループを一度挟んでまたほぼ三六〇度のカーブ、落下した後に再び上昇してカーブしながらの急降下、そして最後のダブルループ。聞けば高さ九十五メートル、落差九十一メートルで最高速度が時速百九十キロらしい。そんなふざけたアトラクションを『ころりん』で済ます設計者の神経を疑う。

気持ち悪くなって急遽入った、喫茶スペースの屋外テーブルで私は机上に突っ伏していた。

気晴らしどころか捜査以上のストレスになって禿げそうだ。

「大丈夫？」

ちよんちよんと蜜が肩を突いてくるけれど、私のこの症状は彼女が乗る度に目を瞑って恐怖に耐える私の横で悪魔のように囁いてくれたせいだ。

もちろん口が裂けてもそんな事は言えないとことん甘い私は大丈夫と返して、飲み物を買って戻ってきた幽霊からコーラを奪い取る。冷えた喉越しと炭酸の刺激で幾分すつきりとした。

「復活！」

「よし、じゃあ今度は『一寸法師』に乗ろっ！」

一寸法師「ウォーターフォール。最後の自由落下フリーフォールが定番のアトラクション。

……なるほど。さっきの「大丈夫？」はまだ絶叫マシンに乗れるかどうかの『大丈夫？』だったわけですか、蜜ちゃん。あれ？
目から生理食塩水が。

「あのさ？ 幽霊と遙ちゃんも居るわけだからさ、ここは皆の意見を聞いて」

「あら、いいわよ私は」

ちっ、いつもは協調性の欠片もないくせに！

幽霊を恨めしく睨みつけながら、最後の頼みの綱である遙ちゃんに助けを求める。

「遙ちゃんは？ そろそろ疲れてきたんじゃない？」

お願いだからイエスと言ってくれ。そんな私の願いが届いたのか、彼はにっこり微笑んだ。

「僕は先輩がいつて言うならそれでいいです」

「さいですか」

実に素晴らしい回答をありがとう。その忠誠心やら奉仕心やらに一人の少女が犠牲になつた事を忘れるなよ？

「ねえ、駄目？」

眉尻の下がった蜜の不安そうな顔。そんな顔で袖の端を掴まれてしまえば私に逃げ場はない。

まさに詰み（チエックメイト）。だからせめてもと訊いてみる。

「なんで蜜はそんなに絶叫マシンに乗りたがるの？」

すると彼女は、誰もが見惚れるような満開の笑顔で言ってくれた。

「桃ちゃんが泣いてる顔が好きだから！」

わあ、私はそんなあなたの笑顔が大好きだから困るー。

絶叫マシンに乗って涙目になった私を見て蜜は笑顔に、その笑顔を見て私が癒される。マイナス、プラス、プラス、プラス……一見正の連鎖に見えて、私に限って言えばプライマイゼロで得をするのは蜜だけという奇妙な現象がここに存在しているらしい。

「じゃ、いこっか？ 一寸法師！」

もう、勘弁して。

と、言ったところで勘弁してもらえないはずもなく、一寸法師に乗った後他のコースターもコンプリートした上で、次はジャイアントドロップに乗らされた。

ただ上がって落ちるといっただけの単純明快なこのアトラクションは、最も手軽な絶叫マシーンではなかるうか。

自由落下とは言っても斜め下に落ちるコースターと違ってジャイアントドロップは垂直落下だ。正直、コースター以上に怖い。

それに加えてこのマシーン、名前を『蜘蛛の糸』というらしい。御釈迦様が垂らした蜘蛛の糸に縋りついた悪党が、自分だけ助かるうとして結局地獄に落とされるという例のアレをモチーフにしているのだろっけれど、それってつまり落ちる私達が業が深いって意味だよな？

蜜の笑顔を見るために地獄を見る私。まあ確かに業は深いけどもさ。

ともかく、さらにその後再びおむすびころりんに乗らされたところで『蜜のためなら』がモットーの私も流石に根を上げた。

「もう駄目、無理、死ぬ……」

四度目の喫茶店、今度はLサイズのミックスオレを飲み干して私は呻く。悲鳴の上げ過ぎと涙線の緩み過ぎで、筋肉その他が引き攣って表情がうまく作れている自信がない。

「ねえ、大丈夫？ 桃ちゃん」

蜜の問いかけにまた大丈夫と返してしまいそうになるも辛うじて口を噤んだ。

危ねえ、さっきの二の舞になるところだった！

「大丈夫じゃない、お願いだから絶叫系はやめて」

むー、と尖らせた蜜の口に紙コップに残っていた氷を放り込む。

アイスクリーム頭痛になったのか「きゃふっ」と悶え始めた。

「とにかく、もうちょっと大人しいアトラクションにしよう？ ね？」

涙目で頭を押さえながら不服そうにしつつも「分かった」と彼女は言った。

「じゃあ観覧車に乗ろっ！ ここの花咲観覧車って直径八十八メートルなんだって！」

「うん、そうね……」

名探偵白桃ちゃんの弱点その二、高い所。

蜜ちゃんよ、あんた全然分かつちゃいねえ。

午後五時少し過ぎ。夏の長い昼の支配下にあるためにまだ十分明るいけれど、五時間ほどはしゃぎ続けた疲労がやってたらしく、蜜は観覧車のゴンドラが頂上に至る前に眠ってしまった。

私の膝枕ですうすうと寝息を立てる彼女の横顔は五年前とあまり変わらない。思えば彼女は学校に居る間のほとんどを寝て過ごしていた。あの頃に比べれば遊び疲れて居眠るなんて実に健全だろう。過去の健全でない理由までもが浮かび上がってきて一瞬顔をしかめるも、彼女の頭を撫でる事で気を紛らわせる。それから窓ガラスの外に見えるそれなりに映えた俯瞰風景に目を移した。高所恐怖症の私にはあまり楽しめるものではないけれど、蜜にゴンドラを揺らされる危険性がなくなった分余裕がある。

この後スパにも行くのか、あるいは他に予定があるのか。幽霊がホテルも用意してくれたようなので、帰りの心配はしていない。

しかしあの連中本当に何しについて来たのだろうか？

蜜の我が侘と一緒にあって付き合ってくれるのは有り難いが、まさか私の泣き面を眺めてけらけらと笑うためだけに来たわけではないはずだ。ない……と思いたい。

まあ、基本傍観者であるあの二人だ。私の所が面白そうだからというだけの可能性が一番高い。

でもそれならば、幽霊という名前の由来通りの方法を使えば直接会いに来なくてもいいのも事実で、わざわざ観察に来た理由としては少々薄い。

では何が狙いなのか？

その答えを知る事になったのは花咲観覧車を降りた後、「狭いゴンドラで数分限りの密室なんて燃えるシチュよね」などと意味あり

げに言つて、降りた時には衣服を意味ありげに乱していた幽霊の一言を聞いた時だった。

「さあ、コスプレしに行きましょう!」

狙いはそれか。警戒した私が馬鹿だった、呆れて物も言えない。

「それに服も乱れちゃったし」

それがもし本当にコスプレ施設に行く口実になると思っているのなら、病院に行った方がいいと思う。

「行くのはいいけどさ……、恥ずかしくないの?」

この時間帯家族客は大分減ったとはいえ、仮装施設は幼年齢層向けの施設だ。大学生の私は当然の事ながら中学生の彼女達だってギリリアウトだろう。そう思って訊ねたのだが、

「うん?何が?」

まるで意図の分かっていない答えが返ってきた。ま、いいか。

「ん、じゃあ行こうか」

私としても絶叫系と高所以外ならもう何でもいい気分だし、それにいつも同じ服しか着てくれない蜜を着せ替え人形にできる絶好の機会だ。

まだうとうととしている蜜を背負ってパンフレットを持った幽霊について行くと、大きなカボチャを模したらしいドームが見えてきた。

パンフを見なくても分かる。きっとこの仮装施設の名前は『シンデレラ』なんだろう。思えば遊園地は子供を楽しませるためにあるのだから、そういう分かりやすいネーミングというのがいいのかもしれない。

魔女が魔法をかけてくれるかは別として、このシンデレラドームは建設費で魔法のようにお金が消えていっただろうと用意に推測できるほど大きかった。こういった施設は申し訳程度に存在しているものだと思っていた私としては意外で、なるほど幽霊が来たがつていたわけが分かる。『御伽噺に拘らず普段着ないものなら何でも』という、大雑把な考えの元に集められたとしか思えない大量の衣装

を収めるために、衣装掛けがドーナツのようにループしているように、回りながら自由に選べるシステムになっているらしい。記念写真を撮るスペースもあるみたいだけれど、どうも着て楽しむのを主な目的にしている造りに私には思えた。

建物に入って少し、面白い物がないか物色していると、独特な衣装が目にとまった。日本民族な趣から日本の昔話とまでは分かるのだが、いったい誰の衣装なのかまでは分からない。クイズのようにはばらく考えてみたものの、結局思いつかずギブアップ。裏向きになっているタグをひっくり返すと、『瓜子姫』と表記されていた。

「いやいや瓜子姫の衣装って……」

『うりこひめとあまのじゃく』。知らない人が多い気がするけれどあの御伽噺、天邪鬼が殺した瓜子姫の生皮を被って、爺婆を騙した拳句殺されるって話じゃなかったっけ？ 蜘蛛の糸といいこれといい、ちよくちよくとお客を皮肉るチヨイスが見え隠れしている気がしてならない。だいたい知名度の低いこんな衣装を何で置いているんだか。

瓜子姫の服を元の位置に戻して別のハンガーを取ったら、今度は天邪鬼の衣装だった。だから誰が着るんだこんなもの。

「ねえ、ナース服と修道服どっちがいいと思う？」

異様にテンションの高い幽霊が訊いてくるが、そもそもその二択にしたって病人に仕えるか神に仕えるかの違いしかない。欲望に忠実なやつだ。

「修道服」

そう適当に答えて私は『不思議の国のアリス』の青いワンピースを蜜に見せた。

「どつ？」

「ヤ！ 帽子がない！」

こっちはこっちで困った拘りだ。いいじゃん、似合うと思つのにな。

「それじゃあこれ」

次に見せた赤頭巾の衣装を彼女に渡して着衣ボックスを指す。これなら難癖はつけられまい。

「何なら私が着替えさせてあげるけど？」

絶叫マシーンのお返しとばかりに笑顔で言っただけだと彼女はそそくさとボックスへと消えていった。それはそれで何か寂しくなくもない。

少しして赤いカーテンから蜜の顔がひょこりと現れた。どうやら慣れない服装に気恥ずかしさを覚えていらいらしているらしい。

羞恥心なんてモノ、この建物に入った時点で捨ててるようなものなのに。

出るように促して一分、ごねにごねて、ようやく彼女はボックスから出てきた。

「おお……」

そこに居るのはまさしく天使だった。

胸に押し出されている胸元の赤いリボン、白いレースの入った短目のスカートから覗く御御足おみあし、恥ずかしそうに頭巾に手をやって深く被ろうとする仕草。

超、可愛い。

思わず抱きついた。

私の奇行に他の客がびっくりしているけれど、そんなの知った事か。

今はこの可愛い生き物を愛でる事に集中したい。

「あー、もうぐりぐりしすぎい」

「いいじゃん、昼のお返しよ」

絶叫系で蜜が私の精神力を犠牲に貯金したプラス分を、今こそ私の幸福に変換しなければ割に合わない。

全く、蜜はこういう可愛い系の服が似合っただから普段着てくれればいいのにさ。

一通り愛でまくったところで、蜜は私の腕から逃れてカーテンの向こうへと逃げ込んだ。

いつもの黒服に着替えるつもりなのだろうけど甘い甘い。この建物はまるで図書館のように衣装を詰め込んでいるのだ。蜜に似合う服もまだまだ沢山あるに違いない。そんな状況で私が逃がすとしても？

「巫女にメイドに黒セーラー、さあて次はどれにする？」

そもそも女同士なのだからそんな薄っぺらいカーテンが防壁の役割を果たすわけがないじゃないか。遠慮なくボックスに侵入してワンピースを掴もうとする蜜の手を止める私。今度は私が愉しむ番だ。赤頭巾の衣装と彩り同じ紅白でも和風の巫女服はまた違った趣き。やっぱり黒シヨートの蜜には和風の方が似合うかな？ これはこれで背德的、脱がしやすい胸の部分が特に。

もはや身近な言葉になっっているメイド服は幽霊じゃないけれど、奉仕されるという立場はいつもと違って刺激的かもしれない。普段は私が奉仕してる分、このシチュはなかなか……。

制服に関しては、高校時代では無理だった校則無視の着崩しが新鮮だった。ギリギリまで丈を上げさせたブリーツスカート、第四ボタンまで開けてはだけさせたシャツ、そのまま押し倒したら……：ねえ？

その他にもあれやこれやと片っ端から着せていってしばらく、蜜は床に座り込んだ。

もはや帽子の有無に文句を言う元気すらも失くしたらしい蜜は尻に涙を溜めて、

「もうお嫁に行けない……」

などとお決まりの台詞を言ってくれるが、私達は女同士、

「なら婿においで」

その辺は自由が利くのだ。私は嫁でも婿でもどっちでもいいもの。知ってた？ 両方女編なのよ？

「ふう……：やっぱりハルカは少し緩いぐらいのサイズの方が似合うわね」

「身体が小さいから……：それにやっぱり肉つきの問題もありますしね。露出の高い服は……：いっそ胸造ってみます？」

「いやいやそれはなくていいの。髪伸ばしてみようか？ コスプレの幅が広がるし」

傍では幽霊と遙ちゃんが何やら相談している。

ある程度満たされた私からやっとな解放された蜜は、さっさといつもの黒ワンピースに戻ってドームを散策し始めた。とたとたとたと独特なステップで、ふらふらと衣装を取っては戻しを繰り返して、どんどん奥へと回り込んでいく。追うべきか迷ったけれど、もう閉園も近いし人もほとんどいないし、まあ大丈夫だろうと止めておいた。幽霊からここの衣装は貸し出しありだという看過できない事実を知らされ、さっそく蜜に着せる衣装を選んでいると、蜜の声が聞こえた。

「ねえねえ！ こんなあったー！」

その声に振り向いてみると、そこにはオオ女将さんが居た。もちろん着ぐるみだ。

エプロンを着て付属品の切れない包丁を持ったデフォルメされた二足歩行の狼。似合うも似合わないもない。

「蜜……」

何でそれは自主的に被るかなあ？

蜜には大きくて手足がブカブカしているし、頭もグラついて少し怖い。

「他にもいっぱいあったよ、着ぐるみ」

そう言っただけで彼女の指す方へ行ってみると、着ぐるみコーナーとやらが見えてきた。顔の出ないこれらの衣服が、仮装として楽しいのかは分からないけれど、確かに誰でも一度ぐらいは着てみたいと思うものだろう。しかし、『中の人は居ません』という子供の夢を守る例の文句を完全に無視してる気がしてならない。ペチャンコになってハンガーで吊るされた胴体部分とは別に、頭部達は柵に並んでいて、まるで落ち武者のさらし首のようだった。子供が見たら泣くんじゃないだろうか？

経営者の細かい所に行き届かない発想に再三疑問を抱きながらも

一つ、私も赤頭つ巾ちゃんの頭を手取る。

頭部だけ被つて戻ると、幽霊に出来の悪いホラーみたいだと言われた。だったらあんたも被れよと、無理やり生首赤頭つ巾ちゃんを被せてやる。

明らかに返り血つぽい何かで赤くなつた頭巾、ぱつちりして瞬きしない目と動かない表情、光加減でできる陰影。なるほど、ホラーだ。

そんな馬鹿な事をやり合つての閉園間際、催した私はトイレに行くと言つて三人と別れた。考えてみれば御伽の国に入ってから飲み物ばかりに飲んでいた気がする。それもこれも蜜のせいなのに、彼女ときたら、

「あんなに飲むからだよね？」

と度々トイレに立っていた私にしれつと言つてくれた。絶叫マシンにはもうしばらく乗りたくない。

ま、蜜の笑顔見たさにまた乗る事になるんだろうけどな！

……それはさておき、大抵込んでいる遊園地のお手洗いも、この時間帯には幸い人気はなかつた。口に挟んでおいたハンカチで手を丹念に拭いた後、ついでにケータイをチェックする。二十件を超えている着信の内、気にしていたメールを開くと、その内容に思わず笑ってしまった。

トイレは最奥より右に設置されているから出て左回りの方が距離は短い。当然左を選択したトイレ帰りの道中、まだ見ていなかった衣装を眺めていると無限に本を蔵書している空想の図書館に迷い込んだ気分になる。円状の衣装掛けには終わりがなく、膨大過ぎる衣装は把握しきれない。じゃあ質の方はというと、蜜に着せてみて一着一着の作りの良さに関心した。魅せる事を第一に考えられているこの手の衣装は、飾りが取れやすいものとはばかり思っていたけれど、繰り返しの使用に耐えられるだけの耐久性を持たせているようだ。

貸し出しの事も考慮に入れてもこの施設にやたらと力を入れていく気がしてならない。経営者……いや、オーナーの趣味とか？

けれど、不思議の国のアリスに出てくるトランプ兵隊の平べったい衣装がちゃんと四十四セットあるのには呆れた。よくまあ、ここまで集めたものだ。あ、団体客向けなのか。

『ラプンツェル』はいいとして『手なしむすめ』や『ホレおばさん』なんて今の子供が知っているととは思えない。私だって第一の被害者になってしまった裕子ちゃんに教えてもらってなければ一生知らずにいただろう。

御伽噺、メルヘン……ここはそんな忘れ去られようとしている物語の墓場なのかもしれない。名探偵の名前もあるいは墓標に刻まれているのではないかという想像がふと浮かぶ。

奇抜なトリックに突拍子もない真実。現実ではおおよそあり得ない多くの演出に守られてこそ存在できる名探偵は、物語でしか生きられないのだろうか？

鹿撃ち帽にインバネス・コートというシャーロック・ホームズの衣装が掛けられているのを見つけて思わず立ち止まってしまった。もっとも、火の粉除けに名探偵を自称している私なんか浸る感傷ではないけれど。

自嘲して止まった足を再び出口の方へと向け、再び踏み出そうとして できなかつた。

視線の先、僅かに弧を描く壁に、オオ女将さんが横たわっているのを見つけてしまったのだ。

一瞬、蜜が直さずに行つたのかと思つたけれど、自分(、)の整頓に関してはしっかりしている彼女にそれはないとすぐに思い直した。

……では、他の誰か？

サイズ別に同じ服が用意されているここには当然オオ女将さんの衣装も複数ある。他の客が帰り際に着たものの、閉園時間が差し迫っている事に気付いて慌てて脱いでそのままに、なんて……なんてね。

「なんて、あるわけないか……」

そんな無理のある想像を自分で否定する。こういう場面（、、、、
、、）に遭遇してしまうと独り言を呟いてしまうのは、やっぱり慣
れても怖いものは怖いし、心細いものは心細いからなんだろうか。
そう、冷静に考えてみればすぐ分かる。置き忘れなんてあり得な
いのだ。ハンガーに掛かっていた時のペタンコな状態とは違って、
胴体は膨らんでいるのだから。

何よりも、着ぐるみの太く茶色い両手が包み込む剥き出しの心臓
が、誤魔化しきれない事実を語っている。

これで、五人目。

おもちゃの包丁は床に落ち、本物の凶器は見当たらない。臨終を
迎えても笑い続ける狼の顔は俯き気味で、力なく壁に背中を半分預
けた、肌の一つも露出していない胴体はその両手に内蔵を抱えてい
る。

大して考えもなくそれに近づいた私は、この落ち着かない感情は、
死体の本体を確認していかないからだと言い聞かせ、着ぐるみの頭を
取った。

けれど、そこにあるのはずの顔はなく、目に入ってきたのは首の
切断面。

思考がその現象の意味を理解する前に、取った頭部の中からごろ
りと髪の毛の長い生首が転がり落ちた。

夕焼け空。

紅から始まり藍で終わるグラデーションが上から下へと広がって
いる。

御伽の国の玄関口、閉園したこの時刻に明かりは乏しく、空より
も地上の方が暗い。暗闇の光源代わりになっている捜査車両のパト
カーランプは、むしろ私の気分を暗くしてくれる。

八月十二日午後五時五十二分、第五の被害者を発見。後一人で八
ート事件と被害者数が並ぶ。

「これはもう……世間に隠しきれないな。」

三から四、四から五という数字は多いか少ないかの境界線だ。大量殺人ならともかく、日を跨ぐ連続殺人で五人と言う数字はかなり多い。それも死体が見つかったているケースとなれば尚更だ。

今はまだマスコミテロの話があるにしても、そろそろそつちもマンネリ化してマスコミは目新しいネタを探す頃合いだ。見向きもしなかった癖に、警察が真実を伏せていたんだとでも騒ぎたてるんだろう。あの時と、ハート事件の時と同じように。

溜息を吐く。この動作を一体何回した事か。

そんな私に、近づいてくる人物がいた。

灰色のスーツをきつちりと着た中年の男。染めはしているのだからけれど、その努力虚しく白髪がちらほら見受けられるワックスで固めた髪、弛んだ皮膚が額に作った皺、そして無理やり押し込めただるう腹の贅肉。

人物描写が辛口なのは、そのまま私が彼にいい感情を持っていないからだと理解してくればいい。

「こんばんは、お嬢さん」

かけられた声には答えずに彼の方へと向く。人の良さそうな顔をしているが騙されてはいけない。表情など筋肉の作り出す幻想だ。

「私は警察庁刑事局捜査第一課管理官・警視正の猪俣昌です」

そこで彼は笑みを深くした。

「まあ、階級は難しいから分からないかもしれないけれど」

「警視正。警視長の下で警視の上。警察階級の第四位。キャリアは三十代で昇進。それぐらい知ってます」

名探偵を自称してる人間に随分と舐めた真似をしてくれる。

苛立ちを笑顔に乗せて言っちゃったら、場が凍りついた。

猪俣警視正の外見を見れば、彼が三十代ではない事は誰にだつてすぐ分かる。四十代から五十代。キャリアなのに警視正。暗に出世遅れと言われて彼は笑顔が少し引き曇ったし、周りの中央刑事は怖いものを見るような目で私を見つめ、地方刑事は触らぬ神に祟りな

しとばかりに場を離れていった。

全く、敵（、）について名探偵を自称する私が調べてないわけがないじゃないか。

「ちなみにキヤリアが四十代で警視長に昇任するのも知ってますし、冴えないあんたがついに家族に愛想を尽かされてる事も知ってます。ついでにそれを見返そうと捜査を焦っているという噂も耳に入ってきてますが、誰の陰口かお教えしましょうか？」

トドメの微笑み、そして更に凍てつく場。

そんな中で唯一、可奈さんだけが覆面パトカーのボンネットをバンバン叩いて大笑いしていた。彼女に怖いものはないらしい。警察内で浮いているんだらうと想像してはいたけれど、こうして目の当たりにすると凄まじいものがあつた。

彼女自身はともかく、彼女の下で働く限り悠志君に出世の道はないんだらうな。

「……………単刀直入に言います、白藤さん、それと桜川さん、署までご同行願います」

「お断りします」

私の即答に警視正はわざとらしく溜息を吐いた。それから子供を諭すように言う。

「いいですか？ 貴女方は今大変微妙な立場に置かれています。ここで同行を拒否するという事は後ろめたい事があると云っているようなものなんですよ？」

「『ご同行お願いします』、つまりは任意同行なんでしょう？ 拒む権利がある事は法律で規定されています。当然の権利を主張した相手に疑われると？」

「……………疑われる危険性がある事をご忠告しただけです」

「そうですね、じゃあ先にお願いしておきます。任意同行は拒否させてもらいますが、これは刑事訴訟法にもある通り、当然の権利です。言うまでもなく警察は法を重んじてくださるとは存じますが？ ついさつき失言も出ましたので？ 一応念を入れて言わせてもら

いますか　それを逆恨んで疑うなんて事、しないよな？」

「善処、します」

善処じゃなくて厳守しろよ。

私の舌打ちが聞こえたらしく、彼は手を強く握りしめた。丁寧な口調を崩さないが、見下していた女子大生に高慢な態度を取られて腸は煮えくり返っているのだろう。顎の筋肉が強張って、押し殺した息が鼻から出された。

「ですが、白藤さん。実際、貴女方が有力な被疑者である事は事実なんです。事件解決のためにも捜査に協力していただきたい」

全くそうは思っていないくせに、よく言う。協力なんて選択肢はそもそも向こうから破棄したモノだろうに。

「無茶な事を言いますね。私達は、今回の事件はハート事件の因縁だと主張しています。それを一つの意見としても聞き入れていないのは警察でしょう？　相容れないのは分かりきっているはずですが？」

「確かに、そうですね。失礼しました。では、改めて言いますが、警察は桜川さんを主犯、あなたを従犯だと見ています」

さっきのお返しのもりなのか、後半、無駄に厳かだった。

しかしそんな事、私はすでに知ってる。知っているから敵愾心を剥き出しにしているのだ。

馬鹿らしいと吐き捨てたい気持ちを抑えている私の気も知らないで、彼は続ける。

「今回の事件は前の四件と違って蜜さんに服を着替える余裕はなかったはず。けれど彼女の衣服に返り血はない。その事から私は現場で唯一血の付着していた、被害者に着せたあの着ぐるみ着て犯行を行ったのだと考えています」

「それで？」

「着ぐるみに付着した毛髪などの遺留品はそう簡単には除去できない。調べればすぐ分かるんですよ」

……まさかと思うが、それで自白した方がいいですよとでも言う

つもりなのだろうか？

確かにあの才女将さんの着ぐるみには蜜の毛髪やら何やらが付いている可能性は高いだろう。けれどそれは別に犯行を行ったのが彼女である事を示す証拠にはならない。それを言おうと口を開いたところで、「それ、証拠にならないわよ」という幽霊の声がかかった。どうやら一応は蜜の友達らしい事をしてくれるつもりのようなのだ。彼女、その着ぐるみ着てたもの」

「貴女は……彼女の同伴者ですね？」

「ええ。それにシロップちゃんはずっと私達と一緒にだったけど？」

「なるほど、確かにそれが本当ならアリバイにはなるんでしょうが……貴女は彼女達の友人でしょうか？」

「かばって嘘を吐いていると？」

「可能性はあります」

「可能性ねえ、それを言うのなら私の証言が事実であるという可能性も、またあるという事でしょう？ 例え私が嘘を吐いているにしても、その証言の虚偽を証明できない限りシロップちゃんを犯人とは断定できないわよね」

その通りだ。よって、着ぐるみに付着しているであろう蜜のDNAは証拠能力を持たないし、そもそも着ぐるみを犯行に使ったというのは彼の想像でしかないのだから、証拠採用そのものすら無理だろう。

「ですが、証言を裏付ける証拠も存在しないのも事実ですよ。今までの状況証拠も合わせて、令状を取るには十分の容疑です」

出世遅れ警視正は食い下がりますが、それに関して私は切り札を持っている。

「それはおかしいですね猪俣さん。私や幽……朝間さんの言い分が本当にしる嘘にしる、警察はそれを証明できたはずですが？」

「何の事です」

「だって私達を監視してたでしょう？ ここ数日間ずっと」

「なっ！」

「ですから、こつちもあなた達の動向を監視してたんですけどね？」
私の台詞にさらに動揺する彼。そりゃあ、監視を監視されている
とは思うまい。

「それで、ついさっき面白いメールが届いたんですよ」

言って私はケータイのメールを開いて彼に見せた。そこに書かれて
いるのは、監視役を務めていた警察官がコスプレドームには入ら
ずに、外で待機していた旨を記す文章だ。

「流石に目立つからですかね？ ああ、まさか恥しかったとか？」

そこでケラケラと笑ってみせてから一転、声を低くして言った。

「ストーリー紛いの事をやられた上、肝心の犯行を見逃したくせに、
証言が疑わしいから令状を取る？ 随分都合のいい考えですね？」

奥歯を噛み締める鈍い音。けれど、反論は返ってこない。

寄ってきた蜜が半目で私の服を引つ張って欠伸をした。

「蜜が眠たいみたいですし、そろそろホテルの方に行ってもいいで
すよね？」

戸伽市は温泉街で有名な観光地であり、旅館の強みは当然天然掛
け流しのお風呂となる。ホテルという体裁を取っている我らが今晚
の宿もそれに漏れず、自慢の露天風呂とやはらかな立派なもの
だった。

夏という季節に温泉に浸かろうという人物はそういないとみえて、
露天風呂に人は少なく、手抜きりなく竹の水鉄砲を持ってきていた
蜜は温泉水を飛ばしてきゃっきゃと楽しんでいた。駄菓子がオマケ
で付いていたちゃっちゃい水鉄砲は彼女のお気に入り、こうして湯
船に浸かる機会があれば、それで私の顔面を狙うのが習慣になっ
ている。

今日も今日で、『肩こり・腰痛に効く』という温泉水をまさしく
湯水のように顔に浴びせられた後、売店で風呂上がりのフルーツ・

オレをしつかり味わってから部屋に戻った頃には、再び眠気に襲われたらしく、彼女は浴衣姿のままベッドに倒れ込んだ。

それから三分も経たず寝息を立て始めた彼女に布団をかけて、肩の力を溜息と共に抜いてから振り返る。そこに居るのは、もはや定番になった刑事サボリ組だ。

部屋は私達の分と幽霊達の方で二部屋取っていたのだけれど、幽霊が可奈さんに譲ったらしい。「気まぐれよね」と可奈さんは言うが、人を軽々あの世送りにできる人物が、気まぐれな性格を持ち合わせている事に、もう少し危機感を持つてほしい。無差別無作為作動の爆弾なんて誰がいるっていうんだ。

それならまだ、理性的な殺人者の方がマシだとくだらない事を思いながら、冷蔵庫からぼったくりな値段をしたジューズ缶を二人の前に置いた。

特捜の横やりがない辺り、ハブられているとはいえ刑事がこうして同伴する事で、警察が聴取と監視を行っていると、対面を繕おうという思惑なのかもしれない。

何にしても、鬱陶しい連中の代わりでこの二人というのなら有り難い話ではある。監視も解けたようストーカーで気分も幾らか晴れた。

二つしかない椅子に可奈さんと悠志君が座っているので、私はベッドの端に腰かける。久しぶりの柔らかいスプリングの感触。

「今日はベッドで寝れそうね」

「それは……横着してソファで仮眠を取るからでしょう？」

悠志君が言い咎めてくるけれど、その認識は甘い。私がベッドで寝ない最大の理由は蜜の相手（、）をして余計に体力を減らしたくないからだ。そう言うと彼は苦笑して、「でも」と言った。

「良かったんですか？ 任意同行拒否して」

「んー、何で？」

「いや、三回目の拒否じゃないですか。捜査に非協力的っていう印象ないですよ？」

「今更よ。それに閉所に連れ込まれるよりマシ。催眠商法って知っ

てる？」

「はあ……？」

「池田君、警察としてそれは知つときなさいよ。SF商法とも言つただけど、まあ狭い場所に人を集めて雰囲気盛り上げる事で、集団催眠状態にしてモノを買わす悪質商法よ」

可奈さんの説明に悠志君が何とも言えない表情になる。

「それ、取調室の事言ってます？」

「言ってるわよ。相手のテリトリー、それも狭い閉所。どう考えても警察に有利じゃない。任意同行名義だつたとしても、任意で退出が許されると思えない」そこで一口、オレンジジュースを含んだ。「それぐらい私の警察に対する信用は低いの」

それこそ今更だと彼も思ったのか、苦笑いは空笑いに変わった。

「そんなにハート事件の大搜索は迷惑でしたか」

「それだけじゃないけどね。あの当時私が一番うんざりしたのは、警察やマスコミの責任感のなさよ。連中、自分達がやってる事に何の責任も感じてないの。ハート事件？なるほど、凶悪な連続殺人犯が存在しているという情報は確かに必要だとは思うわ。でも、その犯人像をコメンテーターが推理する必要ってある？被害者が餌づけしてた猫の名前って重要？猫を引き取った両親への賛否両論なんて報道して何になるの？不良少女は自業自得？そんなの赤の他人である大衆が言う事？白桃シロップ説？何で警察はそれを記者にしゃべったの？彼らが面目を犠牲にしてくれば捜査ミスや不祥事を勘ぐられる事を気になければ隠しきれなかったわけじゃないでしょ？彼らは自分達の誇れる体面を守つたのよ。だいたい、吸水性のあるハンカチで血を媒介する事ができないなんて、試せばすぐ分かる事なのにさ。それなのに大搜索までして……マスコミはまだ大騒ぎ。冤罪疑惑？わざわざ……わざわざ懇切丁寧にフリップボードを用意してまで解説する事なの？現行犯の戯言を、何でどの報道局も揃いも揃って、嬉々として報道したの？『ああなるほど、つまりそいつらが犯人なんだ』……そんな

いい加減な考えを浴びせられる人間の事をテレビ越しの大衆は分か
つてゐない。そんなやつらの需要に応えて、必要もない事を騒ぎ立
てて、人の人生かき回しておいて、自分らは正義だのジャーナリス
ムだの……それで被^こつた私達のハンディキャップなんて気にも留め
てない。自分らは正しい事やっと思つてんのよ。ところがそれを
糾弾しようにも法は彼らに肩入れしてる。法は法を作つてる人間が、
同調しやすい人間に向けて作られる。それを思い知らされた。法自
体も、行政も司法も信用できたものじゃない」

「司法？」

首を捻る悠志君に、はつとした。しまった、思わず熱くなつてし
まつて口が滑つた。警察は行政機関、司法機関は

「裁判所、ですか？ あれ？ でも確かハート事件で裁判にかけら
れたりしてないですよ？」

「蜜ちゃんの両親の事でしよう？」

……可奈さんも余計な事を。

「ええ。悠志君も蜜の両親が現在服役中だつて事は知つてるでしょ
？ 何でかは知つてる？」

「え？ ええーと……」

分からないというよりは言いにくいという顔をする彼。実際そう
思つてゐるのだろう。確かに、知つてゐるとしても言いにくいし、
嗅ぎまわられれば不快以外の何でもない事柄だから躊躇するのも分
かる。

「蜜への虐待。で、懲役七年。あと四年で出てくるの。長いと思つ
？」

「短い、ですか」

「短いね、短い、短すぎる。幼少期、誰もが過^ごす黄金の日々……
まあ、これは他人の受け売りなだけどさ。そんな時期をぶち壊さ
れた拳^{こぶし}句、暴行されて、後遺症がまだ残つたままで、それで反省し
ようがしまいが七年で釈放……いや、仮釈でもっと早いのかな？
まあともかくそれだけで出てくる。それが法がちゃんと適応された

結果ときてる、本ツ当やっつてられない」

「でしよう？」と言外に問う。返ってきたのは無言だった。

「蜜、中学生の頃はいつも教室で寝ててね。何でか訊いたら『家じや眠れないから』って言ったのよ？ 私は死刑にしたかった」

ジュースを飲み干して屑かごに入れて帰り、ベッドで寝入る蜜の頭を撫でる。ぐっすりと眠っているようだ。

僅かに逡巡した後、口を開く。

「それに……それにもし本当に法がちゃんとあのクズ二人を裁けたのなら、死刑だってあり得た」

「え？」

「あいつら、蜜の妹を殺してるから」

「い、いや待ってください！ それは幾ら何でも警察が黙っていないでしょう？ それに確か桜川さんに兄弟は……！」

「うん、居ないよ。居ない事になってる。戸籍上はね」

「で、でもいきなり子供が消えれば近辺で噂にぐらい」

「その子、生涯一度も外に出れず死んだって」

「産婦人科に問い合わせれば」

「妊娠検査なんか行っつてなかったし、当然自宅出産よ」

「桜川さんの証言は」

「蜜の虐待に関して精神障害を武器にしたの。言ったところで妄言扱いね」

「……………」

もう、彼は何も言わなかった。

「陳腐な言い回しだけど、蜜は命の重さを誰よりも知ってる。そして私は法がヒトを守ってくれない事をよく知ってるの。法そのものがどうのなんて今更言わないけどさ、法の下の平等ってやつがクズ二人を守って殺された妹に何もできないって……そんな不平等、ねえ？」

もつとも、今現在『疑わしきは罰せず』という原則に守られている私達の言うような事ではないのだからうけど。

「天網恢恢疎にして漏らさず。神が作つたらならまだしも、人の法なんて穴だらけよ。だったらそれらしくしてればいいものを、外面だけはご立派に構えてさ。法を回す公的機関までもが正義だのなんだのと馬鹿な事を言ってる。その結果が昨今の警察・検察の不祥事だつていうんだから目も当てられない。警察に正義の味方を名乗られたらこの社会は終わりよ。張る見栄があるから判断を誤る。被害者だろうと被疑者だろうと平等に扱うのが彼らの役目。あくまで治安維持の機構システムなんだから機械システムらしくあつてもらわないと。正義なんてそんなモノ、暴力で万事を解決するヒーローにでもくれてやればいいのよ」

二本目、今度は林檎ジュース。国産果汁一〇〇%の表記通り、よくあるクリアアップルではなく濁ったタイプだった。結局のところ濃縮還元なわけだけれど、果汁感がある分こっちの方が好きだ。それを一気に飲み干した。

「さてまあ、私の恨みつらみの入った話はお仕舞い。すでに過ぎた事はいいとして、今回の二番煎じ事件が丸く収まってくれればねえ。要は警察が私達を疑わなければいいんだけど。犯人かどうかなんて本人が一番よく分かつてる事とはいえ、こればかりはいくら自己主張してもね。言葉では幾らでも嘘が吐けるから……潔白が証明できるんなら私の心を覗かせてやりたいよ」

「冗談混じり溜息混じりで言った私の台詞。

けれど、それに悠志君はきょとんとして何とはなしに言った。

「そんなの、白藤さん達が犯人じゃないなんて見れば分かりますよ。疑い晴らすために必死じゃないですか」

その言葉に、その不意打ちに、今度は私が呆気にとられた。

そんな言葉をかけられるなんて端から頭になかっただけに、思わず彼を凝視してしまう。

「な、なんですか？」

……思えば、私は疑われる事を前提に過ごしてきた気がする。白桃シロップ説、それがあつた限り自分達は疑われて当然だと。

けれど、少なくともここに、根拠もなく私達を信じてくれる人間が居る。

「いや、ちよつとぐつと来たわ。悠志君は警察辞めて探偵になった方がいいわよ」

否、どつちかと言えば助手なんだろうけれど。「俺、警察になつたばつかなんですけど」という彼の眩きを無視して、冷蔵庫を再び開けてアルコール類を取り出した。

何だかとても気分がいい。今なら気持ちよく酔える事だろう。そんな予感がある。

それに、実のところお摘みはもう買つてあるのだ。

私は結構お酒が強い方だ。酒豪とまでは言わないけれど、ビール三本ぐらいなら余裕だし、以前知人と二リットルのピッチャーで一気飲み対決をやった時は三杯飲み干した事もある。

『お酒は二十歳になってから』という決まりもまた、なかなか守らせる事が出来ないのが法の限界などと、冗談にならない冗談はさておき、昨晚飲んだ本数を数えればたった二本だけでも関わらず、私は朝起きると同時に頭痛に悩まされていた。

誰かが押したインターホンで目を覚まして、まず入ってきたのは蜜の姿。可奈さん達が帰つた後に目を覚ました彼女に押し倒されて……うん、いつも通りか。最近のご無沙汰だったけれど。そのせいで睡眠時間が大幅に削られて、頭痛。

二回目の呼び鈴に「はいはい出ますよ」と適当な返事をして立ち上がる。まだ寝ぼけている頭を振って、寝癖を整えてから扉を開けた。

当然と言えば当然、部屋の外に居るのは可奈さん達だった。

「おはよーございます。どうかしましたか？」

「おは……の前に、桃ちゃん」

「ふぁい？」

「足に引っ掛けたシューズを穿き直しなさい」

「……………」
「言われて、自分の身なりに目をやる。」

上半身、Ｔシャツ。下半身、右足首の引っかつたシューズ。それだけ。

「実に扇情的というか戦場後というか……………。これはもはや服を着ているとすら言えない。」

「よし、まずは悠志君を殴ろう。」

反射的に右ストレートを彼の鳩尾に叩きこんでから、シューズを上げ直し、部屋に入ってジーンパンを穿いて、蜜がちゃんと服を着ているかを確認してから外に出た。悠志君はまだ悶絶したままだ。

「改めておはようございます」

「おはよう。目は覚めた？」

「それはもう」

「主に拳の痛みで。優男だと思ってたのに、野郎なかなか鍛えてやがった。」

「それで何か？」

「朝食に誘いに来たのよ」

「ああ…………、けど蜜がまだ寝てるし。流石に一人で置いてくのは…

……………」

「大丈夫よ、悠志君が見てるから」

「そこで自分が立候補しない辺り流石だと思う。」

「しばし考えてから、私は頷いた。」

「そう…………ですね。ご好意に甘えさせてもらいます」

頭痛を紛らわせるためにも、残った眠気を覚ますためにも珈琲ぐらい口にしたい。

顔を洗って髪を整え、珍しくポニーテールに結んで、よろめき立つ悠志君に蜜の事を頼んでから、私は可奈さんと一階の喫茶店に入った。先客達の頼んだ珈琲の香りに満たされた店内をよぎって適当

な空席に座り、メニューから珈琲と目玉焼きトースト、フルーツ盛り……はなかったたのでフルーツポンチを注文した。

少し遅い時間帯だからか、すぐに並べられた注文の品に手をつけながら、回転のまだ鈍い脳みそを試運転させるべく五件目の殺人を整理してみる。

まず、死体。バラバラではなかった。まあ、着ぐるみを着せるためにはそうするしかないから必然と言える。なら、着せる理由は？ 死体を見つげにくくする、は大して効果がない。死体を切断するのは流石にあの状況下では難しかった、とするなら服を着せるのも同じだろう。蜜に容疑を着せるため、それが妥当か？ 今まで私だけが狙われていたのは普段蜜は外に出ないから……と考えれば筋は通る。これで私単体が狙われているというケースは消えたわけだ。

けれど今回もまた凶器は出なかった。四件目は私というイレギュラーで凶器を残す結果になったけれど、あれだって凶器を残しているくつもりはなかったと捉えられる。

次に警察。連中は犯行を見ていない。シンデレラの出入り口は見張っていたようだが、業務員入り口や非常口までは数が足りなかったらしい。外部からの出入りは可能だった。つまり五件目の状況はこれまでの四件と変わりがないわけだ。状況に進展はなし。故にどうすべきか迷う。判断材料がまるで揃わない。

そもそも五人も殺して何がしたかったのか説明がつかない。そこが悩みどころだ。

もそもそごくくと、珈琲で流し込むようにトーストを平らげて、デザートも一気に頬張る。それを飲み込み、仕上げに口直しに残りの珈琲も空にして立ち上がった。

「さあ、帰りますか」

「もうちょつとしつかり食べればいいのに」

なんて可奈さんは言うけれど、破裂寸前の風船を持たされている私達としてはそうもいかない。蜜は蜜で今は平然としてはいるものの、あの子は神経質な所があるから特に心配だ。

さつさと事務所に返って対策を立てたいし、弁護士とも予め相談しておきたいし、反証も整理しておきたい。

そんなわけで足早に店を立った私達は、大して会話も交わさずエレベーターに乗車。機内を鏡に映る自分をぼうつと眺めて過ごし、目的階層についた昇降機を降りて、ホテル特有の方向感覚が狂う単調な廊下の奥、『710』号室へ到着。錠前にカードキーを差し込んで、何ともなしにドアを開いた。

そして、

「……一応訊いておきますが……悠志君で訓練受けてますよね？」

「逮捕術訓練？ 柔道とか剣道とか狙撃とか、そういう成績はピカイチだったはずだけど……」

「まさか、鳩尾が思いの外効いてたって事は……」

「いやあ、それはないでしょう」

床にずり落ちたかけ布団、捲れた白いシーツは斑に赤く染まっている。寝台の、惨劇の中心は特に酷い。飛び散るといふよりは零れたのだらう血の染みが広がり、男らしく筋肉のある腕が片方、こっちに向けて手を伸ばしている。もう片方は掛け布団と共に床に転がり、胴体もまたカーペットを汚していた。

その全ての真ん中に蜜は居た。酷く震えて、目尻には涙。汗が滴り落ちて、吐き気もするのか口を左手で覆っている。

右手は、右手には血染めの包丁。

うえ……、と嗚咽が漏れる。

「気持ち、悪いよお」

そう消え入りそうな声色で呟いて、彼女は悠志君の頭をベッドから蹴り落とした。

転がる頭部は先に蹴落とされたらしき他の身体と再会を果たす。

そんな皮肉った表現がまるで笑えない。

状況は、これ以上ないほどに致命的だ。

7、防衛ライン 正異に揺れる

現行犯逮捕の名目で連れていかれた蜜に付いて、私は警察署に居た。

蜜と離され、同じくのけ者に可奈さん、梶川さんと三人で廊下の壁に無言でもたれかかってしばし、沈黙を破ったのは可奈さんだつた。

「これからどうするの？」

その質問に答えられずに、私は相棒を失いその犯人が蜜である可能性が高いこの状況で、それでも態度を変えないでいてくれる彼女に問い返した。

「可奈さんは……悠志君が死んだ事、どう思ってますか？」

「ん、まあ、思う事がないわけじゃないけどね。パートナーが死ぬ事は前にもあつた事だし、彼とは付き合い短かつたから」

ああ、そう言えば彼女は普通の神経を持ってはいなかつたんだっけ。

前にもあつた事だから、付き合いが短かつたから、ね。つまりはそれほど彼に愛着を抱いていなかったのか……それとも人の死自体に悲しみを覚えない性質なのか。

「それに、あれはあなたのせいでも蜜ちゃんのせいでもない。そうでしょう？」

言い添えられた台詞に、私は長く間をおいてから「はい」と答えた。

「犯人はどうやったと思う？」

「事件の結果から考えれば、おそらくは作業員通路を使ったじゃないかと。監視カメラは極力避けたかつたはずだし、作業服さえ着ていれば誰も気に留めない、加えて部屋の鍵を開けさせるのにも警戒を解きやすい……忍び込むにはこの方法が一番都合がいいはず。問題はそれが証明できない事だけど……でも、蜜が犯人じゃないとい

う事だけは……はつきりしてるわ」

「何で？」

「蜜は男性恐怖症なの。触れただけで吐いちゃう、殺人なんてできっこない」

「ああ……でも、なんでそれ先に言わなかったの？」

「これまでは女性ばかり殺されてるもの。蜜に不利になるような事を私は言わないわよ。不利な事情を秘匿することは何ら罪にならない」

「賢明ね。恐怖症の原因は虐待？」

「……中学の頃父親に迫られたのがトラウマに……その時は間一髪、私が鉄バットで……まあ、不法侵入と暴行扱いになりましたけど、訴訟されたのを逆手にとつて……虐待を仄めかして、それで精神疾患の証明書を裁判でつきつけて……っ、やられたっ！ 永山基準！」

「うん？」

「蜜は精神病患者！ 裁判の際精神鑑定に持ち込まれる可能性がある事は犯人も分かってた！ 虐待被害者である蜜は一人殺したぐらいいじゃ死刑は難しい……だから六人殺した！ 永山事件以後、殺人事件の死刑判決は犯罪の性質、動機、残虐性、殺害数に遺族感情や社会的影響などを基準に決められるようになっていて」

「特に殺害数は四人以上で重刑の傾向……」

「ええ、心神耗弱が認められても無期懲役。この件が刑事裁判にかけられた場合被害者数は六人、証明はできないとはいえハート事件の被害者数と合わせれば十二人になる。何より今は裁判員制度が導入されていますから……」

「裁判員の心証はすこぶる悪いでしょうね」

「裁判員制度の導入は二〇〇九年五月。初の少年事件裁判の死刑判決が、永山基準に則つて下されたのは二〇一〇年十一月。本来なら私達が少年法の対象外になるのを六年待つところだったのが、制度導入とその死刑判決で早まったとしたら？ 五年の空白はむしろ短

かつたんだ……。確実に死刑にする。そのための連続殺人……六人殺せば申し分ない。ドームでの五件目が蜜狙いだったのは、数が条件に達したから。思えば、今回の事件は決まって蜜に確かなアリバイがない時に起こってた。警察に容疑をかけさせるためにもハート事件と同じ手口でなきゃいけない。ただでさえ外にでない蜜を最初から狙えば警戒される。私を狙い続けたのはカモフラージュ、確かに狙われるのは私という安心感があった……」

いや、問題はそこじゃない。どうやって蜜を助け出すかだ。

どうする？ どうすれば……いや、少なくとも事件はこれで終わりだ。推理材料はこれ以上増えない。

犯人の狙いは蜜、目的は冤罪による死刑。

今まで断定しかねていた事柄もこれで定まった。ならば推理自体は可能のはずだ。

問題は、時間。

「時間が足りない。検察に送られる前に……駄目だ逮捕となれば流石にマスコミも……二、三日。せめてそれだけあれば……」

だけど、あれだけ虚仮にした以上、あの警視正はすぐさま蜜を検察官に引き渡すだろう。

「……白藤さん」

ブツブツ呟いて思考に没頭していた私に、梶川さんが遠慮がちに声をかけてきた。

「何でそんなに急ぐ？ 言っではなんだが、桜川さんの判決が出る前に真犯人を捕まえればいいんだ。焦ると正常な判断ができなくなる」

確かに、傍目そうではあるし、彼の言う事はもつともだ。要するに冤罪を止めればいいという意味では一ヶ月以上時間はある。裁判も上訴すれば時間稼ぎにはなる。死刑執行なんてさらに何年も先の事だろう。

けれど、私の懸念はそこではない。

「委員長や弁護士の事は知ってるでしょう？ マスコミの恐ろしさ

は誰より知ってるんです私は。怖いんですよ……蜜が世間に晒される事が」

冤罪から救い出す事だけが私の役目じゃない。蜜の全てを守る事が、私の全て。だからこそ必死で手を打ってきたというのに、なのに、

「……蜜は泣いてましたか？」

幾ら男女雇用均等法が適応されようと、高々十年ほど前からの若い法律だ。私服警官はまだまだ男性が多い。

悪意はなかるうと、疑念の目を向けられるだけで蜜には辛いだろう。

「……ああ」

総次郎さんの答えに目を瞑る。

「取り調べは？」

「警視正殿が直々に」

蜜が男性恐怖症である事ぐらい、私達に疑っていた彼らが知らなはずがない。見逃していたとしても、蜜の様子から彼女の精神病フロイデルを見直さなはずがない。

分かって、分かっていて……！

……なら、こつちも手段を選ぶ必要はない。

「可奈さん、猪俣、呼び出せる？」

「対談をセツティングしろって事？」

「ええ、場所は取り調べ室以外ならどこでも。あと可奈さんもついて来てくれれば有り難いです」

「援護？」

「いえ、猪俣あいつ警視正は一人で来るでしょう。けど、当て馬が居た方がやりやすい」

「一人で来るって保証は？」

「一度会えばどんな人間かは分かるわ。恥をかくのが人一倍嫌いで、自分が優位に立っていると確信した相手には変に丁寧な口調になる。自身は人格者のつもりで責任者としての行動を取れているという自

負あり。ただ周りの評価は高くない。外から盗み聞けない密室で、昨晚恥をかかされた相手に会うのに、わざわざ人は連れてこない。何より蜜を捕まえて気が大きくなってる。この優位な状況下で、私に報復できる好機を見逃すと？ 人間観察は名探偵の十八番よ。そしてそこそ付け入る隙 天狗になつた鼻を顔ごと凹ましてやるわよ」

用意されたのは小会議室らしき小さな個室。

窓はなく、白かったであろう壁紙は幾らか汚れ、天井を見上げれば紫煙の汚れが見える。丸いマグネットが端に並べられたホワイトボード、インクが切れたものを処分しないまま補充を繰り返したのか、黒色のマジックペンが七つほど粉受けに溜まっている。脚に埃がこびり付いているところからしても、設置され続けているらしい折りたたみ式の長机、そしてパイプ椅子が二つ。

それに座るのは当然私、そして猪俣警視正だ。

二人での対話を望んだ彼の命令口調の台詞を軽く無視した可奈さんは、二人が視界に入る位置で壁にもたれかかっている。

両肘を机につけ指を絡めた体勢の彼。足を組んで背もたれに身体を預ける私。

その体勢で対峙して、しばし流れた沈黙の中、先に口を開いたのは彼だった。

「今回の逮捕は現行犯。彼女がやった事はこれ以上ないほどに明らかです。私には今更あなたが何を主張したいのか……黙っていても分かりかねるのですが」

「現行犯でも誤認逮捕はあり得るなんて事、今更指摘させる気ですか？ 実際彼女が殺している瞬間を誰かが見たわけではないでしょう？ 犯行を目撃した者もなく、部外者が出入りもできないわけでもない。何者かが罪をなすりつけようとしている可能性が最初から

示唆されている今回、充分に疑う余地はあると思いますが？」

私の主張に彼は可奈さんに目を流し鼻で嗤った。「警部補からその話は聞きましたが、信じられない話です」

その答えを嘲笑って私も返す。

「あんたが信じるか信じないかなんてそれこそどうでもいい話でしょうよ。私は信じるなんて言ってます。適正な捜査をしろと言ってるんですけど？」

お互いがお互い、相手の事を見下し貶し合いながら、表面上は満面の笑みのまま対談は続く。

「だいたい、蜜や私が犯人だとしては筋の通らない事が多すぎる、違いますか？ 疑われる事なんて分かりきっているのに、同じ手口を取る理由は？ 今更事件を蒸し返すのは何故？」

彼は長く息を吐いて、ゆったりと背もたれに身体を預けた。

その様子が酷く、癪に障る。その理由を探ってすぐさま思い当たる節を見つけた。

そつだ、同性愛をカミングアウトした時の父の態度と似てるんだ。諭そつとしている様子が、自らが正しき立ち位置に立っているのだと疑いもしないその様だ。

「君は信じたくないのだろうが」

仕返しのつもりか『信じたく』のところをわざわざ強調して彼は言う。

「彼女は異常犯だ。あんな手口で人を殺している事からも分かるが、彼女の動機や経緯を常識で理解できるものではない」

「違うでしょう？ 蜜が犯人であるとする説明できない事が多すぎるから、動機や思考が分からないのよ。容疑が先に来てるから犯人像が異常犯になるだけ。別に蜜が異常犯だから動機を理解できないわけじゃないわ」

「言っていて苦しいとは思いませんか。元からあつた容疑に現行犯、屁理屈が通る状況ではありませんよ？」

「そつちこそ。異常犯で筋を無理やり通そつなんていう屁理屈が通

用するとしても？ ハート事件の犯人が広一君だというのは警察の結論でしょう？ そもそも容疑を掛けられる筋合いが私達にはないはずですが？」

お互いの主張は交わりそうにない。というよりお互い、相手の主張を聞いてない。

笑顔で顔を突き合わせて目を合わせずに言いたい事を自分の主張を喋っているだけだ。

「彼女は精神病を患っている。虐待を受けていた事は知ってます」
このまま言い合っても平行線を辿るだろうと考えてか、彼は流れを変えてきた。

「確かに」私の言葉に彼は理解はしているとばかりに頷いた。「彼女は被害者だ。だが、殺人は許されるべきではない。あなたも分かっているでしょう？」

「虐待死を弄くるのが関の山のくせに何を偉そうに。取り返しがつかなくなる前に助けられなかった事を棚に上げて、今度は異常犯に仕立て上げるつもり？ そういう言いがかり、本当そろそろやめてほしいわ。だいたい、精神疾患ひがいしゃというのなら尚更蜜に悠志君は殺せない。彼女は男性恐怖症、それこそ分かってるでしょ？」

「ええ、まあ、彼女が男性に対して精神的負荷を受ける事は知っています」

彼はまるで最大限の譲歩をしようとしているかのようにそう口にし、「しかし」と次いで言葉を発した。

「しかしだからと言って、できないわけではない」

言うてはいけない 台詞を。

「反証にするには根拠が薄い、そうでしょう？」

「……………」

なるほど、なるほどね。

薄々分かつてはいた事ではあるけれど。そういう考えで、蜜の取り調べを行ったわけだ。分かっているながら女性職員に任せず、我を通して。

……蜜を泣かしたわけだ。

あるいはまさか、男が行った方が自白させやすいなどと考えて？

そんな自分の勝手な推測に、実際あり得そうなだけに寒気がした。恐怖症の圧迫感には本人しか分からない。殊、心の問題である故に、他人には絶対に伝わらない。

いや、恐怖症だけに限らず精神疾患全般的に、心の問題だからこそ、『心の強弱で克服できる』などと他人事だからこそ出てくるそんな世間一般の勝手な偏見おぼこみで語れるほど甘くはない、はずだ。

そう。『はず』……結局は、精神疾患ではない私にはその苦しみは分からない。どんなに想っても分かんない。

私にも、私にだって分かりたくても蜜の恐怖も不安も心細さも分からないのに。

それを、よくも軽々しく……！

自分の想いが自分でさえ分からない蜜。分かってもうまく伝えられない蜜。人が、特に男が怖くて対峙するだけで泣きそうになる蜜。虐待を受けて、妹が亡くなって。今でもそんな日々には蜜は心を雁字搦めにされたまま、一人で生きていく事もできず、人と交流する事もままならず、不自由だらけで日々を生きている。

『できないわけではない』

そんなふざけた世迷い事で精神疾患を克服できるのなら、彼女はあんなにも苦しんでいないだろうし、……もしも彼女がそんなモノ患ってなければ、

「もし、患って、いなければ」

思わず零れた言葉を飲み込む。その先の考えに指先まで冷えた身体が震えた。

本当に、この社会ってやつはどこまで……どこまで彼女に辛く当たれば気が済むのだろうか。

もう、いい。さっさと叩き潰そう。

そんな、どす黒い感情がせり上がったのと同時に、手が動いてい

た。

バキリ、という音が室内に響く。

それはもちろん、私の堪忍袋の切れる音ではない。そんなモノと
うに切れている。けれど私が宣言通り凹まそうと彼の顔を殴った打
撃音でもない。

音源は彼の背広のポケットの中。差し込まれていたペン……型の
ICレコーダーだった。それを身体を乗り出し伸ばした私の右手が
ポケットごと掴んでいる。

「小娘だと思つて嘗めてないか？」

握りつぶされたレコーダーを引き抜きながら、発せられる私の声
は底冷えしたモノだった。

「ねえ、コレ無断録音つていうのよ？ 相手方の同意なしに對話を
記録するのが犯罪だつて知らなかった？ 立派な人格権侵害」

一息、

「まさか、証拠採用しようとか、思つてなかったよな？」

ガタンと突き放すようにして伸ばしていた右腕で背広共々引き寄
せられて腰が上がっていた彼をパイプ椅子に押し戻した。

「見込み捜査あてつきばうで犯人探ししたけりや推理小説でも読んでるよゴミ虫。
頭が空つぽで自分の置かれてる状況がまるで分かつてないあんたに
懇切丁寧に教えてあげるけどさ、今回の事件はハート事件と同様の
手口が当時の被疑者の近くで起きていて、警察……というかあんた
はハート事件の犯人たる広一君の言葉を受けた、私達が犯人という
確証ゼロの説を採用して私達に容疑をかけ、対して私達は当時の警
察の無神経な捜査によって生じた疑惑が、今回の事件の引き金にな
っている」と主張したが無碍にされた。というのが大筋だ。私達が
不平等な扱いをされている事実が前提として存在してる」

何か反論しようと口を開きかけた彼を封殺するために口調を強
める。

「そんな捜査方針に加えて捜査も不当。推理自体の矛盾。自白に頼
ろうという言動。恐怖症と分かつていながら対応を怠つた、あんた

の精神疾患への認識の甘さ。無断録音という国民の人権を軽んじる行為。そして一番問題なのは、真犯人の存在を度々示唆されておきながら、『信じられないから』というくだらない理由で無視した事だ。ハート事件と今回の事件は手口だけでなくその後の展開も似ていると思わないか？ 現行犯逮捕、被疑者の主張。前回の際は被疑者広一君の主張を聞き入れ捜査し、今回その警察の捜査によって生まれた疑惑で逮捕された蜜や私の主張は無視。比べれば比べるほど見えてくるのはあなたの責任者としての不手際だ。実にマスコミ受けしうよねえ？」

「……この事件の詳細は伏せられてるんですよ？」

「本当に警察の情報規制が効いているなら、そもそも浅越市女児連続殺人事件はハート事件とは呼ばれなかった。ついでに言えば私達の疑惑も広一君の死も、あるいはなかったかもしれない。あの事件以後、私達が最も恐れてきたのは何だと思う？ そしてその対策を怠ったと思う？ 私にも私の伝つてつてものがあるのよ。無断録音の証拠は私の手の中に、不適切捜査に関しては、警察の身内で、あなたが勝手に敵視してる焼き太り（、、、）可奈ちゃんが証言してくれる。勝手に自分を貶める材料を与えてくれるんだから、彼女にしてみれば万々歳よね。あんたさあ、あんたより速いスピード出してる悪名高きぬらりひょん可奈ちゃんが、何で今回沈黙を保っていると思ってるの？ まさか、本当に彼女を出し抜いたとも思ってた？ どれだけおめでたい頭してるの？」

雷に打たれたように件の人物へと目を向ける彼。すでに余裕はないと見える。

対する可奈さんは唾われた際には表情一つ変えなかった顔を歪めていた。吊り上がった口角、弓なりに細められた瞳、座っているため高低差のある猪俣を見下す目。まさに嘲笑。これほど当て馬に相応しい人物を私は知らない。

彼女に視線が固定されてしまった彼をそのままに話を進める。

「あんた付け入る隙が多すぎ。建前だけでも公平さを演出するため

に、因縁説の捜査もちゃんとすべきだったのよ。それとあんたさあ、この県警の評判の悪さ知ってる？ 職務質問の態度が悪いとか高圧的とかマスコミに叩かれてるの。県警の悪評は地方公務員である県の問題で済むけれど、今回、中央からあんたが来てる。この事件での不祥事は警察庁にも責任が感染する。ただでさえ近年の警察の不祥事に、世間様が敏感になってるこのご時世に、もし不当逮捕が明るみに出たら大問題に発展するのは避けられない。というか私がそうさせる。そうなった場合、責任を媒介するマラリア蚊如きあんたをお上はどうすると思う？ つまりあんたは蜜逮捕後に真犯人が見つかった場合は、当然捜査の不当さを叩かれ責任を取らされるし、例え見つからなくても私に不当捜査をマスコミに訴えられて責任を取らされる。それに比べて私は同じ事件を起こすだけで蜜を解放させられる」

「な、に……？」

「ヤダなあ、私達が犯人つてつまりそういう事でしょ？ ハート事件を起こし、それを無実の広一君になすりつけた極悪非道な人物。別に名探偵という役柄に拘って事件を解決しなくても、蜜が拘束されているこの状況で次の殺人が起きれば、あんたらは蜜を解放するしかない。遺留品なしのこの事件は、凶器の血液検査ぐらいでしか一つ一つの事件を繋ぎ合わせる事ができない。第四の殺人で凶器が見つかっている以上、前四件と後ろ二件は本来なら別の事件だ。ただ手口が同じってだけで今回の六件の事件を関連づけて、かつハート事件の疑惑まで持ち出したあんたらは、当然次同じ手口で殺人が起こった場合にも、その法則を適応せざるを得ないじゃない。私達が犯人であろうとなかろうとこの手段は取れるし、犯人なら尚の事そんな易い手段を目の前にぶら下げられて黙ってるだけでも？ 私達が犯人かどうかなってこの際どうでもいいのよ。どっちにしたってあんたは下手を打ったんだ。手段さえ選ばなければ蜜を助け出す方法が幾らでもある私と違って、あんたは六人の死者……それも警官までが殺されたこの事件、早く解決しなければ今度は不手際の責任

を取らされる。すでに首が回らない。それがあなたの置かれてる状況なの。自分の手札と相手の手札、どっちが多いか数えてみるよ。私は別にあんたと議論する必要すらないんだ。それでもこうして話し合いの場を持つていうのは、単純に蜜がマスコミに晒されるのを避けたいから、お互いに利があるからっただけ。そこんとこちやんと認識しろよ」

「……………警察が脅しに屈すると？」

「脅し？ そんな恐れ多い事、天下の警察様相手にやらないわよ。脅されてるとしてもそれはあなた個人。屈するのはあなただ、猪俣昌警視正。もうすぐ『元』がつく猪俣警視正。かわいそーに、警察から切り捨てられるだけならまだしも、あなた現在絶賛離婚調整中だよな？」

「それが、どうした？」

「出世のために家族の時間を削って働いて、それで奥さんに愛想尽かされて、挙句その警察からも見放されるなんて、ねえ？」

押し黙る彼。絡めた手が力み過ぎて震えている。打って変わってそれを観察する私はニタニタ笑いが止まらない。

「ちょうど私達と同じ年頃の娘さん居るらしいけど、幼い時分に可愛がつてあげた？ 知らないおじさんについてっちゃ駄目だつて教えてあげた？」

ああ、今の私は冷酷な笑みを浮かべているのだろう。その想像すらが楽し過ぎて困る。

「知らない女の子についてっちゃ駄目だつて教えてあげたあ？」

「貴様まさか有美を誘」

「ヤダなあ冗談よ。本気にしないで。そんな事したつて私達にメリツトでしょ？」

立ち上がりかける彼を窘めるようにそう言つて、組んでいた足を入れ替える。

「そもそも私はここに居るんだし、蜜は拘束されてる。そんな事できるわけがないじゃない」

お腹に添えて絡めていた手を解き、立てた親指で首を切る仕草を試みせた。

「だから、もし娘さんがバラバラで？ 心臓抜かれて？ ハートを模って殺されても？ 私達は関係ないわよね？」

「きいいいいさまあああああ？」

怒声。椅子が弾け飛ぶ音。

次の瞬間、立ち上がった彼の伸ばした右腕に胸倉を掴まれ、力任せに引き寄せられていた。両者中立ちで顔を突き合わせる体勢。けれど、そんな事すら計算の内だ。ネクタイを掴み取り、こちらから引き寄せて頭突く。ガツンと小気味よい効果音を響かせて、その不意打ちに彼はふらついた。

「そーだよ、それだ！ まさにその感情！ それが！ 私が今まさにお前に感じてる感情だ！ 最愛の人を取られて！ 私情が見え隠れする理由で！ 当の責任者はしたり顔！ こちとら漬っからド頭ブ千切れてんだよ？ やあっと同じ土台に立てたわけだ！ これで冷静な判断ができるだろう？ 逮捕すればどうなる？ 逮捕しなければどうなる？ どっちが被害が少ないと思うんだ？ さあさ、答えてくれよ羽虫警視正殿？」

二日間。それが羽虫の回答だった。それまで蜜は任意聴取のという扱いになるという。

二日、というか四十八時間というのは、現行犯逮捕から検察官に被疑者の身柄を引き渡す期間と同じだ。その事からしてもまだ蜜の逮捕を諦めたわけではない事はすぐに分かった。

相変わらず自分の置かれた状況が分かっているだけ、これ以上言い争って時間を無駄にする方が愚かしい。話を切り上げて、私はケタケタと笑い続ける可奈さんと部屋を出る事にした。

途中、魂が抜けた抜け殻みたいになっている中年男性が目に入っ

た気がするが気にしない。

「二日間ねえ。大丈夫なの？」

やっと笑いが止まつたらしい可奈さんの問いに「まあ何とか」と返してドアノブを捻る。

「良くも悪くもこれで犯人の目的もはっきりしたし、特定はぐんとやり易……」

扉を開けた向こうに、壁に向いて両手で耳を塞いだ総次郎さんの姿があった。

「……どうしたんでしょね、梶川さん」

「さあ？ 中年オヤジを蔑む女子大学生の台詞でも耳に入ったんじゃない？」

言われてノブを掴んだままのドアを動かしてみれば、思いの外蝶番がぐらぐらで厚さも薄かった。

「なるほど。中年オヤジを嘲る女性職員の笑い声が聞こえちゃったわけだ。ご愁傷様」

「酷いなー。迫真の演技だったでしょう？」

「いや、アレ本当に嘲笑ってたでしょ？」

「にしてもさー、おかしいったら……そもそも警察官であるところの私が桃ちゃん側につくかなんて分からないのにな」

「彼の命令を無視した時点で私は可奈さんが彼を見限ってるの、分かりましたけどね」

「まーねー。総次郎さん？ 梶川警部？ あー駄目だこりゃ。これでも警察じゃあ私と一番付き合い長いんだけどなあ」

「そうなんだ」

「うん。私の周りって入れ替わり激しいからねえ」

「幽霊みたいな連中と絡んでたらそうでしょうよ」

「あ、どう？ 私とコンビ組まない？ 警察手帳ぐらい偽造できるでしょ？」

「やんないよ面倒くさい。それに私まだ死にたくないし」

軽口を叩き合いながら去る私達。その後に残された屍二人が復活

するのにはまだしばらく時間がかかるだろうとどつでもいい事を思
った。

8、苦惱 百合姫し想いに無理祟り

夏の日差しがどれほど強かろうと夜の暗闇に呑みこまれるように頭に血が昇ってハイになっていたテンションは、蜜の居ない事務所に帰ってきた瞬間に冷めてしまった。

雪崩を起こしたファイルの山、消しては書き、書き足しては消しを繰り返した結果、随分と汚れてしまったホワイトボード、押しピンの刺しすぎで脆くなつた箇所からポロポロと崩れ出したコルクボード。相変わらず汚い部屋。洗わないまま二人で増やし続けたテールのカップ。局所、極端に整頓された資料と散乱した資料の対比。二人が過ごしてきた、名残。

光源のない中、ガラス越しに外の光を青白く反射する、床に散らばった資料の中に、蜜が紙切りした人食いパンダを見つけた時、それはピークに達し、扉を閉めたところで足から崩れてへたり込む。眩暈がして瞑った目を、こじ開けて立ち上がるうとすれば、今度は吐き気。

うまく力の入らない身体で床の紙に滑りながらも、何とかソファーにまで辿りついて深く横たわった。

ポストイットとボールペンを取って、『白桃シロップ説』『遺留品なし』『手口同じ』『凶器なし』『広一側』『被害者側』……と今思いつく限りのキーワードを書いて左手に貼っていく。

……まずは状況を整理しよう。

今回の事件はハート事件の二番煎じ。

手口も同じ、遺留品なしという状況も同じ。よって犯人と事件を直接結び付ける証拠は出てきていない。

死体が嫌がらせのように私の周りで見つかった事から見て、白桃シロップ説を信じ私達に復讐心を抱いた人物による犯行ではないかと考えられる。

『遺留品なし』『手口同じ』の付箋をソファアの背もたれに貼り替

えて、『ハート事件の模倣　ハート事件の因縁』と書いたモノを加え、それら三つの横に左手の『白桃シロップ説』をラベル代わりに貼り付けた。

さて……この場合、犯人は内山広一の周辺人物かハート事件の被害者遺族の二つ。ただし広一の関係者は考えうる限りいない。その判断と共に『広一側』と書いたポストイットを握り潰して捨てる。

けれど、犯行現場に凶器を残す意思が見られない事から、私自身に罪を着せようとしているとも考えにくく、犯人の目的がはっきりしなかった。

それが事件最中の推理だったが、事件が六件目池田悠志の死亡と蜜の逮捕という結末を迎えた今、新たに私の周りで殺したのはカモフラージュで犯人の真の目的は蜜という情報が付け加えられる。

これで凶器が残されていないという矛盾は解消された。元々私が目当てではなかったのだから、連続殺人であると証明するためにも凶器は持ち帰ったのだろう。

『凶器なし』の付箋を新たに書いた。蜜に連続殺人の罪を着せるために回収』と一緒に、さっきと同じくソファーに貼った。

とすると、実は被害者側の犯行……という事になるのだろうか？ハート事件最後の騒動を考えれば、白桃シロップ説は蜜が主犯だと考えられるはずだ。娘を殺した真犯人蜜に復讐。動機の筋は通っている。

……いや、それではやっぱり六人も殺すリスクについて説明できていない。犯人は蜜だけではなく私にも恨みがないとおかしい。犯人を隠匿した私に対する恨み？　蜜が冤罪を掛けられ、死罰を受けるといふ状況を作り出す事で二人への復讐に？　……まてまてまてまて……それなら蜜をただ殺せばいいだけだ。蜜に復讐するにしても直接殺せばいいし、蜜を私から取り上げたいのならそれこそ言わずもがな。永山基準を持ち出して連続殺人という危険を冒す必要はないし、娘を殺された立場で無関係な人物を生贄にするという抵抗がかかるだろう行為に手を染める必要性はそれこそ皆無に

なる。

『私？』『蜜？』、二つの付箋を睨みつける。

そもそも六人も殺しておいて蜜を法で裁かせようとするのはおかしい。被害者側の立場ならやはり蜜に直接手を下すだろう。

それでも迂回して蜜を陥れたのは、やっぱり私の方が狙いだったから？

ハート事件、広一君の現行犯逮捕。あの時教室には二人しかいなかった。広一君が犯人じゃないとなれば殺人犯は蜜。私はそれを隠した従犯者という扱いになる。さつきも思った事ではあるけれど、それならば被害者遺族側の復讐なら蜜に重きを置くはずだ。

考えてみれば、私達二人に復讐したいのなら、二人で居る時に死体と凶器を放り込めばいい。事件と私達の関係を匂わしたり、カモフラージュのために私の周りで事件を起こすまでもない。

悠志君が被害者になつた事件……。蜜が男性恐怖症という事は虐待での裁判を調べればすぐに分かる。それでも犯人があそこで殺人に踏み切つたのは、蜜のガードの高さからとしか説明できない。この事務所はセキュリティが堅い。ハート事件と言わず多く人々に恨まれて生きているのは、分かり切っているのでそれぐらいはちゃんと知っている。現にこの事件は初めの殺人から一ヶ月以上という長い期間が過ぎている。最初から蜜に罪を着せるつもりだったなら痺れを切らして当然。シンデレラドームで一度失敗してただけに、あの時を逃せば次の機会が何時来るのか分かつたものじゃなかった。その焦りからいささか強行的な行爲に出たとするなら、そこまでして蜜への冤罪に拘っていたというのなら、間接的に真の狙いは私という事になる？

『私？』の付箋をソファアに貼つて、『真の標的？』と付け加えたけれど、そこまでして私の方を狙う理由が被害者側にはない。蜜を冤罪で殺させる事が復讐として最高の形となるのは広一君側の人間だ。

だけれど、犯人像が広一君の関係者という推理は、広一君に遺族

も親しい親類も存在しないという事実の前に破綻している。

だからこそ推理は一ヶ月も進展せず、蜜が捕まるという結果を招いたのだ。

広一君の周辺人物はいない。消去法によって残るのは被害者側。

その推理が今、広一君の関係者という答えを導き出している ……

……振り出しじゃないか。

腹の上、くしゃくしゃに丸められていた付箋を広げると『広一側の文字。』

もう使う事もないだろうと握りつぶされたそれは、再利用できないほどぐちゃぐちゃだった。

それじゃあ、駄目なのに。

無造作に捨てたボロボロの選択肢をもう一度拾うという、時間を費やしただけの行為に焦りが限界に達する。

「っ、れじゃ駄目なのに！」

同じ所を意味もなくぐるぐると回っている。そんな自分の有様に苛立ってテーブルを拳槌で叩いた。

「結局！ 振り出し！」

もう一度。今度は先の一撃で揺れた置きっぱなしコップが倒れた。取っ手部分がストッパーになって、転がり落ちずに机上に留まったそれを払い飛ばす。

割れる音を聞きながら行動とは裏腹に妙に冷めた思考が、そのヤツ当たりに下らないと酷評を下す。コップが勿体ない、片付ける時間も勿体ない、と。

のろのろと身体を起こして、柄が付いたままになっている破片を拾い上げた。片付ける気にもなれず、足も根が生えたように動かさない。無意識に破片を左手首に持っていつていた。

冷たい手、そこに血が通っているのか、嫌に実感が無い。

目に映るその手が私のモノでないのなら、私はどこに居るのだろう？ 自分がどこに居るのかも分からないという、あまりも不安定な感覚に襲われて、身体がぐらぐらと揺れているような錯覚すら覚

える。

駄目だ、不安に呑まれるな。今は……今はそんな時間はないんだから！

構わず思い切り引けば、肌を走った赤い線から血が少しずつ滲み出てきた。一滴二滴と床に撥ね始めた辺りで動き始めた身体を再びソファーに戻した。

「蜜……」

思わず呟いて自分の身体を強く抱きしめる。血が服に着くのも気にせず、ソファーの端っこに小さく体育座り。身体が寒くて仕方ない。

喪失感に抉れた胸の風穴。そこからくる冷えに耐えようと身を揺するも、効果は期待できそうにない。

前に蜜が熱心に見ていた事を思い出して、手に取ったポータブルDVDレコーダーを再生すると、入っていたのは桐枝先生の結婚式だった。

笑い声、笑顔、主役の二人がケーキに入刀している様子。

それが彼女の憧れだと、今更ながら理解して　私はレコーダーを落とした。

「みつ……」

蒼く暗い視界の中、ぼんやりと照らされる二人の過ごした日々の残骸。

ここに蜜は居ない。もうすぐ、手の届かない所へと行ってしまいかもしれない。

それを再び認識してしまって、乱れ落ち着きのない呼吸が、か細いの悲鳴のようにひいひいと漏れる。

ああ、息の出る音じゃなくて、本当に悲鳴なのかもしれない。

そう思い至った時には、もはや悲鳴でしかない嗚咽が漏れ出して止まらなくなっていた。

蜜も、蜜も泣いているだろう。

彼女もこんなにも苦しくて、心細い想いをしているのだろうか？

それを私が知る事は一生ない。人間たださえ、本当の意味で心通わす事などでははしないのだ。自分の感情すらをうまく理解できない彼女の心に私が触れる事があるわけがない。

相手の気持ちを手勝手に想像して感応する事を同情や共感と呼び、その相互作用の間に生まれるのモノを絆と呼ぶのなら、それすらできない私と蜜の間には何があるのだろうか？

……分からない。

けど、今私の胸にあるこの感情は、きっと後悔だ。

こんな事になる前に、あの時と同じように抱きしめてやればよかったんだ……。

心が触れ合わないのなら、せめて身体ぐらいは。

それすらが今は遠い。

深く沈み込む感情に、どれほど自分が蜜に依存しているのかを思い知らされる。

そう、本当に依存してるのは私の方。同性愛者の私の方だ。

カミングアウトした私にかけられたのは「微妙な年頃なだけだ、大丈夫。心配するな」という諭すような父親の台詞だった。

所詮、そんなものだ。ある程度社会において認知度が高いといっても、異性愛が初期値……標準という認識は変わっていない。

生殖という生物学的見地からそれを多くの人々は疑いもしないが、それを言うなら同性愛・両性愛行動は人以外の動物一五〇〇種ほどで確認されているのだから別にその限りではなのだけど、多くの人間にしてみればそんなの興味のない事なのだろう。

興味もないから調べはしない。調べないでもそれらを知っているのは耳に入ってくる情報からだ。それがまた大衆向けに調整されたりする情報で、当然最も万人受けしやすいモノで　そんな彼らが自分の得た知識だけで物事を判断するのが世論というやつなのだから、この社会は少数派マイナーにとってはなかなか、我が通しにくい造りをしている。法が作る人間に都合よく作られるように、大衆や民衆という聞こえのいい言葉は大衆に向けては聞こえがいいのだろう。

無関心でいてくれるのならそれでもいいのに、不都合ばかりを寄こしてくれるんだから……時々、嫌になる。

それを別に嘆くわけではないけれど、そんな社会で、そんな世界の中で、私は蜜と出会った。

もうあるか分からない運命のような出会い。

男に一欠片も興味が沸かない、女の子にしか魅力を感じない、そんな私が巡り会えた女^{ひと}。

そして、今では蜜以外なんて考えられないと言える唯一無二の人。手放したくない、かけがえのない存在。

けれど蜜にとってはどうだったのだろうか？

別に同性愛者ではなかった、今もどうなのかは分からない、男性恐怖症の彼女は。

私は、人間として欠けている蜜につけ込んでいるんじゃないのだからだろうか？

「……………うえ」

むせる声。

「つぐ、あう……………」

震える手。

それを、止めるためにもう一度コップの破片を手首にやる。

「ッー！」

二度目の自傷についた二つ目の赤い線、そして血でべたつく手の平。

手から滑り落ちた鋭利な破片の破砕音に、視界に映るその非日常的な光景が現実だと思ひ知らされる。

鋭い痛みと痒みに思考は停止した。

そうだ、リセットとしろ。今必要なのは落ち込む事ではなくて事件の推理だ。

血で滑った手ではポストイットは使えない。ペン共々放り捨て、ソファーに貼られた全てを払い除けた。

もう一度始めの始めから考えてみよう。

さつきと同じ推理素材だけでは同じ結果になるだけ。別の要素が要る。

加えるとするれば、動機的前提としてあったはずの、白桃シロップ説が真相と考えるに至った経緯だろう。

裁判員制度が五年という月日に関係してくるのなら、『今になって(タイミング)』については考えなくてもいい。問題はあくまで『どうやって』かだ。

『犯人には見えない』。広一君の弁護人だった道元さん、あるいは悠志君が言った言葉を素直に受け止めるのなら、客観的に自らを見るように努めてきた私は、客観的に見過ぎて自分達がどう映っているのかを逸していたのかもしれない。

となると尚の事、何かしらそれを覆すほどのきっかけがあったと考えるべきなのだろうか？

五年前の十月三十一日。ハート事件、魔のハロウィン。すでに擦り切れて記憶が曖昧だけれど、再びあの時を振り返ろう。テールに載っていた園川中の卒業アルバムを引き寄せる。

三年生のクラス割で載っている顔写真から二年時の顔ぶれを拾い上げながら、巻末近くに添えられた文集へ。2 1、それがあの事件の日々を過ごした私達のクラス。

広一君はまだクラスの中心で、蜜がひたすら学校生活を寝て過ごし、私は両親との仲が冷えていた頃。周りには弟に向かって愛を叫ぶシヨタ女を筆頭に、ロクでもない最高な連中がいた。

蘇り始めた記憶に集中すべくアルバムを置いて目を閉じる。

ハート事件は九月と十月。夏休みが明けてダラダラと一ヶ月が過ぎた辺り。

あれは私が蜜に想いを伝えた後で、「女装して出直しなさい」和樹君の告白の後でもあったはずだ。それで彼が引き籠って、広一君が見舞いに行つてほしいと頼んできたのだから、それは間違いない。その後は大した事は起こらず、九月二十一日に子猫を隠し飼っていた美々ちゃんが殺される事で事件は始まった。

被害者は西浅中学生。その当初は、近場での殺人に少なからず衝撃を受けたとはいえ、クラスでの話の肥やしになる程度でのシヨックでしかなく、十月十一日に第二の被害者が出るまで事件自体が忘れかけられ、目下大衆の興味は被害者ではなく子猫に向けられていた。

またも西浅中。ネットに挙げられた犯行手口をクラスの男子が噂していたのを聞いてケータイを開いた覚えがある。その頃は私も単なる興味でその事件を傍観していた。

十月十八日、園川中学生が被害者になり、西浅中女兒連続殺人事件は浅越市女兒連続殺人事件と認識が改められ、どれほど近くで起きていようと他人事のもりだった我が校の我がクラスメートも笑えなくなる。開かれた集会の帰り、雰囲気はお通夜。誰もが口を閉ざし、これからどうなるのか、あるいはどうするのかを、完全に非日常と変わってしまった親同伴の帰り道に考えていた事だろう。

殺害現場がトイレだった第四の殺人、報道と混乱のピーク。そして、問題の三十一日がやってきた。赤い白昼夢の始まりを告げる第五の殺人。

思い出すのは思いの外赤く染まったアスファルトと、ここ数日の集団登校で知り合った朋子ちゃんが絶命しているというやけに現実味を欠いた感覚。

「朋子ちゃん遅いね」

彼女の友達だった裕子ちゃんの台詞に、彼女の登校経路の曲がり道を覗いた私は赤に沈む藍の制服を捉え、ただ息すら忘れてそれに近づいた。それが本当に朋子ちゃん、本当に死んでいて、本当に殺されているのか。目の前に見える光景が現実なのかそれすらあやふやで、心と身体とが離れてしまって感覚も感情も滲んでるような気すらした。胸を押さえながらしゃがみ込んで、その現実を受け止めた私が立ち上がった時、それは後ろからやってきた。

「う、あ」

嘘、と言おうとして失敗したらしい声、駆ける足音に振りかえれ

ば、裕子ちゃん。

「うとうああああ！ 朋……ちゃん！ 朋子ちゃあああああ！」

駆け寄ろうとする彼女を迎え撃って、私は彼女の目を咄嗟に右手で塞いだ。それでも首を振って身体を前へ前へ押し出そうする彼女の足を、強引に折り曲げて地面に座り込ませる。

胸に彼女の顔を押しつけ、今度こそ叫んだ。

「先生！ 早く！」

必死の抵抗に私の身体はそう持たない。朋子ちゃんの親友らしきこの子が彼女の死体を直視する前に、早く来てと助けを乞う。向かってくる駆け音に怒鳴り声。それらをかき消えんばかりの嗚咽と悲鳴とを私は肩越しに聞き続けた。

シヨツクを受けた生徒達をそのままにしておくわけもいかず、警察と学校と朋子ちゃんの保護者に連絡した後、担当の教師は私達を学校まで連れていき、後で聴取がある事を私に告げた後、疲れきった顔をして去っていった。

新たに入ったその情報にクラスが呆然となる中、私は泣いて崩れそうになっていた彼女をより近いクラスメートに引き渡した。それから鼻水や涙でぐちゃぐちゃになったブレザーを伸ばして、酷く乾いた喉を潤そうと私は自販機に向かったのだった。

苺ミルクを購入してクラスに帰ってみれば蜜や広一君も登校していて、他の同級生が登校するのを待っていた。教室を見渡せば来ているのはだいたい三分の一くらい。まだまだ登校完了まで時間がありそうだ。蜜らの居るグループに入れてもらうと、話している内容はやはりどうか今朝の件だった。

「ああ、白藤。ジューズ？ 勝手に教室から出るのは感心しないぞ」
そう言ってくる広一君に「勘弁してよ結構疲れてるんだから」と返して、刺したストローを啜える。甘ったるい液体に口内が満たされた。

「はあ、気を張るのは疲れるわよね。……あの子は？」

「早瀬が保健室に連れていった。親御さんがもうすぐ来るってさ。」

ブレザー、大丈夫か？」

「ん？ ああ、別にいいよ。気にしない」

「白桃はそういうところ男らしいよな」

と実がいつてくれるが、その言葉は彼女にこそ……いや、弟の前ではその限りではないか。

「神経が図太いだけよ。大雑把なの」

「だったら疲れもしないだろ？」

にやにやとやらしい顔で言われて、さっき言った自分の台詞を思い返した。あーはいはい参りました。両手を上げて降参の意を表す。確かに図太くはなかったか。

手を下してストローの先を口で遊ばせていると、蜜がじつと紙パツクを見つめていた。

「いる？」

訊くと、彼女は大げさに首を振った。

「んーん」

そんな彼女の様子に癒されつつ、飲み干してしまおうと残りを吸い出したタイミングで彼女は続けて呟いた。

「気になっただけ。牛乳に血が混ざったら苺ミルクみたいな色になるのかなって」

嚙下する前だった苺ミルクは、その一言で嘔き出されて正面に居た広一君に降りかかった。

「うわっ！」

「つば、ごめん！ ちよつ、大丈夫？」

慌ててブレザーの涙やらを拭いたまま、畳まずにポケットに押し込んでいたハンカチを取り出す。水滴を落とすように拭いて、ブレザーの中にも手を突っ込んだ。

「な、中に入ってない？」

「いやいや大丈夫だって！ くすぐったいから止めてくれ！」

酷く拒絶されてハンカチをポケットに戻した。本人が大丈夫というのなら良いのだけれど、乾いた時に粘つかないか不安だ。

「全く、シロップもいきなり変な事言わない！俺らだからいいけど、他で言ったら怒られるぞ？」

実に咎められて蜜が素直に謝った辺りで、私はベタつく手を洗いに彼女達から離れた。

蜜の台詞から跳ね上がりっぱなしだった心臓の鼓動が元通りに戻る頃、お通夜なりに賑わい出した教室に校内放送が流れた。体育館で集会、各自担任教師に従って行動する事。そうして教師の先導で体育館に着いた私は、舞台上の教壇に第三の被害者が出た際に置かれた花瓶の花が、大分萎びてしまっているのを見つけた。やがてその花が枯れ果てる時分には事件についても、今感じているこの感情すらも忘れ去るのだらうとそんな事を思う最中、啜り声を聞いて隣に座る早瀬さんが泣いているのに気がつき、彼女にハンカチを渡そうとして、布地に付いた赤い染みに手は硬直した。

「え……？　だつて、え？　自分の服を拭いた時には……………」
まさ、か」

立ち上がって確認するも、広一君も蜜も居ない。その事実に駆けだして体育館を後にした私を、後ろから誰かが追う足音と引き留める声が聞こえる。それらを無視して目指すのは21の教室。中年教師と大差をつけてスライドドアを引つ掴んだ私の目に飛び込んできたのは、今朝以上に赤い世界だった。

喧噪の中、視界が何度も回っては、身体が生温い感触に浸る事数十秒、身体を血だらけにしながら彼と組み合っていた私を引き剥がす教師の腕。広一君の否定と私達を貶す台詞を聞きながら私と彼は取り押さえられた。

その後、広一君とは別の部屋に隔離されて蜜と二人で教師に話を訊かれ、さらにその後やってきた刑事に引き続き聴取された。

そうだ。そうしている内に外から別の刑事が入ってきて、広一君の主張を考慮して大搜索をする旨を伝えてきたのだ。

ほぼ強制の荷物の科捜研送りに同意させられて、それどころかの全校生徒の荷物検査という大搜索の開始。後で聞かされた事だけ

ど、隔離された広一君や私と蜜を除いた生徒には、体育館で『犯人逮捕とそれに伴つての捜査』という名目で合意を取つたらしい。

生徒一人一人の荷物を本人立ち会いの下、筆箱の中から絵の具や書道セット、ロッカーの辞書の中まで開けられて調べられたという。クラスずつ行つたその検査は膨大な時間をかけて終了し、その間に行われた校舎周辺の捜索でも目ぼしい物は見つけれず、広一君は正式に逮捕という形になった。

その時点でやっと解放された私と蜜はクラスメートと合流してその様子を知らされ辟易、それだけでも勘弁なのに、犯人である広一君はともかく、私達まで拘束されての捜査に突つ込まれて事情を話さざるを得なくなり……そう、それからアレだ。

ついに帰るといふ段階になって、刑事の一人が私と蜜に言ったのだ。

「これで誤魔化せた思ふなよ」

吐き捨てるようなその言葉に反応したのは実^みで、いきなり座つていた机の上から降りると、そいつの腹に重いの一発。呻く彼に「根拠薄弱なためえの妄言を無責任に吐いてんじゃねえよ」とドスの利いた声で吐き捨てた。あんたの方が男らしいじゃないかと思つたのをよく覚えてる。

何にせよ、その刑事……今はもう警察には居ないけれど、そいつの台詞が白桃シロップ説という疑惑を象徴しているのは確かだろう。広一君のシャツに染み込んでいた血にしても、現行犯逮捕時の主張にしても筋の通つた説ではあつた。少なくとも羽虫の見込み捜査よりは何倍かマシな意見であつた事は間違いない。

そしてそこで問題になつてくるのは、その説において広一君は罪をなすりつけられた被害者で私達が加害者という関係が成り立つ事だ。人間、加害者より被害者を擁護したくなるのが世の理で、例えば彼の主張にそれを裏付ける証拠がなかるうが、その元刑事のような事を思つたり無責任にも実際口に出す人物は出てくる。

それ故の名探偵だつただけで、それが自意識過剰な反応だつた

のだろうか？

実がしてくれた行動を思い出してみると、道元さんや悠志君の台詞を一概に個人の心証と切り捨てるべきとは言えない。

私は白桃シロップ説が広一君や被害者の関係者に伝わった結果が今回の事件と考えていた。が、思えば大搜索を直に体験した生徒はその徹底した搜索ぶり何より知っているはずだ。悪魔の証明。犯人かどうかは証拠品一つで証明できても、犯人でないかは幾ら証拠が見つからなくても証明できない。見落としがあつたかもしれないという疑惑は常に付きまとう。けれどそれは実際にその様子を知らない第三者だからこそその意見なのだろうか？

何時間も拘束されたり、自分の荷物をひっくり返されたりした学生達が白桃シロップ説に傾倒するのは無理があるのかもしれない。

そう仮定するのならもう一つ引つかかる事がある。

そんな彼らが誰かにその事を訊かれたら、まず自分が体験した荷物検査について話のではないだろうか？ 良くはないが自分の経験した非現実染みた体験談だ。嬉々として話すだろう事は想像に難くない。ただ、その内容は自分達がどんな検査をされたかに始終するという事も見当がつく。さぞ大仰に語ってくれるだろうし、その徹底ぶりを証言してくれるだろう。それが例え遺族に渡ったところで、プラスになってもマイナスにはならないと考えるべきだったのか。

情報の伝達というモノに良いイメージがないだけに、その考えはなかつたが、そう考えれば犯人は少なくともクラスメートや他の生徒から手に入れた情報から白桃シロップ説に至ったとは考えにくい。それに、何かしら情報を手に入れたとしても、その情報が信じるに足るといふ確信はどこから来たのかというのも問題点の一つだろう。特に被害者側の場合はよっぽどの信憑性がなければきっかけになり得ない。

それが説明できなければ推理として成り立たない。

情報とその信憑性。その二つを満たす何かがあつた？のかあるいは？渡った？のか、ともかく犯人が手にした。それが二番煎じ事

件の動機の根底にあるべき要素だ。

モノが何かはとりあえず置いておこう。

とりあえず情報源だ。学校内の生徒からではないとすると、ハロウインの騒動を犯人が知ったのはマスコミや紙面の情報からという事になる。

ソファアールから立ちあがって、当時のスクラップ帳を床から拾い上げた。

新聞社や出版社ごとに分けてハート事件の記事を切り抜いてあるそれは、私ではなく蜜の仕事だ。綺麗に整理された資料に蜜の存在が見え隠れして胸が痛い。

固まりつつある血がボロボロと記事にかかるのを鬱陶しく思いながら、ページを捲っていく。

読み摘まんでいくのは犯人逮捕直後から数日の間に載せられた記事。『女児連続殺人犯逮捕。犯人は中学二年生』、『現行犯逮捕で容疑を否認』。この新聞社はわざわざ図まで載せて白桃シロップ説を解説している。『浅越市連続通り魔ついに逮捕』、『容疑否認と大搜索に一つの説』、『大搜索で全校生徒五時間拘束』……、どれもこれも書き方に多少の違いがあれど、書いてある事は同じだ。要は現行犯で広一君逮捕、警察大搜索、何故捜査されたのかという流れで記事が書かれている。そりゃ、十三歳から十五歳の学生を五時間も拘束すれば説明は免れないだろうし、それを説明するには広一君の主張を話す必要が出てくるのだから、そうなって当然ではあるのだけれど、これだけ遠まわしとはいえ自分達の疑惑を書かれればマスコミアレルギーにもなるというものだ。

五年前、嫌々ながらも記事だけは集め続けたあの日々を思い出すと今度は胃が痛む。

それを誤魔化すようにページを更に捲ると、一ヶ所空白になっているスペースを見つけた。手で触れば糊で貼った後が残っている。扱いやすいように剥がせるタイプのスティックのりで接着してあったので、剥がれる事自体はおかしくはないのだけれど、ならこの

記事は……と考えるその答えを思い出した。

確かコルクボードに留めて、それから一度手にとってそのまま床に。視線をボードから散らかった床を移すとそれらしい新聞記事が埋まりかけているのを見つけた。

拾いあげて見出しを確認する。『警察、大搜索』、そうこれだ。

けどまあ、内容は他の記事とあまり変わり映えしない。『現行犯で逮捕された園川中学校の男児（十四）が無実を主張、警察が全校生徒に対して荷物検査を行った事がわかった。これは、男児が犯行を行ったのは逮捕時同じ教室にいた女児（十四）と初めに教室に駆けつけた女児（十四）の二人であると主張したもので……』

……女、児？

「ッ！」

弾かれたように脇に挟んだスクラップを開く。乱暴に捲ってさつき自分が読んだ記事を読み直した。

……！

それを放り捨て、四つん這いになりながら今度は床の用紙の下に埋まっているだろうDVDディスクを探し出す。欲しいのはちょうど記事と同じ頃のマスコミ報道。片っ端からひっくり返して目当ての物を探し当てると、震える手でポータブルレコーダーに突っ込んで再生した。

明かりが消えたままの暗い部屋に、液晶テレビの光が青みを帯びて浮かび上がった。

当時の女子アナ、ハート事件の続報を知らせるテロップ、懐かしき我が中学校の校門が映り、映像を交えながらのアナウンス。

『浅越市の女児連続殺人事件の捜査で、警察が犯人逮捕後大がかりな捜索を行っていた件についての続報です。現行犯逮捕に関わらず生徒を巻き込んで行われた異例の大捜索に疑問を投げかける声もありましたが、その理由が明らかになりました。警察の発表によりまずと、逮捕された男子生徒は容疑を否認、犯人は逮捕の際に同じ教室に居た女子と』

停止。それ以上の情報は要らない。

もう一度、スクラップを引き寄せれば開いたままになったページの記事が目に入る。

『容疑者の主張はこうだ。現行犯逮捕時教室には同級生である女兒Aと、既に死亡していた女兒Bが居た事が確認されているが、その女兒Aこそが女兒Bを殺した犯人であるというもので』

女兒、女子、女兒……名前は出ていない！

そうだ、考えれば分かる事じゃないか。犯人の名前は伏せられて被害者の名前は公表される。未成年の将来を守るといふ建前がその差だというなら、犯人でもなく被害者でもない、容疑をかけられただけの私達の名前が出されるわけがない！

でも、それじゃあ、犯人はどこから入手した事になる？

同級生が知らない大人に件の女兒が誰かなんて訊かれていれば、その事が私の耳に入るはずだ。

園川中学に知り合いが居る他校の生徒？ もしくは園川中学の保護者から？

いや、それにしたって噂の内容はおそらく事件の詳細であって、私達の名前が興味の対象になるかは怪しいものだ。それが口伝い、あるいはメールの文面だとしても、悠志君の名前を私が一日経たない内にさっぱり忘れていたように、興味のない名前ほど覚えにくいものはないし、噂としてハート事件や白桃シロップ説が格好の標的であったとしても、大捜索に巻き込まれ、疑われるという立場を疑似体験した生徒がその渦中に居る私達の名前を出したりするだろうか？ それにさっきも考えた事でもあるけれど、学生に事件について訊けば大捜索の様子もまた聞かされるだろう。疑いのきっかけになるのかも怪しい。

かなり他人の倫理観や道徳心に頼った考えだが、今までの何もかもが懐疑的だった時よりは標的は絞れている。

だとすると、犯人は私達の情報を知っていないながら、大捜索とは縁遠かった人物という事になる。それはつまり、私達の事を知るため

には近い立場であるという条件が要て、白桃シロップ説を信じるには大捜索について内情をよく知らない必要があるという事だ。

矛盾している。が、条件としてはこれ以上ないほど限定されているし、何よりそんな例外的な条件を満たす存在に心当たりがあった。つい先ほどまでそれに踊らされ続けたが故の あんまりにも実感の籠った心当たりが。

誰よりこの事件を知っているくせに、捜査の様子を知れなかった人物。

知らないが故にそれに踊らされた人物 そう、私だ。

そして、私達の事を当然知っていて、捜索中隔離されていた人間はもう一人居る。

犯人、内山広一。

無論確実に死んでいる彼が直接的な犯人というのはあり得ないが、もし彼が警察やマスコミに対して行ったように、個人に対しても無実を訴えていたとするのなら、私達を知った白桃シロップ説信者ができあがる。

情報の発信源が彼だとして、問題になってくるのは遺族すら居ない彼が誰にそれをやったかという事と、誰が彼の言葉に耳を傾けるのかという事だ。

彼の行動範囲を思い出せ。彼の人間関係を思い出せ。彼の台詞を思い出せ。何か見落としていないか？ 本当に彼の周辺は全て洗い尽したのか？ 彼の遺族でなくても恋仲でなくていい、彼の主張を真に受ける人物なら、

「……………あ」

その答えに辿りついて、立ち上がるうとした瞬間、意思に反して足から力が抜けた。

ゴトンと、両手に抱えたレコーダーが落ちて、その上に覆いかぶさるように崩れ落ちた。直角に立ち上がったままの画面部分で腹を打ちつけて、響く鋭い痛みにお腹を押さえる。顔から滲む脂汗が顔に床の用紙をへばり付かせ始めた頃になって、まだ続く痛みが、打

ちつけた時のモノとは別の所から来ている事に気がついた。

「あう、ぐう」

まさか、という嫌な予感。これと似た激痛を記憶の果てに追いやった覚えがある。

右手を床に押し付けて身体を浮かそうとするも力は入らず、両足は棒になったまま。お腹を押さえていた左手は少し上へと押さえる場所を変えた。

「がつ、痛つ、いたい」

もがいた右手が意味もなく用紙を握り潰す。顔に限らず身体中から滝のように流れ出した汗が服と用紙を引っつかせるせいで、動く事すらままならない。

ケータイをどこに置いたのか、方向感覚すらなくなりかけた思考から探り出そうとしても、それ以上にこの状況に対する焦りにうまく頭が働かない。

まさかまさかまさか、あの時と同じ……？

もう時間のないこの状況で？

「いたい……よ、う」

思えば、ここ一ヶ月妙に身体が熱く調子も悪かった。ずっと緊張しっぱなしでストレスが溜まる日々が続いていた。

そこに来ての蜜の拘束。

ピークに達した精神負担は胃に。

ただでさえ一度病んでいるだけに、二度目はよりなり易い……。

つまり、つまりは……っ、

「胃穿つ……っ」

全くの無にあつた思考の海に今自分が置かれている状況が浮かび上がって、一気に冴えた脳は私の身体を跳ね起きさせた。

辺りを見渡す必要もなく、現在地が近所の救急病院で、自分が緊

蜜の居ない私に対するその見せつけに、思いの外胸がキリキリ痛む。

「今は看護師よ……」

悔し紛れにしようもない難癖をつけたら、「馬鹿野郎！」と彼女は右手を握りしめ立ち上がった。

「看護師じゃ女装にならないでしょーが？」

マジで帰れ、いや土に還れ。ただでさえ真夜中の静まり返った病院でなんて事叫ぶんだこの娘。私の視線を受けて、彼女は腕を下ろし席にかけ直した。

「ごほん。仕切り直しとばかりにわざとらしく咳払いをして、彼女は言った。

「これは罰よ」

『これ』というのはもちろん目の前でいちゃつかれた事だろう。

誤魔化しにしか思えない台詞に、茶化そうと開きかけた私の口が声を発する前に、

「そんなにボロボロになってすら、私達を頼ってくれなかった罰」
「……」

続けて吐き出されたその言葉に、閉じる事を余儀なくされた。

「わざわざそこまでぎりぎりの状況で犯人探しなんてしなくたって、私達を頼ってくればよかったのに」彼女は拗ねたように頬を膨らませた。「犯人役ぐらいやってあげるわよ？」

その魅惑の提案に私はゆっくりと上半身を持ち上げた。見上げる、あるいは見下ろされるといふ状態は心を強く保ちにくい。彼女が何を思っただけでそう言ったのかは分からないけれど、その甘言に愚直に耳を貸すのが危険な事はよく分かっている。化け物相手に対等に話すためにも視線の高さを合わせた。

けれど、

「ははっ……」

同様に彼女ならそれを、事もなしにやってしまった事もよく知っているだけに、返す笑いは嫌に乾いたモノになった。

犯人役。普通に考えれば身代わりを買って出るといふ、聖人君子のような提案に思えるけれど、自己犠牲なんてとんでもない。幽霊が幽霊と呼ばれる所以を忘れてはいけない。

「あんななら、あんたの力なら……そこら辺の人間に乗り移って自供するだけでいいものね」

幽体離脱と呼ばれる彼女の提案は、つまりそういう事だ。

否、そうでなくても彼女にはハート事件ぐらい再現できるだろう。自分で（、、）、（）心臓をくり抜いて、自分で（、、）、（）四肢を切断して……幽霊に遺留品なんてあるわけがない。いや、もっと単純に、ハート事件の死体が欲しいというのなら、遙ちゃんに限っては泥水から死者どころか生者すら造り出せる。

人外、朝間綾香。論外、月見里遙。

人の殻を破った化け物ども。

けれど彼女は私の予想の斜め上をいく。

「やーねえ。そんな事しなくたって、乗り移って人前で七人目の殺人を犯した方が確実じゃない、ね？」

確かにその通り。誰かに自供させたり、もしくは彼女に七人目を呪い殺してもらうより、その方が確実だ。

けど、それは私にとっての利点であつて、実際それをやる彼女にとって自供と殺人では手間が違う。どれだけ彼女に倫理感が欠けていようと、そんな提案を自分からする辺り、善意でそれを言っているだろう。そう思うとぞっとした。

「……私達の関係は持ちつ持たれつだったはずよ。ギブ・アンド・テイク、あんたは私にお金を、私はあんたに暇潰しを。そりゃあり難い話だけど、私にそんな協力を頼む代価はないし、あんたにとっては何もないはずのこの状況をお終いにする理由がないじゃない」

私の台詞に彼女は一瞬意外そうな顔をしたけれど、すぐにいつもの人を食い物にする笑みに戻った。

「そうね。でも、だから言ってるのよ？ あなたは私を悪魔のように言うけれど、私はごーまんでやさしー悪魔だから契約上施行でき

る権利を使わないでいるあなたに、それを指摘してあげてるの」
なるほど、確かに傲慢だ。

それに、と彼女は桃をもう一つ取り出して、今度はそのままかぶりつきながら告白した。

「実を言えば、私もう満足しちゃったのよ。……何よ、マラリア蚊つて。何警察署で愛を叫んでるの？ こっちが赤面しちゃったわ」
病院で女装を叫んだ人物に言われたくはない。そんな私の心中などお構いなしに彼女は妙に嬉しそうだ。

「私は傍観者じゃないし、あなた達は今度も楽しませてくれそうなもの。ここで終わらせてしまうのつまらないじゃない」

そう言っつて悪魔は手招いた。その手には菌形がついた桃が握られている。

「貴女がこの手を取ってくれば、私がシロップちゃんを取り返してあげる」

「はっ」

それはあまりにも甘い果実だった。

倫理や道徳なんてどうでもいい。名探偵だからって、正攻法に拘る必要はない。

幽霊に言われなくてもその発想は初めからあった。

羽虫に言っつた通り、蜜が逮捕されている状況下で次の殺人さえ起こっつてしまえば全てが解決してしまうなんて事は事件が始まった最初から分かっつていた。

別に彼女のような力を持っていなくても、私にだっつてそれはできる事。

それを幽霊が、完璧にやっつてくれるというのならこれ以上の事はない。

それも分かっつてる。

けれど口を突いて出たのは、どうでもいいような下らない言葉だった。

「探偵が霊能力者に頼っつたら、あんたの好きな物語っつてやっつがぶち

壊れるわよ」

「あら、確かにそうだけど、それは私の事情であってあなたには関係ない事だし、そんな余裕ないんじゃない？」

全く持つておっしゃる通り。中学二年生相手にこの様だ。我ながら年上の権力者を相手取った人間と同一人物とは思えない。

「ただそれは、彼女が私の痛い所を突いているからで、

「あなたが私の力を借りたくないのはね、あなたが蜜に尽くしたいから、彼女を救う役を取られたくないからよ」

「……」

それを言われてしまえば、もはや私は閉口するしかない。

結局はそこだ。

蜜が本当に大切ならば、彼女が望まなくても、彼女の気持ちを踏み躪つても、力及ばない私のエゴなんて溝とびに捨てて、何を失つても手段を選ばずに行動すべきなのだ。

彼女を失う辛さは散々味わったくせに、『私が』というその一点に拘って、幽霊の提案に頷けない。

それは私の我が儘だ。醜い、我が儘。

「そしてあなたが男性に辛辣なのは、シロップちゃんを取られたくないから。あなたはシロップちゃんを独占し続けたいのよ。……羽虫との対決で言いかけた言葉覚えてる？」自己嫌悪で歪んだ私の顔を正面から見据えて、それでも彼女は追及を緩めない。「もし」

「もし、患って、いなければ」

彼女の言葉を受けて、私は痺れたようにわなわなと、うまく動かせなくなっていた唇を動かした。

「もし、そうじゃなかったら……蜜は男の人と結ばれていたのかも知らない」

それは自分のモノとは思えないほど、平坦で感情の籠っていない声。

「あなたは同性愛者だけど、シロップちゃんは違うものね」

だからあなたはずっと払拭できずにいたのでしょうか？

言外にそう囁く彼女は、口に出しても囁いた。

「そんな彼女が自分と一緒に居るのは何故だろう？ 自分違って彼女は私から得ているモノがあるのだろうか？」

そう、そして、

「……蜜は私を好いてくれているのだろうか……？」

さつきとは打って変わって、泣きそうな声色。私はこんなにも矮小で、貧弱な人間なのかと思い知らされる。

顔を伏した私に幽霊の溜息がかかる。その 彼女が近づいた気配に、顔を上げた瞬間、思いつきり左頬を叩たたかれた。

容赦ない、一撃だった。

限度というモノまるで知らない全力の一発に響いた快音が消える頃、頬の熱さがジンジンとした痛みに変わる。

「今のはシロップちゃんが乗り移ったのよ」

「取り憑くのは、あんたの十八番でしょうよ……」

「まあね」

彼女は舌を出しておどけてみせた。けれどすぐに彼女らしくない真面目な顔に戻る。

「でも、彼女の友達として今の台詞は頂けない。あの子、あなたの事大好きなのよ？ 唯一無二あなただけ あなた以外に誰が彼女のそばに居てやれるっていうの？」

彼女はそんな臭い台詞をまっすぐ、臆する事なく言った。

「あはは……はは、そうね、そうよ。その役だけは誰にも渡さない」

「そうそう、そうこなくっちゃ。人間素直が一番よね。さっきのギブ・アンド・テイクの話もそうだけどさ。あなた考えすぎなのよ。

私に言わせれば、シロップちゃんがどう思ってるかなんて、そんなの無駄な悩みなのに。今回の一件の間だけでもシロップちゃんがあるたの事を心の底から愛していて欲しがっているのは分かり過ぎるぐらいじゃない」

振りかえればその通り。蜜は彼女なりの方法で私にそれを伝えようとしていた。私はそれを、事件解決ばかり気にして見失っていた

んだ。

「でしょう?」と同意を求める幽霊。それに私は応えた。

「ええ、痛いぐらいに」

目尻に溜まった涙が流れるのを感じる程度には頬の痛みも引いて、麻痺していた表情も和らいで笑みを作れたのを感じる。

「それが分かったんならもういいんじゃない? こんな時ぐらい私達の手を借りても」

その言葉が今は、蜜の友人の台詞として受け取れた。

けれど、それでも私は首を横に振る。

「いや、もう犯人の当たりはついてるの」

「あら残念」

「蜜の好意に見合った行為で報いる事　それが私のポリシーよ。

蜜を助け出すのは私の役目。……だけど、私だけでは間に合わない」

それを埋め合わせてほしい。だから、

「だから……手伝って」

彼女は私の頼みに頷いた。

「幽霊船に乗ったつもりで任せなさい」

「ははっ、頼もしい限りね」

だってそうでしょ?

少なくともこれ以上沈む事はないんだから。

9、罪の扉 鐘の音は誰がために

まだ朝と言うにも早い時間帯に病院を抜け出した私は、朝焼けとまだ残っていた夜風に満たされた中を歩いていた。目立つ入院着を即刻、駅の『その他のゴミ』へと押し込んだ私の今の服装は、黒いワンピースに黒い帽子 帽子は麦わらではなく深めのニット帽である所や、彼女との身長差で太腿の露出度が高い事などから、彼女が着るのでは印象が随分違ってしまったているけれど そう、蜜のモノだった。数年前から偽名で借りている貸し倉庫にそれしかなかったからなのだが、今の私の心情にはなかなか似合った衣飾だろう。

幽霊に頼んで得た情報が書かれた紙を自販機横のペットボトル用のゴミ箱へ捨てて、スポーツバックからケータイを取り出し、切っていた電源を入れ直す。アドレス帳の『警察関係者』にカテゴリされているのは、『桜花可奈』『梶川総次郎』そして『新米池田悠志』。すでにこの世に居ない彼を除いた二人の名前をしばらく眺めて、梶川さんへと通電した。

数コール後、繋がったケータイから発せられたのは彼の大声だった。

「今どこに居るんだ？ 病院を抜け出すなんて……何度もかけ直したんだぞ！ 無茶をし過ぎだ、いいか早く戻っ」

「梶川さん、犯人が分かりました」

私はそんな彼の心からの心配をうったえ遮って要件を切り出した。

「時間もないし面倒臭いのでさっさと説明しますから、テキストに聞き流してください。えーと、そうですね。……この事件が誰がやったか（フーダニット）というのは前に話しましたよね？ ハート事件の二番煎じ故に、ハート事件や白桃シロップ説と切り離して考えるのは難しい。まあ警察の特捜はそれで私達を疑ってるわけですが、それに関して私達が幾ら反論しても仕様が無い話なんで置いて

おきます。初めて私がこの事件に遭遇したのは二人目の殺人だったわけですが、一人目が会う約束した人物だと知って、私はまず自分が狙われていると思いました。白桃シロップ説に則って考えれば、私に冤罪をかける動機があるのは広一君側の人間です。それで調べてみたら彼の祖母はすでに亡くなっていて、近しい人間も見当たらない。候補者がいないのでは話になりませんから、次に私は被害者遺族の可能性を探ってみました。けれどそもそも被害者側からすれば最も憎いのは蜜ですから、私の周りで殺人を起こす理由がないですよね。事件の状況がそぐわないんじゃないかとあとうしようもない。そう考えると、そもそも凶器が見つかっていないこの連続殺人は冤罪を目的にしているのかすら判断できない事に気がつきました。広一君側だとしても犯人候補も拳がらないし、冤罪が目的だと断定もできない。被害者側なら目的自体が分からない……。だから、せめて事件が終わって犯人の目的がはっきりしない限り推理はできないと思ってました。ところが蜜が捕まって事件が決着しても、推理材料が揃わない事は変わらなかつたんです。最初狙いは蜜だと思った。警察署でも言いましたけど、連続殺人は永山基準と裁判員制度を利用して蜜を死刑にするためだと。けれど冷静に考えてみれば、その場合犯人は被害者関係者という事になります。さつきも言った通り蜜を殺したいならそんなモノ持ち出さなくても直接殺せばいい。死刑にするために六人殺すなんてナンセンスですよ。それでも犯人は連続殺人というリスクを負ってまで蜜を死罪で殺そうとした。犯人にとって最もベストな復讐がこの状況だとするなら、犯人の狙いは私か私達二人という事になります。それはつまり犯人が広一君側の人間である可能性が高いという事で、結局、最初に否定した結論に戻ってきてしまう。そのせいでマグカップが一つ犠牲になりました

「は？」

「いえ、こつちの話です。……ともあれ、もし広一君の関係者の誰かだと見当がつけば最初からこつちも悩まなかつたわけですからこの

推理は破綻しちゃってます。というか、どれだけ動機から推理したところで、分かるのは広一君側か被害者側かという事だけなのだと、そこでやっと気がつきました。誰か（フーダニット）ではなく何故か（ホワイダニット）がこの事件の主題だった……。梶川さん、ハート事件を経験した刑事として率直な意見を教えてください。白桃シロップ説を聞かされた時どう思いました？」

「そうだな……その内容を聞いて確かに筋は通っていたし一理あるとは思ったが、それで実際花壇の土まで掘り返した結果は何もなし。結局は往生際の悪い犯人の戯言だったんだと……」

「そう、私達の潔白は一応大捜索で証明されてるはずなんですよ。彼が自殺したからこそ白桃シロップ説は信憑性を持ったわけで、それでさらにマスコミに騒がれはしましたけど、それってつまり大捜索の現状をよく知らないからこそでしょう？ 完璧を期した登下校ネットワークが非難されたように、実情を知っていればでない意見なんです。』とにかくどうにかして血を持ち運んだ容器を隠し通す事ができた』という前提があって白桃シロップ説が成り立つわけですから。徹底した捜索がなされた事に疑いを持って初めて白桃シロップ説信じられる。事件の近くに居た人間ほど白桃シロップ説からは遠いんです。白桃シロップ説を信じるためには部外者である必要があります、けれど、実名報道なんてされなかった私達の名前を知るためには関係者である必要がある。何より広一君側にしる被害者側にしるその関係者は事件についてもかなり近い位置にいたはずなんです。広一君の主張を信じたらさう彼の遺族は当然大捜索について粗を探そうと必死だったでしょうし、被害者の関係者は娘を殺した犯人がすでに見つかった状態です。大捜索で私達が白であると分かって、わざわざその結果を疑うかどうか……。だとすれば彼らは最も白桃シロップ説から遠い人間だ。踊らされましたよ。自分達は疑われて当たり前とばかり私は考えて、誰の復讐かという点にばかり目が行っていた。けれど、問題は どうして私達を疑えたかだったんです。今回の事件を起こすに当たって犯人は白桃シロップを信じられ

るほどには大捜索については知らず、けれど私達の名前を知れるほど当事者に近い人間であり、なおかつそれで殺人という手段を取る程度に私達を恨んでいる人物という事になる。ここに犯人の目的から推理した『犯人は広一君側ではないか』という結果を重ねてみれば、被害者側遺族の犯行は難しいという点で二つの推理は一致します。今度はちゃんとより細かい条件がありますし、矛盾した条件故に見落としがあつた可能性も考えられる。そう思って思い出し直してみたんですよ。そしたら、見つかりました。だったら最初っから気づけよって話ですが、こればかりは悩みに悩んだからこそ分かつた答えです。事件の渦中に居た私自身が白桃シロップ説なんていう幻に散々翻弄された一人だったのだと自覚してやっと、答えが見えてきた」

「内山、広一か」

「ええ。あの時の出来事を目の前で見ていたくせに、大捜索の時には隔離されていた彼。白桃シロップ説を唱えた本人。これほど分かり易い答えもないのに、『死人に口なし』なんて自分で言つて自分で騙されました」

「彼が誰かに訴えていた……？」

「内容は『大捜索には穴があつたはずだ』とかそんな感じだつたと思います。手紙か弁護士の道元さん伝いなのかは分かりませんが、大捜索の情報が抜けた事件の概要と白桃シロップ説を本人から聞いた人間が居たとすれば、白桃シロップ説を信じるでしょうね。もちろんその場合、その人物本人は事件の外に居て、かつ現行犯で逮捕された彼の言葉に耳を傾けるほどには、彼の弔い合戦をやるほどには、彼と親密な関係を持つている人間という事になりますが……居たんですよ、そんな人物が。クラスメートとして彼と知り合いで、そうでありながら事件に関わらなかつたという稀有な立ち位置に居て、唯一広一君だけが学校との繋がりだつた故に彼に信頼を寄せていて、そして何より、私から蜜を取り上げたがっているだろう人物」

一息吐いて、私は断言した。

「犯人は南城和樹です。彼しかない」
ですが、と私は続ける。

「彼が犯人という証拠はどこにもない。この推理にしたって私が主張しているだけで根拠があるわけでもないですし、目的を果たした以上彼が動く事はもうないでしょう。蜜が捕まった今、わざわざ捨てるリスクを負わないでしょうから、おそらくホテルで侵入する際に使った従業員服はまだ彼が持っているとは思いますが、私の根拠薄弱な推理では警察は家宅捜索の令状を取ってはくれない」

そこで一拍おいてから、私は話を変えた。ここからが本題だ。

「……ところで梶川さん、シャーロック・ホームズの犯罪歴って知ってますか？」

「何？」

「証拠隠滅に偽証教唆、犯人隠避、窃盗、さらには殺人……そして不法侵入。これが、かの有名な名探偵に伝わる由緒正しいホームズ式解決法です」

「ま、待て！ まさか」

「広一君は引き籠り。事件が終わった以上は外には滅多に出ないでしょうし、私にそれを待つ時間はありません。平和的な解決が図れない以上、残る手段は一つ」

「止めるんだ！ 早まっ」

制止の言葉を最後まで聞かずに通話を切る。ケータイをそのままアスファルトに落として踏みつけた。何度も踏み潰し粉々に砕け散ったのを確認して顔を上げる。

見据える先にあるのは、二件目の殺人現場、そして私にとって今回の事件が始まったボロアパート。容疑者の潜伏先。

警察署や病院からここまで五分はかかる。

大して機嫌がいいわけでもないけれど、鼻歌混じりにスポーツバツクを探る。

取り出したのはスタンガン。

幽霊が言うには五〇〇万ボルトぐらい出るようにちょっと改造してあるらしいけれど、なあと大丈夫、問題ない。

「さて　　ぼつじやくへん解決編の始まりだ」

夏とはいえ、まだ日が始まって間もないこの頃合い、ノースリーブのワンピースでは肌が少し寒い。夕焼けほどではないにしろ、斜に射し込む陽の光に長く伸びる自分の影が、ずり落ちかけていたスポーツバッグを掛け直すのを何ともなしに眺めて、私はアパートの敷地に足を踏み入れた。

赤茶色く錆びた鉄製の螺旋階段、補修跡がむしろボロく見える壁の罅。一ヶ月前と変わらない、寂れた印象。それでも狭い室内に収まりきれずに漏れ出した生活感が、洗濯ばさみやハンガーで吊り下がりが、あるいは鉢から生えている。

軋む階段。もの哀しげにそれが泣くのは間違いなく、私の心境からだろう。

鼻歌は『私とワルツを』を奏で続け、二回目となる二階の廊下、頼りないほど薄い床を踏み締めて204号室の前で立ち止まった。

ここが幽霊に頼んで調べてもらった彼の住居。ドアを開ける必要もなく間取りはすでに分かっている。中央に折りたたみテーブル、左の壁にまずは水槽があつて、その奥にパソコンが、反対側の壁にベッドが、それぞれ設置されているらしい。幽霊が実際に視ただから間違いはないだろう。

心積もりのために瞳を閉じて、部屋の様子をイメージする。

勝負は五分間。失敗は許されない。

長い息と共に迷いも雑念も吐き出して、　　躊躇なく、思い切り蹴りつけた。

響く音色はまるで鐘。

錆びて脆くなっていた蝶番はネジを飛ばして寿命を終わらせ、ドアは部屋の中へと倒れる。

その音と、差し込んだ朝の光に驚いて、振り向いた和樹君と目が合った。

パソコンの前に座るその姿は、記憶の姿と変わらず、細い体躯。大人しく、小さく、内気だった彼は熱帯魚が好きで、よくその話をしてくれた。

「やあ……和樹君」

明かりが点いていない室内、部屋の光源はパソコンの明かりと専用の台に載った水槽の照明だけ。一瞥すれば、六〇センチメートルの水に満たされた箱庭の中、華やかに飾り付けられた水草の間を、熱帯魚が外の世界の事など知りもせずに悠々と泳いでいる。

「お久し振り」

付き合ってください。

サバサバした性格が、その格好良さが好きだからと、そう彼が言ったのはもう五年も前の事になる。

五年　その月日を彼がどう過ごしていたのかも、どう思って過ごしてきたのかも私には分からない。

あるのは彼が引き籠った原因は私であるという事実で、分かるのは私が自分の振る舞いに誰かが傷つく事を想像できないような救いようなない人間であるという結論だけ。

そんな私を好いてくれた人間に、私は自分が言った言葉さえ覚えてはいなかった。「あなた、人を傷つけないよう本当気を付けた方がいいいわよ」……か。幽霊の言う通りだ。

本当、私って奴は罪深くて口クでなしで人でなしで………
それなのに、それでもまだ、蜜だけは失くはないと思っている。

「こ……」

ガタタンと、オフィスチェアを倒して立ち上がった彼は、その手に封筒を持っていた。

握りしめ過ぎて、皺の寄った柄付きの封筒、それを突き出して何か言おうとする彼。

「こ、こ……」

それを遮って、

「いや、何も言わなくても」

私は彼の行動に合わせるようにして手のスタンガンに向けた。扉を蹴り破った時点で、私の行為は触法してる。初めから話し合いなどという選択肢は用意していない。

それに、自分の愚かさはもう嫌というほど理解したから。

悪いのは全部私で、私がもう少し人の心に機敏であればこんな事にはならなかったと理解しているから。

だから、今更、言葉を交わさなくていい。

これで終わりにしよう、何もかも。

ハート事件の二番煎じ、そして告白の二番煎じ。

一度振ってもう一度、私は君を振って蜜を取る。

けれどせめて、あの日々の焼き増しというのなら、今度はちゃんとしよう。

電源が押され、生じた電極の間を駆け抜ける青白い光と威嚇音。

「う、うわあああああああああ！」

交渉不可を知らせる音に、彼は叫びながらキーボード脇に置いてあったマグカップを投げてきた。大振りな投射、軌道は容易く読める。聞こえる陶器の断末魔を背にし、臆することなく前に踏み出した私が距離を詰めるより先に、彼の手はテーブルの皿に乗っていたフォークを掴んだ。

腰が引けたまま、突きつけられる食器に威嚇効果などありはしない。

左肩に掛けたスポーツバックをわざと肩滑りさせてベルトを掴むと、そのまま左手で振るう。震える手、ロクに力が入らぬままに掴まれたフォークは弾き飛んだ。

けれど、次の一手、突き出したスタンガンをすり抜けて伸ばされた彼の両手に、手首が掴まれた。

舌打ち。

鞆で殴るが、近すぎて肩掛けの長いベルトを介してでは力がうま

く伝わらない。手段変更、鞆の中のモノを引つ掴んで顔を殴りつける。わざわざ物で殴る必要がないような猛殴打を顔面に食らわせ、文字通り必死の彼を何とか離させたものの、執念深く掴まれていたスタンガンが床に落ちてしまった。

彼に拾わせるわけにはいかない。

散々顔を殴ったソレを投げつけて目を晦ましにし、しゃがもうとした私の腰に今度は抱きついてきた。細いとはいえ、男性の体重を掛けられて耐えられるほど私の足腰は強くない。

堪らず背中から倒れる、その前に、横にあつた水槽の淵に手が届いた。

水と土とで重量を持った水槽と言えど、二人分の体重を支えきれず、倒れ込む私の手に引かれ台を滑った箱庭は、先に倒れ馬乗りになった彼とされた私に、上から大量の水を撒き散らした。

ガラスの割れる音、そして降りかかる破片。砂利が雪崩^{なだ}れてその後続く。

濡れて滑つてもがいて、破片に身を切りながら身をよじる。

更なる激痛。思えばお腹の手術創はまだ傷だったか。

湿った土の匂い。跳ねるエンゼルフィッシュに撥ねる水滴。

命が瑞々しく跳ね回る騒がしさ。

ガンガンという外からの音もがそれに混じる。

全てが、目まぐるしい。

彼の両手が私の首を捉え、締まる気道と息苦しさに顔が歪む。

しっかりと嵌った手を外すのは不可能と理解して、私は右手を床に転がるスタンガンに伸ばした。

「あ、う……が、いぎ」

端が黒ずみ始めた視界と、匂いも痛みも苦しみさえもが混沌とするぐちゃぐちゃの思考の中、指が物に触れる感覚。

外れて部屋の中へ倒れ込んだ鉄の戸を踏む足音と、手が握りしめる固い感触。

「白藤さん……」

そんな、野太い声が聞こえるのと、私の手が彼の胸へ伸びていくのとはほぼ同時。

ガ
ジュガツガガツガガガガ、ガ、ガ、ガ、ガ、ガガツガガガガガ、ガ

酷く耳障りな音を聞いたのを最後に、私の意識は再び暗闇へと落ちていった。

…………… 南城和樹は死んだ。

無断で病院を抜け出し、身体中に裂傷を作った上に、不衛生な水を被り、拳句は手術創を開くという快拳を成し遂げ、病室に監禁される事になった私が、その情報を知ったのは意識を飛ばして数日後、可奈さんからだった。

「水を被ってびちょびちょのところ、市販されている物の五倍は威力の高い電流を心臓に流されれば、まあそうなるわよね」

前は幽霊が座っていた椅子に腰かけた彼女は悠志君の死と同様、大して何にも感じてない風にそう言っ、風船ガムを膨らませてみせた。膨らませる事ができない私としては羨ましくはあるけれど、舌技は蜜に任せているから問題はない。うん、ないともさ。

「正当防衛、警部が証言してくれるってさ。だから問題は家宅侵入や違法物所持の方ね」

「そっちはまあ、優秀な弁護士雇ってあるし……できるだけ軽くしてもらいますよ。友達に同性愛者の弁護士がいるんで」

しばらく裁判所通いかと思うと少し気が滅入るけれど、それ相応のモノを得たから後悔はない。

「そうそう、例のホテルの作業服、非番のロッカーからなくなってた一着が彼の部屋から見つかって。で、調べたら彼の毛髪やら

何やらが裏地から検出。彼が触れたのは間違いないってのが鑑識の見解」

「そう」

「でも、ま、それだけじゃ証拠して薄い。証拠偽造自体はできるしね。警察としてもあなた達を一度疑った手前、そう簡単に間違いでしたとは言えない。だから本命はこっち」

言って彼女はスーツの内ポケットから証拠袋を取り出した。中に入っているのはヨレヨレの封筒。和樹君の持っていた物だ。

「中身はこれ。警察に届けられる事のなかった告発文……てどこかな」

もう一つ取り出した袋には三つ折り目のついたA4用紙が入っていた。

「……『ハート連続殺人事件の犯人は桜川蜜と白藤桃。内山広一は無実、彼にはアリバイがある』、ですか」

「紙、かなり古くてね。それと封筒。この柄のはね二〇〇八年十一月に廃版してる。おいそれと用意できるものじゃない。彼の指紋がベタベタ検出されたわ。たぶん、何度も開けては閉じてを繰り返してたんでしょね」

「それで羽虫も落ちましたか」

「ええ、蚊だけにね。ついでに警察庁からも落ちるらしいわよ？ 解雇処分だって。何でもお上さんに無断録音の件がバレたとか。……どっから漏れたんだろかね？」

「あの部屋、声が漏れやすかったからねえ」

「と言っても警部以外近くには居なかったってよ？ それに仮にも警察が証拠なしでそれを信じるわけないでしょう？」

「……ま、レコーダーが壊れたって、データまで消えるわけじゃないし？」

「そのお上って警視監の事なんだけどさ、知ってる？ 最近娘さんが結婚したんだそうよ」

「へえ……それはおめでとございます」

「若い娘さんでそりゃあもう格好良くて警察庁でも有望な旦那さんをゲットしたらいいんだけど、仕事は続けてるらしいよ？　大学の先生」

あーはいはい、参りましたよ。

「困難に直面した時、身を助くモノは芸でもお金でも権力でも単位でもなくて　人間関係よ」

「……単位？」

「こつちの話。彼は出世ばかりに目がいつてその辺を見失つてたのかもね」

「そうね。助けってくれるお友達が居ないお陰で、あの人色々と責任取らされるつてさ。見込み捜査はともかく、それで大学生一人追い詰めて犯罪に走らせたのはまずかった。それが娘さんの新婚旅行をタダでプロデュースした恩人だつていうんだから、人間感情としても許し難いわよね。何よりその原因が警察側にあるとはつきりしちやつてる上に、証拠まで握られてちや誤魔化しようがない。それにほら、最近さマスコミに警察散々叩かれてたでしょう？　悪評が溢れ出してただでさえ悪かった警察全体の信用はガタ落ち。雖人形みたいに厄を押し付けられたみたいよ」

「蚊取り線香にやられましたか」

「どつちかつて言うつと殺虫剤ね。速効で決まつたらしいし。それだけでもお気の毒つて感じなのに、さらに奥さんの方にやたら腕のいい女弁護士がついたんだつて。なんでも同性愛者の。娘さんの親権は奥さんに行くんでしょうね」

「そりゃ職を失つた人間に子供まで養う余裕があるとは思えませんしね」

そもそも蜜を泣かせておいて赦されるとでも？

小汚い指なんかじゃとても気が済まない。

私の愛しき人を泣かせた代償は彼のこれからの人生全てだ。

今後彼が就職しようとする度、その先々で彼の不祥事が噂になつても私は驚かない。

ええ、全く驚かないのです。

希望の光が一筋も届かないような惨めな人生が彼には用意されている。

「泣きつ面に蜂、虎口を逃れて竜穴に入る、弱り目に祟り目……まあ自業自得だけど。ところでさ、そのマスコミ攻撃（、）、二件目の殺人が起こってから始まったわよね？」

……全く、分かってて訊くんだから人が悪い。

「……裕子ちゃん」

「うん？ あ、一人目の被害者の事？」

「彼女、勉強熱心な文学少女でしてね？ ハート事件の時から犯罪や警察に関心を持ったらしくて、前に頼まれたのよ、警察の不祥事を題材にした小説を書きたいから調べてくれないかって。女の子にそう頼まれちゃ私としては全力で調べるしかないでしょ？ 本当は彼女が殺された日渡すはずだったんだけどね。結局渡せなくなっちゃってどうしようかと思ってたんだけど、有効活用できてよかった」

「警察に睨まれるわよ？」

「警察に信用がないのは初めっからよ。むしろ今回の件は見せかけだけでも誠意を見せて不祥事を認める事で、警察に自浄作用があるとするチャンスになる。蜜を助けられて私は満足、警察も信用を回復できて満足。両勝ち（Win-Win）、でしょ？」

もちろんその警察の中に、猪俣元警視正は入っていないけれど。

「わつるい娘だなあ。ああ、ちなみに私も勝ったから三人勝ち（Win-Win-Win）よ。本庁の方からお呼びがかかったの。蹴ったけどね。でもまあ、警部になるのに時間はかからないわ」

「わつるい警官だなあ。梶川さんに伝えてよ、ご愁傷様って。あつ、あと娘さんはきつと誇りに思ってくれてるって」

「余計へこむと思うけどねえ。ま、伝えてみるわ。これから合流するし」

彼女はそう言って立ち上がった。

「……その桃」

私は幽霊が置いていった箱を指す。

「悠志君に供えてあげて。私は食べれないし」

「了解」

白桃一つを片手に可奈さんは病室のドアをスライドさせた。

その先の廊下に屈強な看護師が佇んでいるのが見えた。

いや、もう逃げ出さないしさ。せめて女性を指名させてほしいんだだけ。

逃げられそうにない鉄壁の姿が扉に遮られていき、　けれど完全に消え去る前にドアは再び開かれた。

「ああそうだ」

扉の隙間から顔を覗かせたのは可奈さん。

「あなたはと思う？　さっきの手紙の『アリバイがある』ってやつ。幾ら彼にとって内山広一が唯一の交流であったとしても、その言葉をそのまま鵜呑みしたと思う？　内山広一は彼にプリントを持って行っていた。ハート事件最後の二人は彼の犯行だとしても、残り四件の内どれかとその訪問時刻が重なっていたとしたら？　凶器を家庭課室から持ち出して元に戻すという事は、別の人間がそれを持ち出す可能性があるという事よね。もし彼が前の四件を起こした犯人と同じ学校で同じ包丁を持ち出すなんて奇跡が起きていたとしたら　」

「どういう事になるんだろうね？」

彼女は最後に意味ありげにそう言い残して今度こそ去っていった。

「馬鹿ですよね、あなたって」

開口一番、若奥様はぼつさり私を切り捨てた。

「馬鹿ですよ馬鹿、馬鹿過ぎます馬鹿が歩いているような馬鹿ですね」

「教え子にそこまで言いますか」

「これは授業で散々からかわれた仕返しです。ファンタジー論の授業も終わって大学ではもう接点もないでしょうし」

「なら仕方ありませんね。そう言えば後期の授業、先生は相対性心理学をやるらしいじゃないですか。楽しみにしてます」

「ちよつ、恐ろしい事言わないでくださよお」

そんな楽しい掛け合いの後、彼女は自分で切った桃を美味しそうに頬張る。

そういう可愛らしい仕草が大学での人気の秘密なんだろう。人妻になったというのに、私とは違った意味で罪作りな人だ。

私も私で見舞いの際に蜜に持って来てもらった携帯ゲーム機を弄り始めた。ゲーム機とは言っても中は全くの別物で、本体自身のシステムソフトウェアは抜いてパソコンのOSが突っ込まれている代物だ。よって入っているゲームは全てパソコン用で、始まるゲームもパソコン用のシューティングゲームである。

彼女が桃を丸々一つ分食べ終わり、私がステージ1のボスを倒した辺りで彼女は「そう言えば」と口を開いた。

「授業と言えば、例の小作文。何ですかアレ、官能小説かと思えば実はホラーだなんて。オカズにもなりませんでしたよ」

「それは悪……いやいや、私が悪いんですか？」

「悪いんです。何が読者を惹きつけるテクニクですか」

「ファンシーでファンタスティックとは言わずも、ミステリアスな物語が展開したでしょうよ」

「いやホラーでした。まあ、ともかく、はい」鞆から私の走り書きのレポート用紙を取り出して、差し出しながら彼女は言った。「やり直し」

「えええ？ 授業とうに終わって夏休みなんですけど？」

「単位あげませんよ？」

「だから私理工学部なんですって」

「じゃあ、後期の私の授業受けさせません。定員漏れで弾いてみせます」

「それは困る」

私の趣味とお小遣いの収入源がなくなるじゃないか。

「だったら書き直してください」

「はいはい分かりましたよ。……あ、そうそう一つお願いがあるんですけど」

「はあ……なんですか？」

「指輪買いたいんですよ、婚約指輪……いや結婚指輪なのかな？」

それで経験者の意見が訊きたくて

「

10、エピソード 名探偵の存在証明

まるで浸水したように、あれだけ床を満たしていた資料は元あった場所に戻り、テーブルの上のカップも全て食器棚に並んでいる。ホワイトボードも拭き掃除して白さを取り戻し、ボロボロだったコルクボードは買い換えた。

人食いパンダの切り紙は原作者に引き取られ、代わりにまた白いボードに書き直されている。「がおー」と棒人間を貪るパンダが今度は二匹、片方はメスなのか左耳にリボンを付けていた。

応接間をオープンに演出する、壁面ガラス越しに差し込む夏の日差しは心地よく、クーラー独特の人工的な冷たさが肌を撫でている。それは一ヶ月前までと同じ平穏な生活の象徴で、苦悩や不安の取り除かれた世界は心の加減で眩しく見えた。

戻ってきた日常。戻ってきた蜜。

久し振りの憂慮ない日々、久し振りの二人きり。

来訪者の居ない応接室の奥、生活スペースになっている一室。仄かにグレイプフルーツのアロマが香り、開け放たれたドアから差し込む光の中、ベッドで私は蜜を押し倒していた。

重なる手と手、それぞれの左薬指には誕生石をあしらった指輪が嵌めてある。蜜の指にはアレキサンドライト、私のはピジョン・ブラッドルビー。婚約指輪で、結婚指輪。

長い、長い口づけの後、ポジションを逆転させようと身体を擦る彼女を抑え込んで言った。

「駄目よ、今日は私が攻め。蜜はネコ」

「んー、何か恥ずかしい……」

「恥かしがってる蜜も可愛いわよ？」

触れる額、鼻尖、二度目のキス。絡めた手を離して、今度は彼女の太腿をなぞっていく。柔らかい感触、火照った温もり。

どこか遠くから聞こえる蝉の声が、透通った光の色が、昼間とい

うこの時間を強く意識させる。夜とはまた違った心地良さ。

指が布地を引っかけて、いよいよというその瞬間、ケータイが鳴った。

せつかくの雰囲気の水を差された事に顔をしかめる。見れば、着信は可奈さんからだった。

蜜に「待つてて」と念を押してから、お邪魔虫をひっ掴み部屋を出た。

「もしもし……」扉を足で閉めながら応答する。「可奈さん？」

「あーもしもし」

大して久しくもない、けれどいつもとは調子の違う彼女の声。それが単にスピーカーを介しているからなのか、それとも彼女自身がそうしているのかは判断しかねる。

そもそも用事があればそれを理由にサボりに来るような人間なのだ、思えばこうやって電話を通じて話すのは初めてだった。

「……どうかしたんですか？」

「うん、用事があったね。でも、その前に……結婚おめでとう、桃ちゃん」

「ああはい、ありがとうございます……？ ああ、それで用事っていうのは？」

蜜を待たせているのもあって、時間をかけたくない私は単刀直入に問いかけた。

「うん、まあ、ほら……」

けれど返ってきたのはそんな要領を得ない言葉。

電話をかけてきた側であるのに関わらず、何やら躊躇しているらしい。

その様に思い当たる節があつて、私が僅かばかりケータイを握る手を固くした辺りで、

「池田君の事があるし、一応さ」

彼女は、

「今を逃がすと……もう機会はないだろうし」

煮え切らない物言いで、

「これだけは訊いておこうと思ってね」
そう切り出した。

「桃ちゃん。……桃ちゃんは今回の事件　どう、思ってるの？」

……。

……ふうん？

……それは　それは一体、どういう意味で……なのだ
ろうか？

押川友恵ちゃんが犠牲になった事について？　佐々木裕子ちゃんが犠牲になった事について？　道元麻央さんが犠牲になった事について？　あるいはエレベーターに投げ込まれた犠牲者や御伽の国の犠牲者の事？　それとも池田悠志君が犠牲になった事？　ああ南城和樹君の事、とか？

いやいやいや、違うんだろうなあ。

たぶん、彼女が言いたいのはハート事件の被害者である温井見美々ちゃんや中島梨奈ちゃんや畑明日香ちゃんや有田夏美ちゃんや濱口朋子ちゃんや中谷真希ちゃんや、

内山広一君の事を含めた？全て？の事について、なんだろう。

……視線の先、雲が陽を閉ざし始めたのか、影が動いて部屋を満たしていく。

少し暗くなった室内。テーブルのガラスに反射する自分の表情。

ケータイ片手に移動する、その際に、テーブルの端にはみ出していたレポート用紙が足に引っかかって床に散らばった。

強制返却された課題小作文。

何気なく落とした視線、その目に映るのはファンシーでファンタスティック、ミステリアスでホラーな夜の情事　すでに抵抗する気を根こそぎ吸い取られている私はされるがままに身を委ねるしか

なく、やがて太腿まで下がっていった指はショーツに手をかけ、手際よく抜き取ったソレで彼女は私の首を絞めた。息が詰まる感覚にはもう慣れた。朦朧する意識の中、彼女の顔を撫でる。それが合図、首にかかる圧迫感が抜け、代わりに太腿に走る鋭痛。僅かに光る刃物が暗闇に揺れている。指の腹が傷を撫でて、付着した血を舐め取る艶めかしい音が響いた。その間、私は彼女の身体を愛撫し続けていたけれど、今度はその腕に作った傷を直接舐められてくすぐったい感触が 『身体が持たないかもしれない』 『蜜に殺されそうだが』。その言葉が意味する事など、吟味する必要も、わざわざ口にする必要もないだろう。

犯人は蜜、そんなのは最初から分かりきっていた事じゃないか。
振り返ってみればいい。

初めの初めから 私の目的は『犯人探し』。犯人に相応しい人間を探してた。

内山広一が犯人？ だったらなんて彼は自殺した？

南城和樹が犯人？ それなら何故、六人も人間を殺めたはずの彼は私に軽々殺された？

『天才的行為を成すのに天才である必要はない』？ 何よそれ、馬鹿みたい。天才は天からの贈り物如き才能に恵まれた人物を呼称するからこそ？天才？なのだし、そもそも『天才は素質の有無ではなく才能の片寄りで生まれる』というのなら、『命の重さ』が紙切れのように軽い事を『誰よりも知ってる』蜜は、妹を目の前で殺された蜜は、ずっとずっと……両親を殺す事ばかりを考えていた。ハート事件自分達で終わらせたのは何故？ 同じ手口なのは何故？ 蒸し返したのは何故？

それを説明できない限り、私達を犯人扱いできないというのなら、要はそれさえクリアできればいいわけで、

さあ、『犯人になったつもりで』考えてみよう。

『一般人』の感覚『では解けない』、そもそも蜜は緘黙で失感情症、自分の気持ち把握する事もそれを表現する事も感情が複雑になれ

ばなるほど難しい。『天才と呼ばれる人間は才能に自己表現を依存しがちだ』とするのなら、彼女にとって他傷行為とは、殺人行為とは何を意味するののか？

快楽犯（、、）が何故わざわざ自分達で事件を終わらせた？
それがそもそもの間違いなのだ。

……だってアレ、快楽殺人じゃないんだもの。

四肢切断？ そんなモノはオマケにすぎない。二番煎じ事件を見れば分かるように、彼女は四肢切断に大して拘っていないし、内臓摘出に関してはハートを模すためにそうしているだけで、そこに猟奇的な意味など一切全くこれっぽっちもありません。

『一歩間違えれば監視カメラに写ってしまう状況下で、わざわざ四肢と東部を放り込むような真似をする理由』、死体にわざわざオオ女将さんの着ぐるみを着せた理由、それが単に難易度を上げる事で、『あまりにも完成された殺人』を行う事で、貢物（、、）としての価値を上げるためだと 誰が思うだろうか？

唯一どの殺人にも共通している、手に包まれた心臓が、手が模したハートがまさか ラブレターを封かんするハート型のシールや、メール文の最後のハートマークと同じモノだと 誰が思うだろうか？

ハート事件当時、私は蜜に告白していた。『親密になったきっかけ』だったハート事件は、私の告白に対する蜜精一杯の返事だったけれど、罪を犯した蜜に対して、私の口だけの愛情表現はあまりにも釣り合わない。『蜜の好意に見合った行為で報いる事』それが私のポリシー』だからこそ、改めてそれに応えるために、従犯を犯して罪を分かち合うために、『自分達で終わらせた』。

じゃあ今回の事件は？ 『ハート事件の二番煎じ、告白の二番煎じ』 告白の次、告白に似たモノ。私の告白が前回の引き金なら今回の引き金は？ 『蜜が望んでいた』 『結婚式』 プロポーズ、結婚、入刀、共同作業（、、）。女同士では『籍は入れられない』。なら、その代りを考えればいい。それで蜜はハート事件を思

い出したのだろう。あの時と同じように、ケーキを分けるように罪を分けて、罪で二人を縛る事。それが？二番煎じ？の意味、そして事件の動機。私がそれに気づいたのは結婚式のDVDを見た時だった。道元さんの時、私は彼女の意図に気づかず解決しようとした。が、それでは駄目だったのだ。それでは意味がなかった。だからその時点では犯人するわけにいかない道元さんは殺された。そう、私がもう少し人の心に機敏であれば、蜜の気持ちに気づいていたら、道元さんが犯人になって事件は終わって、五件目・六件目は起こらなかつたし、悠志君は死ななかつた。

悠志君の死……あれは失敗だった。男を残せば殺しはしないと私は考えていたし、可奈さんもおそらくはそれに気がついていたので『立候補しな』かつたんだろう。なのに、まさか殺すなんて。そこまで私を愛してくれているなんて思わなかつたから。けれど、男性恐怖症だからこそ（、、、、）、天才の彼女であつてすらその結果は惨憺たるモノだった。

そうやって追い詰められるところまで追い詰められて、やっと密の思惑に気がついた私は、気づいたが故に『私が』という点に拘らざるを得なかつた。だって、どうしても私がやらないと……私じゃないといけなかつたから。私が応えたかつたから……！

だから私は罪の扉を開いた。『錆びて赤茶色くなっている鉄製の階段は一段上る度に軋む』『ガンガンという外からの音』、タイミングは計れた。先に梶川さん（、、、、）に連絡を入れた理由はいうまでもなく、『和樹君は熱帯魚好き』、『酸性に傾く』『水槽の水』、化学の実験、電気分解、水に加えた食塩の意味。『五〇〇万ボルト』『大丈夫、問題ない』。彼の毛髪やら何やらが裏地から検出』された作業着、『顔を殴つ』た『鞆の中のモノ』は何だった？『ハート連続殺人事件の犯人は桜川蜜と白藤桃。内山広一は無実、彼にはアリバイがある』。それは誰の言葉で、『皺の寄った柄付きの封筒』は誰からの贈り物？いきなりの告発文に彼は戸惑い『何度も開けては閉じて』封筒を確認したことだろう。『

古』い紙？ 『二〇〇八年十一月に廃版してる』封筒？ ハート事件があんな『そこまでやるとは私も思わなかった』結末を迎えて、名探偵という火の粉払いを始めたような私達が、他に何も用意してない？ 『私にも私の伝つてものがある』わけで、『インパクトのある演出を私にですらプロデューズできる』 じゃんこ虐殺事件同様、ハート事件も『完全に紙面やニュースから消えていた』

『報道テロ』は誰の仕業？ ハート事件で暴言を吐いた『今はもう警察には居ない』刑事はどうなった？ 二番煎じ事件の責任を取らされた結果、『羽虫』はどうなった？ 『希望の光が一筋も届かないような惨めな人生が』 『用意されている』彼はさぞ私達を恨んでくれるだろう。恨まれる事は容疑者候補者が増えるという事。『私達に恨みを持った人物は今も昔も掴み放題』 『恨みという恨みを大人買い』。真犯人説、実はハート事件の犯人はまだ生きています。そんなあまりにも信憑性に欠ける説も、和樹君によるとされる告発文によって現実味が増した。これで次の時（、、）には使えるだろう。

『この世に人の愛ほど怖いものはなく、触れぬ神にたたりはない。冤罪先の候補者になりたがる人間などいないが故、可奈さんは沈黙した。『わつるい娘』と『わつるい警官』。『憎まれっ子世にばばかり』、この世の中はどういうわけか、悠志君みたいな善人ばかり死んでいく。

ミステリーが不思議の国のアリスというのなら、気狂い帽子は誰だったのか。

『犯人探しは椅子取りゲーム』。名探偵の私の役目は、泣こうが喚こうが強引に引きずって、蜜以外の誰かしらを犯人席に座らせる事
ほら、『冤罪なんてものはそれこそすぐ傍に潜んでいる』

『無実の広一君』や『私を好いてくれた和樹君に』罪を『なすりつけた極悪非道な人物』。それが私。

『さあて、新たな情報も出てきた事だし、改めて自己紹介をしよう。

私の名前は白藤桃 人間の屑だ』。

五年前　美々ちゃんが蜜に殺されたのも、梨奈ちゃんが蜜に殺されたのも、明日香ちゃんが蜜に殺されたのも、夏美ちゃんが蜜に殺されたのも、朋子ちゃんが蜜に殺されたのも、真希ちゃんが蜜に殺されたのも、広一君が自殺したのも、今回　友恵ちゃんが蜜に殺されたのも、裕子ちゃんが蜜に殺されたのも、道元さんが蜜に殺されたのも、他の二人が蜜に殺されたのも、悠志君が蜜に殺されたのも、和樹君を殺したのも、『悪いのは全部私』。信頼を寄せてくれる実を騙し、友達である広一君に罪を着せて　私はあの時、あまりにも多くを裏切り過ぎた。人並みの道徳心と倫理感を持っている私は自傷行為に走り、それでも解消し切れなかった『精神負担は胃に』。

それでも私は蜜だけは失いたくなかった。

『蜜の全てを守る事が、私の全て』。

だから蜜を傷つける人間は要らない。だから蜜を縛る法は要らない。

警察も検察も裁判所も、時効撤廃も裁判員制度も永山基準も殺人罪も要らない。

そんなもの、全てなくなってしまうばいい。

私のそんな身勝手な言葉も、『容疑をかけられる立場に』　犯人という立場になって考えれば、『相手の気持ちを勝手に想像して』被害者に同情できるテレビ前の大衆は、当然こっちも（、、）の主張も理解できるはずだ。

だけれど、そのあまりにも醜悪な考えを皆が皆見て見ぬふりをしてるわけで、大衆の意思と利益を優先するこの社会は、私達の存在を赦さない。

『そんな世界の中で、私は蜜と出会った』　『もうあるか分からない運命のような出会い』。

……けれど、私達の時間はきつと、そう長くは続かないだろう。

『天網恢恢疎にして漏らさず』、私達の罪はいつか暴かれる。きつと、次は……ない。あるいは私が蜜に殺されるのが先だろうか。す

でに私の身体はボロボロだ。『不老不死』になりたい　蜜の傍に居るには、この身体はあまりにも、脆いから。私達の時間が、できるだけ長く続きますように。

私はずっと蜜の隣に居たい。蜜とずっと一緒に居たい。ずっとずっと一緒に居たい。

だからせめて、高らかに宣言しよう。

幽霊はどうせ今もお得意の幽体離脱で見ているのだろう。可奈さん、そして幽霊。仲人が二人も居るのなら、私にとっても絶好の機会だ。

『どう思ってるの　？』　その問いかけに対する私の答えは一つしかない。赤い宝石をあしらった左手薬指の指輪を胸に当てる。

テーブルに映る晴れやかな笑顔。

目尻の涙と綻ぶ唇。

身体を満たす幸福感。

一息吸って、私は誓いの言葉を紡ぐべく口を開いた。

私は……私は

「 私は蜜を愛しています」

10、エピソード 名探偵の存在証明（後書き）

ルビー。石言葉は『純愛』。

アレキサンドライト。石言葉は『秘めた思い』。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8467u/>

白桃シロップ

2011年7月17日03時23分発行